

目次

1. はじめに	1
2. 選定取組の内容	2
2.1 取組の趣旨・目的・達成目標（平成 21 年申請書抜粋）	2
2.2 取組の具体的内容・実施体制等	3
2.2.1 取り組みの具体的内容	3
2.2.2 入学前教育科目「コミュニケーションリテラシー」開発のプロセス	4
2.2.3 取組の実施体制	4
2.3 取組の評価体制・評価方法	4
2.4 平成 21 年度成果	5
2.5 平成 22 年度成果	5
3. 平成 23 年度補助事業	8
3.1 全体概要と目的	8
3.2 本年度概要	8
3.3 平成 23 年度成果	9
4. 事業活動報告	10
4.1 高大産連携キャリア教育フォーラム	10
4.2 e-ラーニング検討ワーキンググループ活動	51
4.2.1 第 3 回 e-ラーニング検討ワーキンググループ ミーティング議事録	52
4.2.2 第 4 回 e-ラーニング検討ワーキンググループ ミーティング議事録	53
4.2.3 第 5 回 e-ラーニング検討ワーキンググループ ミーティング議事録	55
4.2.4 第 6 回 e-ラーニング検討ワーキンググループ ミーティング議事録	56
4.2.5 e-ラーニング検討ワーキンググループ 資料	58
4.3 視察研修・調査研究報告	68
4.3.1 米国研修（Chicago Shakespeare Theater Education Department）報告	69
4.3.2 研究会・学会報告	82
4.4 ソーシャルコミュニケーションワークショップ	100
4.5 コミュニケーションリテラシー実施報告	102
4.5.1 コミュニケーションリテラシー実施状況と授業内容	102
4.5.2 TA・SA 会	105
4.5.3 TA・SA 報告	105
4.5.4 コミュニケーションリテラシー授業の実施	107
4.5.5 コミュニケーションリテラシー受講生へのアンケート結果	110
4.5.6 e-ラーニング	118
4.6 高大連携連絡協議会（予定）	120
4.7 シラバス調査	120
5. 効果の検証と今後の課題	125
5.1 コミュニケーションリテラシーの効果検証	125
5.1.1 前年度受講者アンケート	125
5.1.2 社会人キャリア力育成アセスメント	127
5.1.3 GPA 変化	129
5.2 報告・論文	131
5.3 まとめと今後の課題	132
謝辞	134

1. はじめに

本書は、文部科学省に平成21年度に「大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム」（3年間）として選定された、「現代型社会人育成を俯瞰する入学前教育構築」の3年目（平成23年度）の事業活動の報告書である。本報告書は、別途文部科学省に提出された「大学改革推進等補助金の実績報告書」の補足資料として、平成23年4月1日から平成24年3月15日までに実施された今年度事業の詳細を記述するものである。

本事業の目的は、「2年間という限られた時間内で専門教育のみならず社会人として必要な能力を涵養する教育を実現するため、湘北短大型の入学前教育を確立する」ことである。より詳細には、高大連携協定を結んでいる27高校の教員と本学教職員で組織した教育研究会の中で調査や研究を行い、議論を重ねて試行した高大連携校からの入学生対象の科目であった「コミュニケーションリテラシー」を拡大発展させ、段階的に受講対象者を増やし、リベラルアーツ教育全体を最適化して全入学者を対象とする入学事前授業を実施する。そのために連携高校教員、本学教職員、企業人を交えた「リベラルアーツ教育研究会」を組織し、①高-大-産連絡協議、②入学前教育の実施、③検証、④教育内容の研究、を行う。これらを繰り返し実施することでPDCAサイクルを構成する。高-大-産連携のこれら4つのプロセスの積み重ねにより、リベラルアーツ教育全体が最適化されることになる。

上記教育支援プログラムの本年度事業を実施するに至った経緯が明確になるよう、申請時点（平成21年）における取組の内容（2章）と22年度の成果のまとめを掲載した。なお、22年度、21年度の実施詳細は、22年度報告書（http://scopp.shohoku.ac.jp/cms_scopp/data/h22_v1_file_up01.pdf）、21年度報告書（http://scopp.shohoku.ac.jp/cms_scopp/data/h21_file_up01.pdf）に記載済みである。

3章には、2章を踏まえて平成23年度に計画された事業内容と成果を示した。本年度は、3年間で達成すべき目標である「湘北短大型の入学前教育の確立」に向け、ほぼ全数（推薦I、II期で入学予定者の80%以上）が受講する授業を実施する段階にあたる。

4章でこれら3章の内容の詳細を述べている。23年度の入学事前授業「コミュニケーションリテラシー」を開講するにあたり、昨年度試験的に実施して一定の評価が得られた「ノンバーバルコミュニケーションの講義」と「e-ラーニング課題」を組み込んだ。より一層の内容の充実と確実を期するために、研修とe-ラーニング検討ワーキンググループの活動が主となった。作業の効率化（4グループ、400人規模の受講生対応）を図り、また、教育効果の検証のために客観的な評価を導入した（社会人キャリア力アセスメントの実施、企業からのアンケート評価）。入学前教育の内容の一層の充実をめざして①調査研究（研究会での発表・調査、海外ノンバーバルコミュニケーション教育事例視察研修、e-ラーニングの検討ワーキンググループ活動）、②情報発信（キャリアフォーラムの開催、パンフレットの作成）、③プログラム実施の効率化（授業実施のための機材整備、テキストの作成と市販）、④高大産連携（高大産連携キャリアフォーラム、インターンシップ先でのアンケート調査）等を行った。

5章では本取組の効果検証実施状況を述べ、まとめとした。

本取組は、代表者 米澤 健一郎学長、取組責任者 小棹 理子（情報メディア学科教授兼リベラルアーツセンターメンバー）、山本 滋（学長室 室長）、佐藤 清彦（事務局次長兼教務部長）、岩崎 敏之（生活プロデュース学科教授兼リベラルアーツセンター長）の計5名の申請チームが中心となっている。平成21-23年度の事業は、代表者である学長のリーダーシップのもとに全学的に遂行され、全学横断組織である「リベラルアーツセンター」がその実務的な企画・運営にあたっている。同センターは現在、教授クラスのセンター長のほかに4学科から選出された5名の教員と職員3名の、計8名からなっている。

2. 選定取組の内容

2.1 取組の趣旨・目的・達成目標（平成21年申請書抜粋）

(1) 取組を実施する背景

湘北短期大学は、「社会に本当に役立つ人材」を育てる実務教育を志向している。短期大学の2年間という制約下で、一人一人の個性・能力を伸ばしつつこのような人材を育成するためには、専門教育のみならず**一般社会人が備えるべき基礎能力**の向上が不可欠であり、本学では**リベラルアーツ教育**がその任を負ってきた。しかし、高等教育へのユニバーサル・アクセスが進む中、入学者選抜の方法の多様化や高等学校における履修状況などを背景とした問題が顕在化している。すなわち本学では、約500名が推薦入試やAO入試で入学を決定するため、彼らの多くが大学で学ぶことの意味や、2年間で達成すべきことを十分に理解しないまま入学したり、推薦入試日以降は勉学意欲が低下したまま安逸な高校生活を送り、それが大学入学後も継続したりすることが指摘されている。

これら問題点を解決するためには、早期に大学で学ぶことの動機づけを行うことが必要である。特に大学では高校での学習内容とは異なり、職業をもつ一般社会人が備えるべき基礎能力を身につけることが重要であることを早期に理解させることが必要である。換言すれば、実社会で必要とされる能力が湘北での2年間を経て身に付くという予感を生徒に持たせることが必要である。このような要求に応える教育プログラムのひとつとして、**高校3年次の進路決定後**に大学初年次教育を開始する入学前教育が考えられる。実施に際しては、多くの高校では自主学習期間にあたる高校3年次の2月から3月を活用できる。

幸いにして本学は、神奈川県・東京都の高校27校と高大連携協定を結んでおり、例年連携校からの入学者数は、全数の約1/3を占め、200名を超える。上述の入学前教育を構築するにあたり、第一ステップとして、**本学への入学が決定した高大連携校の高校3年生**を対象とした「コミュニケーションリテラシー」を平成19年に開始し、20年に単位認定科目として設けた。連携校から本学への入学が決定した生徒約200名のうち、希望者110名を対象とした。この内容は、2年にわたり連携校教員と本学教職員で開催してきたコミュニケーション教育研究会での調査研究と討議を重ねて決定した。なお、20年度実施の「コミュニケーションリテラシー」受講生へのアンケート調査を行った結果、受講生から単位科目として一定の評価を受けていることが窺えた。また、受講後の感想として約80%が「大学と高校の勉強の違いを理解した」、と答えており、「問題解決法の知識の獲得」も有意な結果（42%）が得られている。特筆すべきは、「入学後の勉学意欲の向上」の伸びが見られたことであろう。

「コミュニケーションリテラシー」は受講者からも好評で、一定の評価が得られたが、現時点では入学者の約1/5のみしか受講できず、今後の発展拡大が強く望まれている。

(2) 取組の具体的な目的

本取組の目的は、職業を持った社会人を育成することを意識した、短大における入学前教育科目を完成させることである。より具体的には、平成20年度にプロトタイプとして試作した、高大連携高校からの入学予定者を対象として設けた単位認定科目である「コミュニケーションリテラシー」を拡大発展させることを目的とする。このような本学の取組は、中教審の「学士課程教育の構築に向けて」に十分に定めるものである。「コミュニケーションリテラシー」は、リメディアル教育でも専門教育の事前学習でもない、いくなれば社会人として必要とされる基礎能力を養成するための「湘北短期大学型入学前教育」をめざすものである。同科目は入学後の2年間で身につけるべき基礎能力を俯瞰できる全15講から構成され、入学前の2月から3月にかけて90分/講で12講を受講し、入学後3講を受けて単位認定される（2単位）。

(3) 取組による達成目標

本取組により、達成する目標は下記のとおりである。

① 平成21年度達成目標：高大連携校からの入学予定者全数（約200名）を対象とした「コミュニケーションリテラシー」への進化

本科目は、複数教員で担当しており、200名規模に拡大進化させるには、講義内容の見直しや調整、それに伴う新規テキストの作製が必要となる。また、非常勤講師の新たな登用、クラス運営方法、効果の検証の検討を行わなければならない。このため、高校教員と企業人を交えた調査研究や意見交換の場としての「リベラルアーツ教育研究会」を定期的で開催する。特に、効果に関しては、受講前と受講後に確認試験を実施して検証すると同時に、受講生へのアンケート調査を実施して満足度80%をめざす。テキストマイニングなどの解析方法も導入し、学生の理解度を把握する。

② 平成22年～23年度達成目標：全入学生（約600名）を対象として規模を拡大した「コミュニケーションリテラシー」の最適化

「リベラルアーツ教育研究会」は、平成21年度同様、定期的で開催して入学前教育である「コミュニケーションリテラシー」を最適化することを目標とする。600名規模に拡大するには、さらなる講義内容の調整とテキストの作製が必要となる。また、非常勤講師の新たな登用、クラス運営方法、効果の検証の検討を行わなければならない。さらに、高大連携校のみならず、遠方からの入学生への対応等も検討する必要がある。

2.2 取組の具体的内容・実施体制等

2.2.1 取り組みの具体的内容

湘北型入学前教育である「コミュニケーションリテラシー」の特徴として下記が挙げられる。

- ・ 2月から3月にかけて入学前に12講（4日間）を開講し、入学後4月に残りの3講を設けて計15講とし、評価を受けた学生に対し**2単位**を認定する（1講＝90分）ため、入学前に大学の講義・演習をひととおり受けることになる。
- ・ 本学で学ぶ「**一般社会人が備えるべき基礎能力**」の教育内容が**俯瞰**できる構成となっているため、リメディアル教育でも専門教育の前倒しでもない、いわゆる4年制大学の**初年次教育**と**キャリア教育**が融合した性格を持つ。
- ・ 「**コミュニケーション力**」をここでは「（読む・書く・話す・パソコン活用）の力により他人とともに仕事をする上で必要な能力」と定義し、この力を向上させることを目的とする。そのために、グループ（5～6人）で問題を設定し、同問題の解決にあたり、そのプロセスと結果の報告を**プレゼンテーション**する、という小規模PBLを実施することにより、コミュニケーション力の向上と**課題探求・解決能力**の獲得を意識している。
- ・ 受講生（2年生）を**SA（Student Assistant）**として採用することで**双方向型授業**としての性格を強化し、かつ昨年の受講生にとっても後輩を指導することで自らも成長する学びの場となるよう配慮している。TAはファシリテーター役である。他大学から院生など上級生を採用する。授業による効果を高めるためには、准教育者であるTA・SAにもその意識を持って授業に臨む必要があり、また、自身の気づきや、相互に意見交換する場としてTA・SA会を設けている。

2.2.2 入学前教育科目「コミュニケーションリテラシー」開発のプロセス

高校と大学の教職員、企業人を交えて、職業を持った「現代型社会人」¹に必要とされる能力は何かを考え、そのような人材育成のための具体的な教育内容や教授方法を再検討する。全学的な研究会とすることにより、専門科目との関連性も議論できる。必要な教育カリキュラムを策定するために、下記を実施する（図 2.2-1 参照）。なお、この4つを繰り返し実施することでPDCA サイクルを構成している。

- ① 高-大-産連絡協議（講演会、交流会、フォーラム開催等。これらはFDとしての意味も有する）
- ② 入学前教育「コミュニケーションリテラシー」の実施（テキスト作成、SA・TA会の開催等）
- ③ 検証（社会人キャリアカアセスメントの実施、受講生の追跡調査）
- ④ キャリア教育など教育内容の研究（アンケート調査、海外視察研修など）

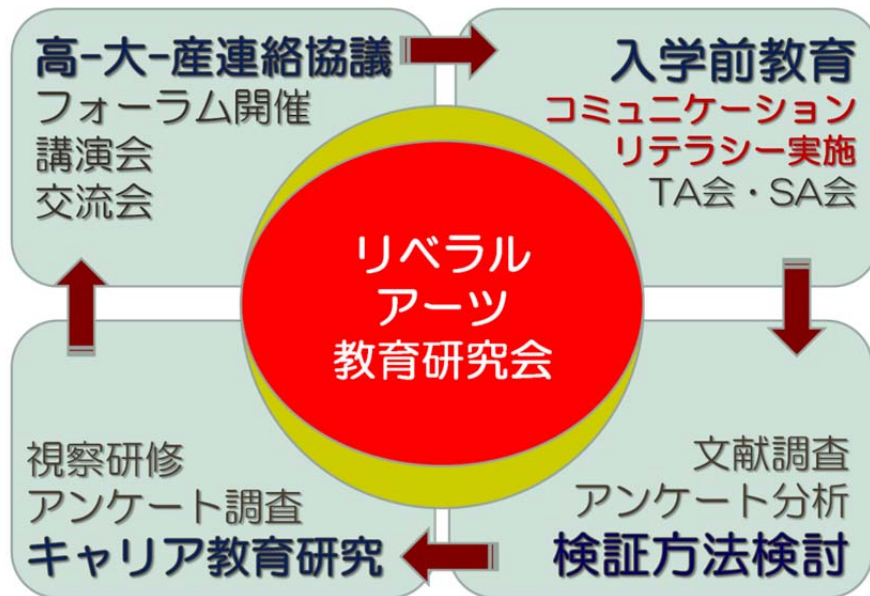


図 2.2-1 リベラルアーツ教育研究会の活動と PDCA サイクル

2.2.3 取組の実施体制

リベラルアーツ教育研究会は全学的な研究会とすることが全学会同で発表されている。これを担当するリベラルアーツセンターは、学長のリーダーシップの下に4学科6名の教員や図書館職員に加え、入試広報担当者、教務担当者、キャリアサポート部の担当で構成されており、学生の入学（入口）から就職（出口）までの一貫した教育取組が可能な体制となっている。

2.3 取組の評価体制・評価方法

本取組を評価するために、リベラルアーツ教育研究会内に評価部会を設置する。評価部会では評価方法を含め検討することになるが、三者の視点から評価を行う。すなわち高校教員からは高校3年次の進学決定後の有意義な接続教育となっているかどうか、就職担当者あるいは企業からは学生が正しい就業意識の醸成教育がなされたかどうか、そして受講者からは自身の振り返りも含めて職業を持つ社会人として自覚ができたかどうか、の評価である。そのためにはアンケートやアセスメントの実施が選択肢となろう。

効果の検証のために、下記の方法を実施する。(A)と(B)は、主に学生自身の自覚の調査、(B)と(C)

¹ 「現代型社会人」とは、平成18年度文部科学省選定大学改革推進事業プログラム「高大連携による地域教育ネットワークの形成」助成により、平成21年2月21日に開催したオープンなフォーラムである「現代型社会人育成のための高大連携」で問題提起、議論した「職業をもった社会に役立つ人材」を意味する。

は企業の観点、(D)は高校教員の視点からの、評価である。

(A) アンケート調査の実施

リベラルアーツ受講生に対するアンケートを実施し、結果を分析、フィードバックしつつ2年間で最適化を行う。また、新たな知見を得るための解析として、フリーコメント部分のテキストマイニングを試みる。

(B) 社会人力の推移の調査

本プログラムの目的のひとつである社会人力の向上を測る方法に関して種々模索した結果、アセスメントを実施することになった。社会人力は、知識ベースで測ることのできるものではなく、さまざまな場面で適切な態度・行動をとることができるかどうかで評価される。教育学上、個人の「気づき」があつてはじめて行動に変化が生じ、そのような行動が身に着くまで数週間を要することが知られている。そこで、「コミュニケーションリテラシー」の受講前である2月に社会人力アセスメントを実施し、入学後の4月に再度アセスメントを行うことによって、行動に変化が生じたかどうかを確認した。なお、このアセスメントは、自己評価と客観的な評価からなっており、後者は様々な場面で社会人として取るべき態度や行動を具体的に問うて評価している。

(C) 企業へのアンケート実施、企業からフォーラム・シンポジウムなどで直接評価の声を聞く

高大産連携キャリアフォーラムなどを開催し、本学の卒業生に対する評価や要望を直接聞くと同時に、企業へのアンケート調査を行う。

(D) 高大連携連絡協議会などで高校教員へのアンケート調査を行う

本学と連携協定を締結している27校に対するアンケート調査を行い、評価を得る。

2.4 平成 21 年度成果

21 年度事業を実施し、下記のような結果や知見が得られている。

(1) 21 年度の目標どおり、高大連携高からの入学予定者全員 (200 名規模) を対象とした入学前教育科目「コミュニケーションリテラシー」の第 1 講～12 講を、第 1 日程と第 2 日程 (各 4 日間) の 2 グループに分けて開講した。受講生の満足度は平成 19 年度に比して着実に上昇している (81%→92%→97%)

(2) 前年度受講者 (現 1 年生) に対し「コミュニケーションリテラシー」受講のアンケートを行ったところ、20%が「大変役に立った」、70%が「役に立った」との回答が得られた。

(3) 研究会への出席や文献研究による調査・研究から、さまざまな e-ラーニングシステムが開発・市販されており、導入検討に値する、という知見が得られた。

(4) リベラルアーツ教育研究会では下記の知見が得られた。

- ・高大連携等を研究する企業との協働はかならずしも適当ではない。

- ・諸外国の教育システムに学ぶべき点がある。

- フィンランドでは、下位層を引き上げる教育を行っているが、高等教育は無償であり、日本の私立大学とはシステムが異なる。

- 米国ではかならずしも学力の高くない高校生を大学でゼロから教育するシステムがある。

2.5 平成 22 年度成果

22 年度事業の目的は、湘北短大型の入学前教育の確立を達成するために、「コミュニケーションリテラシー」を入学予定者 (約 600 名) の中から、21 年度比 2 倍以上の受講者 (注: 21 年度受講者 186 名) を目標として規模拡大し、内容を進化させて開講することであった。受講生の質の変化に伴う問題の洗い出しとその対処を検討する。また、22 年度は、一方では米国のコミュニティカレッジやプレスクール教育の視察研修を行い、多様な学生を多く受け入れながらボトムアップを実現する方法を模索し、他方では高大産連絡協議会から得られる本

学独自の問題やニーズを踏まえた教育方法ならびに教育システム（たとえばブレンデッドラーニング）とその構築法の調査研究を行った。また、客観的な評価を導入し、事業効果の検証を実施した。規模拡大に伴い、連携高校以外の多様な高校出身者が増えるため、内容の検討と遠隔地からの入学者への対応も検討した。

上記目的に対し、事業成果として下記が得られている。

(1) 受講規模拡大

本年度の受講希望者は昨年度比2倍以上の466名（昨年度は185名）となった。23年4月入学者対象の入学事前授業の1講～12講を前半A、B日程（それぞれ2月8日、2月9日より開講）に実施した。198名の申込み者に対する開講は、目標どおりであり、全入学生548名の36%にあたる。また、A、B日程では、新たな試みとして、ナレーター・俳優の方を特別講師に迎えて「ノンバーバルコミュニケーション」を2コマ導入した。さらに、受講生の満足度調査を行った結果、例年同様、93%が後輩や他人に勧めると回答した（19年度81%、20年度92%、21年度97%）。ただ、3月に実施予定であった後半C、D日程（3月14日、22日開講）は、東日本大地震のため、中止となった。

(2) 米国カレッジ視察研修

次の2グループで米国カレッジ視察研修を行った。

① Aグループ（米国東部）

【メンバー】小棹理子（リベラルアーツセンター・情報メディア学科教授）、野口周一（保育学科教授 副学科長）、伊藤善隆（総合ビジネス学科 準教授）

【期間】9月3日～9月15日

【訪問先】チャータースクール（ボストン）：Boston Collegiate Charter School、Roxbury Preparatory Charter School；四年制私立大学（ニューヨーク）：Monroe College；コミュニティカレッジ（ワシントンDC）：Community College of District of Columbia

チャータースクールとカレッジ（コミュニティカレッジと4年制大学）、という教育の縦のつながりにおけるそれぞれの機能を意識し、本学における教育の効果を高める方法の調査に重点をおいた。リベラルアーツ教育の在り方や、効率的な教育方法、学習意欲の持続方法、ブレンデッドラーニングの導入の有効性など、多くを学ぶことができたと同時に今後の交流のきっかけを作ることができた。

② Bグループ（シカゴ）

【メンバー】岩崎敏之（リベラルアーツセンター長・生活プロデュース学科教授）、佐藤清彦（事務局次長・教務部長）、山本 滋（学長室長）

【期間】9月4日～9月14日

【訪問先】シカゴ City Colleges of Chicago、Arizona 大学。

City Colleges of Chicago は、Harold Washington College、Malcolm X College、Kennedy-King College など7カレッジの地域連携であるため、(1)ガバナンス体制、(2)リベラルアーツ教育、(3)大学の外部評価、(4)FD、などについて有用な知見が得られた。Arizona 大学において特筆すべきは、Teaching Center の機能が明確になったことである。

(3) Web 課題

「社会人キャリア力育成アセスメント」に記述したとおり、入学前（2月）と入学後（4月）にアセスメントを実施して社会人力の推移を測定した結果、入学事前授業は、入学後の勉学への動機づけや取り組み姿勢に関して効果があることが確認できたが、計算力をはじめとする基礎力が低下したことが示唆された。2月に授業を実施したのちの2ヶ月間にも反復学習により、社会人に必要とされる数理的・非数理的能力を高める必要があるとの認識から、e-ラーニングを導入するためのワーキンググループを新たに設置し、7月1日に第1回ミーティングを開催し、Web 課題を与える方向で議論を重ね、22年度は試みとして、受講生の半数に対

し Web で課題を、残り半数に対し印刷物で課題を与え、その結果を比較検討することとなった。そのため、今期の Web 課題は、独自開発ではなく、ASP にて 200 人分 (3,000 円/人) を購入した。その結果、22 年度の事業開始前には想定していなかった e-ラーニングの部分的導入の有効性が示唆された。3 月 31 日までの Web 課題の総アクセス数は 920 件、受講生 196 人のうち、115 人が課題に取り組んだことがわかった。

3. 平成 23 年度補助事業

3.1 全体概要と目的

本補助事業の全体の目的は、湘北短大型の入学前事前授業を確立し、これを実施することによって早期に進路が定まってしまう生徒の勉学意欲の維持と、短期大学での勉学への動機付けを行うことである。これにより、受講生に2年間という限られた時間を最大限活用させ、本学の教育目的である「社会に出てほんとうに役立つ人材の育成」に資することを目指している。四学科それぞれの専門性をもった人材を社会に送り出すためには、大学では高校での学習内容とは異なり、職業をもつ一般社会人が備えるべき基礎能力を身につけることが重要であることを早期に理解させることが不可欠であり、高校3年次の進路決定後に大学初年次教育を開始する入学前教育の確立が必要である。このような入学前教育のプロトタイプとして、高大連携高校出身者対象の単位科目「コミュニケーションリテラシー」があるが、これを拡大発展させるためには規模拡大のみならず、高校一大学一産業界の連携による研究会をとおして内容の強化・最適化が必要である。

以上により、本学の教育理念である「社会に出てほんとうに役立つ人材の育成」機能の強化を図ることが本補助事業の目的である。

3.2 本年度概要

本補助事業の本年度の目的は、上記の湘北短大型の入学前教育の確立を達成するために、「コミュニケーションリテラシー」を24年度入学予定者ほぼ全数を対象として規模拡大して開講することである。多様な入学予定者に対し開講するため、内容と遠隔地からの受講者への対応を昨年度より検討してきており、23年度は、入学事前授業を確立するため、部分的にeラーニングを導入することが必要である。

より詳細に述べる。21-22年度事業実施の結果、下記のような知見が得られている。

- ① 高大産連携フォーラムなどから得られた知見
 - ・体験型の小規模 PBL は、協調性や問題解決能力を高めるのに効果がある。
- ② 米国研修で得られた知見
 - ・eラーニングは活用方法により効果に差が生じる（Accelerated Learning）。
- ③ アンケート調査や客観的な評価となる検定などの検証結果から得られた知見
 - ・入学前授業により一部の社会人基礎力に向上が見られたが、短大型入学前教育をより一層充実させるためには、自学自習による一般常識的な知識の拡大や、非言語能力の向上努力が必要である。
- ④ 国内研修や他大学との交流により得られた知見
 - ・本学と類似した教育内容や教育環境を持つ九州の中村学園大学短期大学部は、22年に Web カルテシテム”N-cats”を開発しており、ドリル形式の Web-ラーニング機能を備えている。

以上を踏まえ、本年度は以下の課題に取り組む。

- (a) 600人規模受講生対応の実施体制の確立（多様な受講生への対応、効果の検証）
- (b) 内容の確定（教材を確定する）

内容を整備して一部 e-ラーニングコンテンツを取り入れた科目を構築することが必要である。これにより、反復学習を可能にすると同時に、遠隔地からの受講生への対応性を向上する。また、入学前教育の確立をめざす上で、教育者の能力向上が不可欠である。そのために、米国で短期研修を行い、ブレンデッドラーニングの本格実施に向け教育システムの構築法や教育方法を学ぶ。引き続き客観的な評価を導入し、事業効果を検証する。また、入学前教育科目が確立することにより、後継科目や、基礎科目の内容が変わるので、リベラルアーツ科目全体の再構築を開始するにあたり、国内の短期大学の教育内容の調査研究も重要である。

3.3 平成 23 年度成果

上記目的達成のため、平成 23 年度事業の主なものとして下記を実施した

- ① 高大産連携キャリア教育フォーラムの開催（詳細は 4.1 参照）
- ② e-ラーニングの導入－e-ラーニング・ワーキンググループ活動（詳細は 4.2 参照）
 - 第 5 回 e-ラーニングワーキンググループミーティング
 - 第 6 回 e-ラーニングワーキンググループミーティング
 - 第 7 回 e-ラーニングワーキンググループミーティング
 - 第 8 回 e-ラーニングワーキンググループミーティング
- ③ 内容の検討とテキストの完成（詳細は 4.5 参照）
 - 図書・文献の整備
 - テキストの作製
- ④ 視察研修（詳細は 4.3 参照）
 - 米国シカゴ・シェイクスピアシアター(Chicago Shakespeare Theater)
 - 大学教育学会（山形）
 - 日本教育工学会（研究会 3 回）
 - 第 17 回 FD フォーラム（京都）
 - FD 研修（私情協）など
 - 短期大学リベラルアーツ科目のシラバス調査
- ⑤ 平成 24 年度入学生対象の「コミュニケーションリテラシー」実施（4.5 参照）
 - 参加人数は 399 人で、対象者 461 人中の 90%には及ばなかったが、87%に該当する。
 - A、B 日程実施状況（2 月開講）
 - C、D 日程準備状況（3 月 21 日より開講予定）
- ⑥ 評価と効果検証（4.6 参照）
 - 社会人キャリア力育成アセスメント
 - 受講生のアンケート
 - 1 年経過後の振り返りアンケート
 - GPA との関連性

4. 事業活動報告

4.1 高大産連携キャリア教育フォーラム

趣旨・基調講演・パネルディスカッションの内容等は本リーフの通りである。

高大産 連携キャリア教育フォーラム(GPフォーラム)

現代型社会人育成のための キャリア教育

短期大学の2年間で社会に役立つ人材を育成するためには、
高校・大学の連携による入学事前授業や、大学・産業界の連携によるインターンシップなどが重要な役割を果たす。
湘北短期大学では、入学前に短期大学の授業と同じ形式で開講され、
かつ入学後に学ぶ内容が附随できるリベラルアーツ科目として「コミュニケーションリテラシー」を構築中である。
同科目を含め、本学の社会人を育成する教育の現状を再確認し、検討する場としたい。

日時

平成23年 **10月8日(土)** 14:00~17:00

場所

湘北短期大学6号館611教室

主催

湘北短期大学

後援

神奈川県教育委員会
厚木市

プログラム

●学長挨拶 14:00~

湘北短期大学 学長 米澤 健一郎

●基調講演1 14:10~14:35

「短期大学教育への期待」

文部科学省 高等教育局(予定)

振興の導入のための学報提供として、最近の高等教育の動向、短期大学の現状などを紹介するとともに、短期大学教育政策の課題、行政から見た短期大学教育への期待に言及する。

●基調講演2 15:00~15:15

「短期大学に必要とされる教養教育とはー」

ライター・ジャーナリスト 友野 伸一郎氏

入学事前授業から始める基礎能力の育成(科目知識、教養、ジェスリックスキル……)、学生に身につけさせるべき能力は徐々に高くなるが、なぜそうした能力が必要であり、またどのようにして身につけさせるべきか、大学の初年次教育や教養教育、アクティブラーニングを調査した知見を基に提言する。

[付録] 2022年度調査結果、掲載が湘北短期大学(フランス社会学部卒業、2020年3月、社会連携研究センター「大学教育と調査」プロジェクト)参加、大学の教育の現状と課題に関する調査結果(2022年10月10日現在)に関する。

●シンポジウム 16:00~17:30

「湘北短期大学におけるキャリア教育」

インターンや卒業生の受け入れ先企業の担当者からの評価、企業へのアンケート調査結果、本学卒業生のインターンシップ体験報告から、短大に必要とされる教育を多面的に考える場とする。

コーディネーター

湘北短期大学 インターンシップセンター長 総合ビジネス学部専任教授 飯塚 順一

◆企業からの評任

フコ株式会社 生産部事業本部人事部長 松久 功司
厚木市農業協同組合(AAつぎ) 専任部人事課長 井上 典夫

◆インターンシップ体験報告

湘北短期大学卒業生

◆アンケート調査結果報告

湘北短期大学リベラルアーツセンター 専任メディア学部教授 小椋 理子

●閉会挨拶

【司会進行】

湘北短期大学 リベラルアーツセンター長
生涯プロデュース学科教授 岩崎 徹之

参加お申し込みは

①裏面の申し込み用紙に、必要事項ご記入のうえFAXにてお申し込みください。あるいは、②下記メールアドレスに、件名をキャリア教育フォーラムとして、申し込み用紙に添付のある必要事項を送信ください。③下記URLよりフォーラム案内ページにアクセスしてください。

③E-mail LAC@shohoku.ac.jp ③URL <http://www.shohoku.ac.jp/>

お問い合わせ

〒243-0501 神奈川県厚木市清水428
湘北短期大学 「リベラルアーツセンター キャリア教育フォーラム」係
TEL.046-247-3131 FAX.046-247-3667
E-mail LAC@shohoku.ac.jp

学校法人 ソニー学園
湘北短期大学

高大産連携「キャリア教育フォーラム」 概要報告

10月8日に「【テーマA】大学教育推進プログラム」(GP)事業の一環として、本学にて高大産連携「キャリア教育フォーラム」が開催された。同フォーラムには、高校教員、大学・短大教職員、企業人、本学学生など、130名が参加した。



基調講演の中で、文部科学省 高等教育局 大学振興課課長補佐の渡部廉弘氏は、高等教育を取り巻く状況、短期大学の現状、中央教育審議会の審議等の状況、文部科学省関連の平成24年度概算要求の概要などを紹介するとともに、短期大学教育への期待に言及された(資料1)。教育ジャーナリストの友野伸一郎氏は、アクティブラーニング、初年次教育、教養教育など大学教育の調査結果をもとに、短期大学に必要とされる教養教育について提言された(資料2)。



シンポジウムでは、三光機械株式会社 総務企画部 寺沢万里さん(生活プロデュース学科11年卒業生)、厚木市農業協同組合(JAあつぎ)総務部庶務課 大高舞華さん(総合ビジネス学科08年卒業生)、厚木瓦斯株式会社 八木香名子さん(情報メディア学科11年卒業生)からインターンシップの体験について紹介があった。いずれもインターンシップを体験したことで、アルバイトではなく社員として働くこと、チャレンジすることの難しさややりがいを知ることができ、実際の就職活動においても視野が広がったと、笑顔で感想を話してくれた。(資料3)



ソニー株式会社 半導体事業本部人事部統括部長 松久功さん、厚木市農業協同組合(JAあつぎ)総務部人事課長 井上勲さんは、受け入れ先企業の担当者の立場から、インターンシップの現状や課題、今後の展望について報告された。インターンシップを受け入れることは、若手社員のキャリアアップとしても効果があり、基調講演で友野氏より紹介のあったアクティブラーニングにつながるとの報告があった(資料4、5)。

最後に、本学リベラルアーツセンター 情報メディア学科 小棹理子教授より、インターンシップ受入先企業へのアンケート調査結果について、報告があった(資料6)。

社会に出る事前教育であるインターンシップを経験した卒業生、ならびにその受け入れ先からのさまざまな観点からのご指摘を、入学事前授業である「コミュニケーションリテラシー」ならびにその後継科目での課題と受け止め、これらを解決することで本学の教育内容の一層の充実を図り、今後の発展を目指したい。

謝辞：本フォーラムにご後援を賜りました厚木市ならびに神奈川県教育委員会に深く御礼申し上げます。



前列左より：

井上氏(JAあつぎ)、松久氏(ソニー)、友野氏、米澤学長、渡部課長補佐(文科省)、安部田係長(文科省)、岩崎 LA センター長

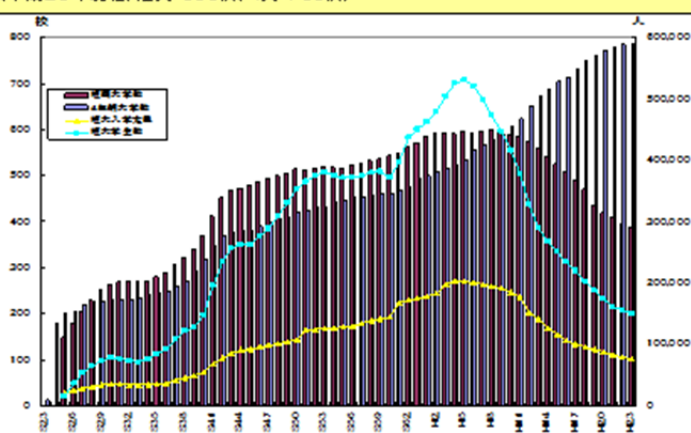
後列左より：

飯塚インターンシップセンター長、大高さん(JAあつぎ)、八木さん(厚木瓦斯)、寺沢さん(三光機械)、小棹、野村事務局長(敬称略)

2. 短期大学の現状

短期大学数、4年制大学数、短大入学定員、短大学生数の推移

短期大学数は平成8年をピークに減少。平成10年に4年制大学数と逆転。
(平成23年現在、短大:388校、4大:786校)

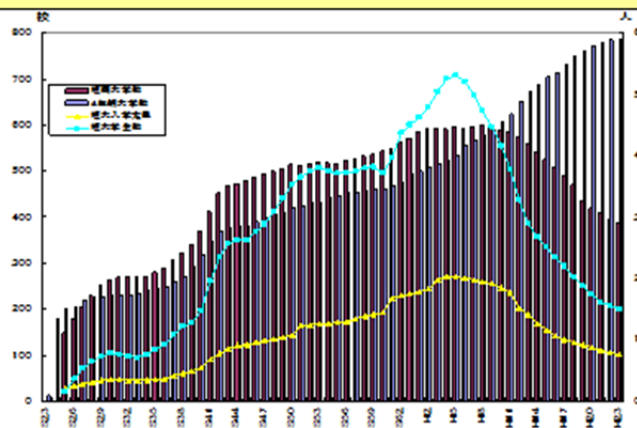


大学数には通信教育のみを含む学校を含む
学生数には専攻科、別科を含む

「学校基本調査」、「全国短期大学一覽」

短期大学数、4年制大学数、短大入学定員、短大学生数の推移

短期大学数は平成8年をピークに減少。平成10年に4年制大学数と逆転。
(平成23年現在、短大:388校、4大:786校)



大学数には通信教育のみを含む学校を含む
学生数には専攻科、別科を含む

「学校基本調査」、「全国短期大学一覽」

■ 短期大学の概要①

1. 目的 深く専門の学芸を教授研究し、職業又は實際生活に必要な能力を育成する。
2. 修業年限 2年又は3年
3. 基本組織 学科
4. 授業形態 一部(昼間部、昼夜間講制)、二部(夜間部)、三部(昼間2交替制)
5. 卒業要件単位 2年制:62単位以上、3年生:93単位以上(二部、三部は62単位以上)
6. 学位 短期大学を卒業した者には「短期大学士」の学位が授与
7. 編入学 短期大学を卒業した者は4年制大学に編入学が可能

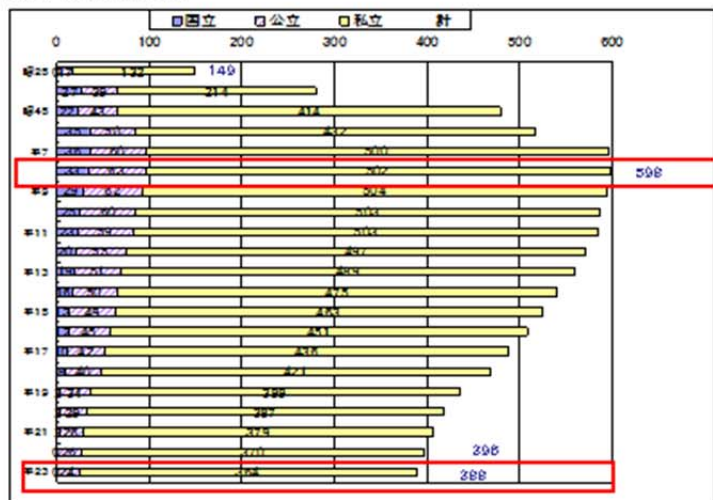
<平成23年度の状況>

	学校数(校)		入学定員(人)		入学者数(人)		学生数(人)	
国立	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	3	0.0%
公立	24	6.2%	3,435	4.5%	3,624	5.3%	8,159	5.6%
私立	364	93.8%	72,414	95.5%	64,808	94.7%	136,886	94.4%
計	388	100.0%	75,849	100.0%	68,432	100.0%	145,045	100.0%

(注) 1 学校数には学生募集停止中の短期大学(公立、私立2校)を算入しているが、入学定員には算入していない。
2 入学定員、入学者数、学生数は専攻科、別科及び通信教育課程を除く。
3 短期大学一覽、学校基本調査による。

■ 短期大学の概要②

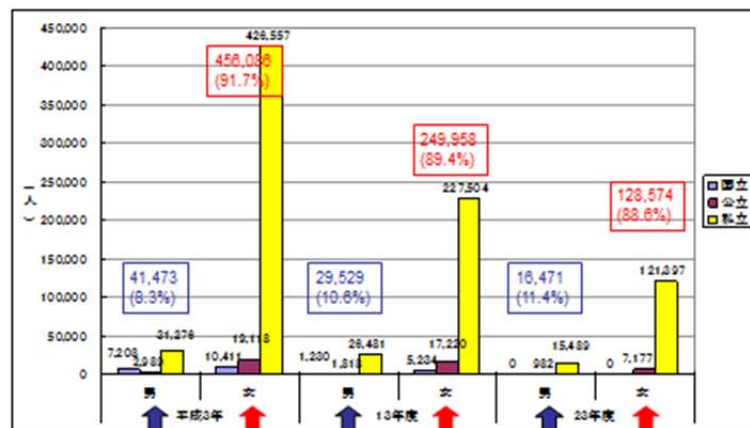
<短期大学数の推移>



(注) 1 短期大学一覽による。
2 学生募集停止中の短期大学を含む。

■ 短期大学の概要③

<短期大学の男女別本科学生数の推移>

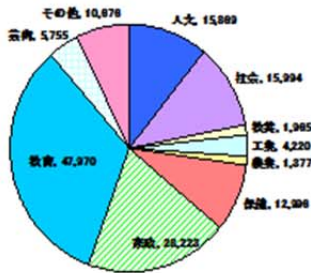


大学の場合 71.1% 28.9% 62.1% 37.9% 57.4% 42.6%

(注) 1 専攻科、別科等の学生を除く。
2 学校基本調査による。

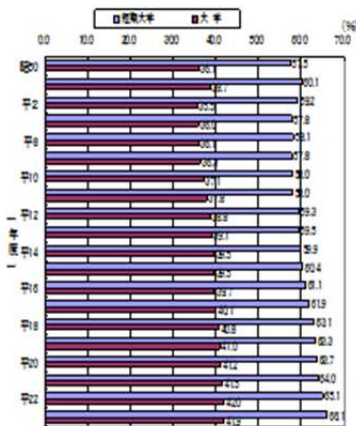
■ 短期大学の概要④

< 分野別学生数(平成23年度) >



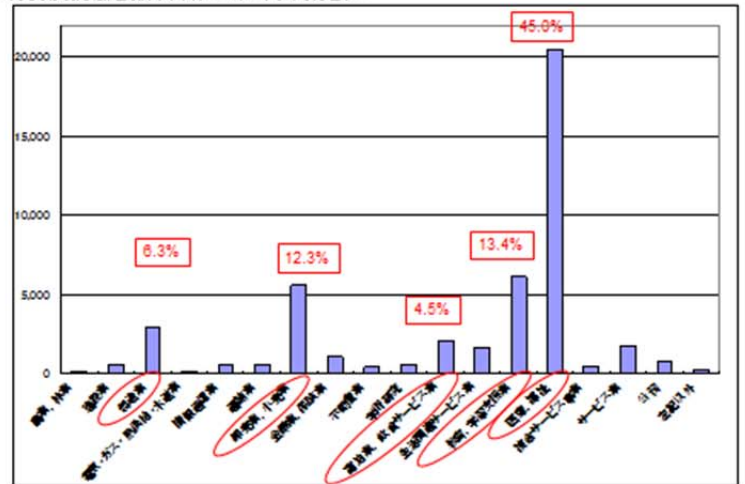
(注)学校基本調査による。

< 短期大学・大学の自県内入学率 >



■ 短期大学の概要⑤

< 分野別就職者数(平成23年3月卒業生) >



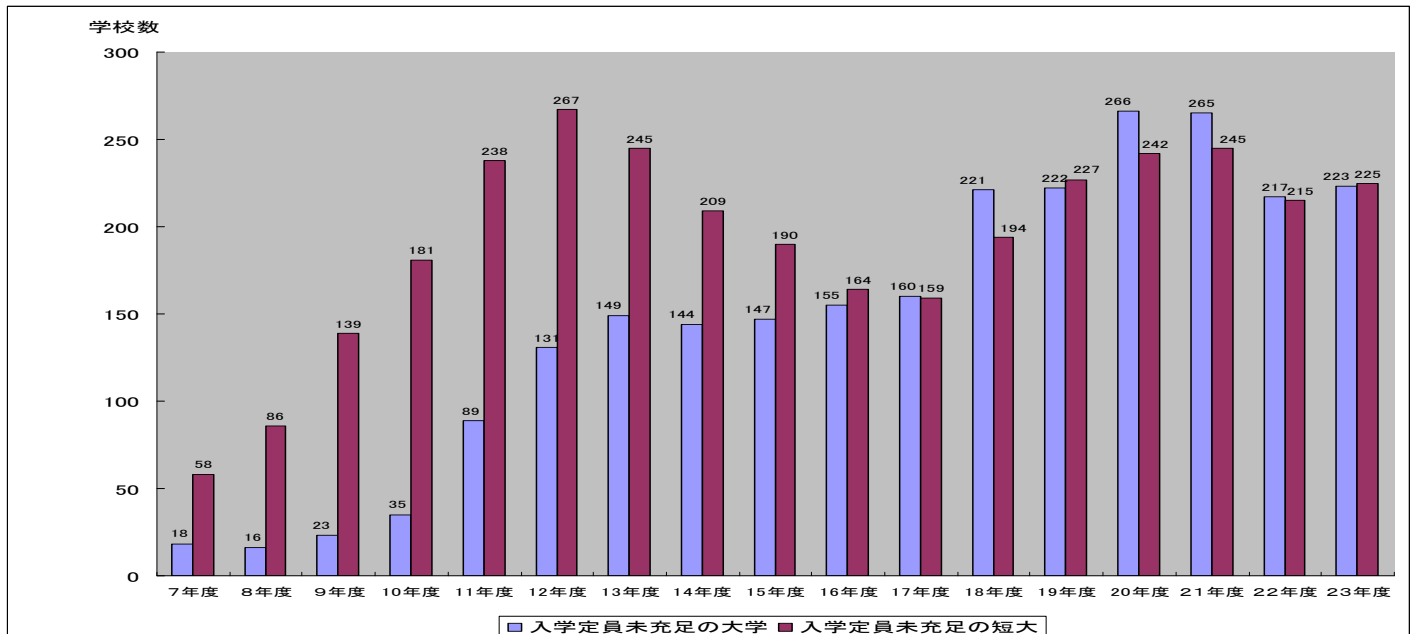
11

私立大学・短期大学の入学定員充足状況

(日本私立学校振興・共済事業団調べ)

	7年度	8年度	9年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度
大学数	410	419	425	439	450	471	493	508	521	533	542	550	559	565	570	569	572
入学定員未充足の大学	18	16	23	35	89	131	149	144	147	155	160	221	222	266	265	217	223
未充足割合	4.4%	3.8%	5.4%	8.0%	19.8%	27.8%	30.2%	28.3%	28.2%	29.1%	29.5%	40.2%	39.7%	47.1%	46.5%	38.1%	39.0%
短大数	491	491	493	486	469	460	449	435	416	400	383	373	365	360	356	344	338
入学定員未充足の短大	58	86	139	181	238	267	245	209	190	164	159	194	227	242	245	215	225
未充足割合	11.8%	17.5%	28.2%	37.2%	50.7%	58.0%	54.6%	48.0%	45.7%	41.0%	41.5%	52.0%	62.2%	67.2%	68.8%	62.5%	66.6%

(注)大学数・短大数に、学生募集停止中の学校、通信制課程・大学院のみを設置する学校は含まない。



12

大学・短期大学の全入学定員に対する充足率の推移

区分	年度	平2	8	9	10	11	12	13	14	15
短期大学	入学定員	182,630	194,080	191,325	184,580	175,280	152,071	140,908	126,590	116,433
	入学者数	235,195	220,875	207,546	191,430	188,973	141,491	130,246	121,441	113,029
	充足率(%)	(128.6)	(113.8)	(108.5)	(103.7)	(95.9)	(93.0)	(92.4)	(96.0)	(97.1)
大学学部	入学定員	414,680	498,913	505,961	513,735	524,807	535,445	539,370	543,319	543,818
	入学者数	492,340	579,148	586,688	597,743	589,559	599,655	603,953	609,337	604,785
	充足率(%)	(118.7)	(116.1)	(116.0)	(114.5)	(112.3)	(112.0)	(112.0)	(112.2)	(111.2)

区分	年度	16	17	18	19	20	21	22	23
短期大学	入学定員	105,746	99,761	95,866	92,342	87,577	83,052	78,751	75,649
	入学者数	106,204	99,431	90,740	84,596	77,339	73,163	72,047	68,432
	充足率(%)	(100.4)	(99.7)	(94.7)	(91.6)	(88.3)	(88.1)	(91.5)	(90.2)
大学学部	入学定員	545,261	551,775	561,859	567,123	570,250	573,223	573,325	576,427
	入学者数	598,331	603,760	603,054	613,613	607,159	608,730	619,073	612,858
	充足率(%)	(109.7)	(109.4)	(107.3)	(108.2)	(106.5)	(106.2)	(107.6)	(106.0)

注) 1. 1年、2年、3年の本科(学部)学生定員及び入学者数の合計。
2. 学校基本調査、短期大学一覽、大学一覽による。

3. 中央教育審議会の審議等の動向

大学教育の主要課題(中央教育審議会大学分科会での論点)

1. 歴史的・国際的に確立された考え方(大学制度の発祥→近現代)

○ 大学は、歴史的・国際的に確立された共通の考え方により、高度な教育と、それを支える研究を行い、自主的・自律的に活動し、大学固有の性格に基づいて学位を授与する団体であり、こうした仕組みが、各国で顕著な成果を受けているもの(各国も同様)

2. 我が国の大学法制(明治→戦後→現代)

○ 大学に、一定の社会的役割や公益を実現する目的が規定され、それによって制度的な体系(法制)が整備され、その体系の中心が、大学教育である学位の授与。

【65年憲法】
第19条 国は、人民の進歩を奨励し、平等で民主的な国家を以て建設することを必要とするものとする。この趣旨に適合する教育の機会を保障し、これを支えるものとする。

【学校教育法】
第19条 大学は、国家の中心として、広く知識を授けんとし、専ら専門の知識を授けんとし、研究、実習及びその他の方法による研究の促進を図ることとする。

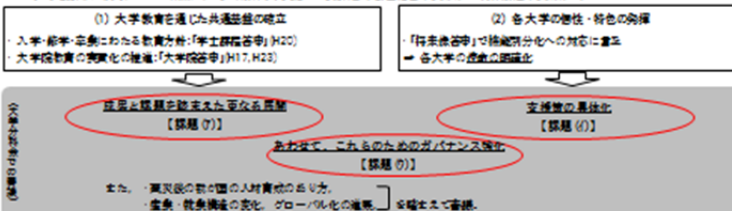
大学は、その目的を達成するに必要な教育研究を行い、その結果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。

【1946年 学務法】 大学を卒業した者に対し学位を授与し、大学院の修業を修了した者に対し論文博士の学位を一併するものとする(現学務法に準じて学位法に規定される)

○ 大学に、一定の社会的役割や公益を実現する目的が規定され、それによって制度的な体系(法制)が整備され、その体系の中心が、大学教育である学位の授与。

3. 現在の大学教育の主要課題(質の保証・向上のため)

○ 学位保証と質、2つの観点と、その効率的な実施が主要課題(「21世紀ビジョン」別冊「大学教育」P117-119)



機能別分化の進展への対応について(中央教育審議会大学分科会での論点)

機能別分化の進展への対応の観点から、以下の方策により、大学の取組を支援。

(1) 機能別分化の進展に対応した取組への財政支援

各大学が自らの判断で重視する機能や役割を充実・強化し、短期的な教育を効率的に進めるため、以下のような支援を講ずることが喫緊の課題。

(ア) 今日的状況の変化(※)に際する課題に取り組むため、大学としてのイニシアティブにより、以下の観点から単位課程を構築する新たな取組に対し、テーマを細分化せず、効率的・効果的に支援。

- 学長のリーダーシップによる、自大学の教員の明確化
- 組織的・体系的な教育の実施(学生受け入れ・教育課程の編成/学位授与の3つの方向を明確化した上で)5割
- これらの取組の進展に向けた、教員に関するガバナンスの確立

(イ) 社会全体のグローバル化を踏まえ、国際的な教育研究活動や学生交流に重点を置く(大学は一部に限られない)との認識の下、より幅広い大学を対象に、大学教育のグローバル化を進める事業を支援。

(ウ) 匠級人材など高度専門職業人の養成に際し、従来の事業の成果を検証の上、異なる取組への取組を支援。

併せて、これらの事業の実施後の評価と普及についても留意。

(2) 大学の教育活動の可視化

社会に対する説明責任を果たすとともに、教育の質の向上を図る観点から、「大学ポータル(仮称)」の早期の整備が必要。

- 「大学ポータル(仮称)」の整備
- 大学が、教育情報を、自らの活動状況を把握・分析することに活用。
- 大学の多様な教育活動の状況を、大学教育に関係・関心を持つ国内外の様々な者に分かりやすく発信。
- 大学の業績を可視化する。

(3) 大学を支援する団体の役割の充実

大学を支援する団体の役割の充実

(4) その他
認証評価の活用…認証評価の情報の、一般の者への分かりやすい公表、各大学が重視する機能に着目した評価方法の、評価団体での検討。

各大学のプロフィールの可視化～教育情報の公表の促進～

- 各大学が、教育目標や活動状況を分かりやすく公表し、外部から適切な評価を受けながら、教育水準を向上するよう、制度改正を実施(平成23年4月から施行)。
- 教育情報を公表することは、大学教育に関し、「どの大学を卒業したか」から「どんな教育を受けて、何を修得したか」に転換するための基礎的なインフラ。また、国内外から優れた学生を獲得するためにも不可欠の取組。

(1) 公的な教育情報として公表が義務化される情報(学校教育法を改正し、今年度から開始)

- ① 大学の教育研究目的(学部・学系・課程ごと)
- ② 教育研究上の基本組織(例:学部・学系・課程の名称)
- ③ 教員組織、教員数、各教員の学位・資格
- ④ 入学受入方針、入学者数、定員、在学者数、卒業者数、卒業後の進路(進学、就職、その他の多様な進路)
- ⑤ 授業科目、授業の方法と内容、年間授業科目
- ⑥ 学修成果の評価、卒業の認定の基準
- ⑦ 地域・社会等の施設設備、学生の教育研究環境(例:キャリアパス支援、運動施設、海外活動の状況、学習環境、主な交通手段)
- ⑧ 授業料、入学費その他の徴収費用
- ⑨ 学生の修学・進路選択・心身の健康に関する支援(例:留学生や障害者支援など様々な学生支援の状況)

(3) 大学教育の国際競争力の向上のために公表が求められる情報(法令による義務ではなく、大学のための参考指標)

- ① 教育活動の規模や内容等(教育課程、外国人教員数、研究開発等)
- ② 教育の国際連携(認定評価海外大学、学生交流:ダブルイヤー交換等)
- ③ 大学の戦略(国際連携への取組姿勢等)
- ④ 留学生への対応(留学生受入数、入学手続、生活環境、英語コース等)

(参考:同志社大学の事例)

「大学基礎データ集」として、学生数、入学率、学費負担率、卒業・修了率、学生生活、キャリア形成支援、奨学金・全額奨励金、授業状況、国際交流、財政などの18カテゴリーに区分し、170項目の基礎情報を大学ホームページに公表。

大学における教育情報の活用と公表に関する中間まとめ(概要)

1. 大学の教育情報に関する現状等

- この10年間の顕著な取組を通じ、各大学による情報の公表が着実に進展。大学団体による支援も増進化。
- 多様な観点から、大学の中心となる大学の特性や多様性を十分に踏まえながら、教育情報を、自らの意欲の把握・分析に活用し、また、教育活動を国内外に分かりやすく公表することが増進。

2. 教育情報の公表・活用促進の方策

- (1) 各大学の自主的・自律的な取組
 - 各大学が、自らの教育・教育活動の状況を分かりやすく公表する工夫を促進
 - 国際競争力の強化のため、海外への積極的な情報発信
- (2) 大学団体等による支援
 - ガイドライン作成
 - 優れた大学改革の取組などの取組と共有
- (3) 大学の特色の把握
 - 学校基本調査等の基礎的な情報の共有・公表の仕組みを構築
 - 大学群等の調査等について、項目の精選や調査頻度を見直し
- (4) 教育情報の取組と共有を進めるための場の整備
 - テーマベースを用いた教育情報の活用・公表のための共通的な仕組みを構築

【加付】
○ 大学が、教育情報、自らの意欲状況を把握・分析することに活用。
○ 大学の多様な教育活動の状況を、大学教育に関係・関心を持つ国内外の様々な者に分かりやすく発信。
○ 基礎的な情報について共通的な公表の仕組みを構築し、大学の教育特色を把握。
【留意】
○ 大学と大学団体の連携により大学コミュニティが自主的・自律的に進展する。
○ 高等専門学校等や企業関係者等の意見も適切に反映されるようにする。
【回答】
○ 各大学の大学の歴史的経緯や多様性を踏まえ、情報の内容や公表方法を工夫する。
○ 公表が義務化された教育情報、学校基本調査の基礎的な情報のほか、小規模大学や地方大学を含む各大学の特色・強みを表す。
○ 同一的なコンテンツを掲載し、より分かりやすく発信するなどにより一定の範囲で比較可能なものにする。
○ グローバルな教育活動を重視する大学の海外発信に活用できるようにする。

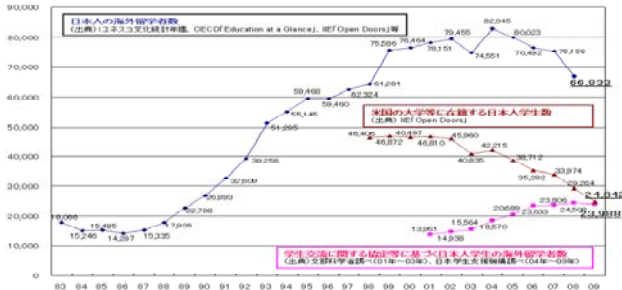
グローバル人材育成推進会議中間まとめの概要 (平成23年6月22日)

1. 基本的な問題意識

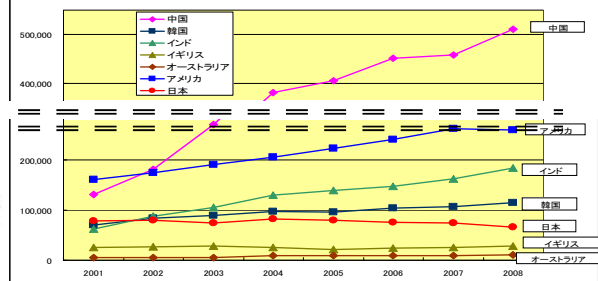
(1) 海外留学の動向と「内向き志向」

- 2004年(平成16年)以降、海外へ留学する日本人学生の数は減少。同世代に占める留学者の比率も、2004年(平成16年)以降は減少傾向。日本人学生の海外留学者数の男女比はおよそ1対2。
- 一方、中国・インドや韓国等は、海外留学者数を増加。

(日本人の海外留学者数)

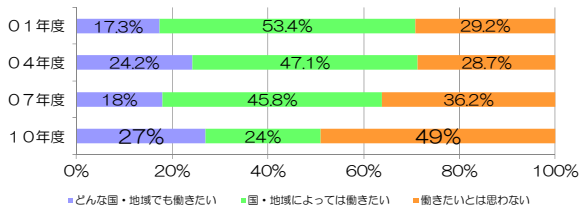


(国(地域)別学生の海外派遣者数の推移)



- 若い世代の「内向き志向」意識の背景となる社会システム上の構造的な要因の克服が重要。
- 従来は、高校教育の困難化・大学教育の空洞化と採用の早期化・長期化が同時進行するという悪循環。
- 今後は、高校関係者・大学関係者・企業関係者・保護者等が一斉に具体的な行動を起こすことで、若い世代を後押しする好循環を生み出すことが不可欠。

(新入社員の海外勤務希望)



(高等教育への公財政支出の対GDP比)

	日本	アメリカ
公費負担	0.5%	1.0%
私費負担	1.0%	1.9%
うち家計	0.76%	0.85%
民間	0.24%	1.05%
合計	1.5%	2.9%

(2) 我が国の経済的な発展と国際社会との関わり

- 現状のままでは、我が国はBRICsやVISTAといった新興国の台頭等、変化の激しいグローバル化時代の世界経済の中で「日本のガラパゴス化」が懸念され、緩やかに後退するのではないかと、との危機感。
- 「産業・経済上の活力の持続」と「社会生活面での幸福・充足感や(精神的)豊かさ」とが両立した、経済・社会の調和のとれた発展を目指すべき。→ 世界からの信頼と尊敬を得て存在感のある国へ
- 今こそ、社会全体のシステムを、個人々の人生設計を柔軟かつ多様に支援する複線型の社会システムへと変革。その第一歩であり眼目、国家戦略の一環としての「グローバル人材」の育成。

19

2. グローバル人材の育成及び活用

(1) 「グローバル人材」とは

- 「グローバル人材」の概念を整理すると、概ね、以下のような要素。
 - 要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力
 - 要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感
 - 要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ
- このほか、幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークと(異質な者の集団をまとめる)リーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー等。
- グローバル人材の能力水準の目安を(初歩から上級まで)段階別に示すと、
 - ① 海外旅行会話レベル
 - ② 日常生活会話レベル
 - ③ 業務上の文書・会話レベル
 - ④ 二者間折衝・交渉レベル
 - ⑤ 多数者間折衝・交渉レベル
 この中で、①②③レベルのグローバル人材の裾野の拡大については着実に進捗。今後は更に、④⑤レベルの人材が継続的に育成され、一定数の「人材層」として確保されることが極めて重要。
- 特に大学入試と企業採用について、従来の発想及び制度から大きく脱却することが喫緊の課題。

(2) グローバル人材の育成及び活用に向けた諸課題

- 我が国の18歳人口は、今後約10年間は110~120万人程度の規模で横ばい。
- この期間のうちに、若い世代では、同一年齢の者のうち約10%(即ち約11万人程度)が20歳代前半までに1年間以上の留学ないし在外経験を有することを旨とする。
- 今後、
 - ・高校留学の促進等の初等中等教育の諸課題
 - ・大学入試の改善等の大学教育の諸課題
 - ・採用活動の改善等の経済社会の諸課題
 等について、ひとり政府・行政関係者のみならず、高校関係者・大学関係者・企業関係者・保護者等多くの関係者が、同時並行的に連動して具体的方策に取り組むことが不可欠。

3. 初等中等教育(英語・コミュニケーション能力、高校留学、教員の資質・能力等)

- ☆18歳頃の時点までに1年間以上の留学ないし在外経験を有する者を3万人規模に増加(留学しても3年間での高校卒業が可能である旨を周知徹底)。
- ☆高校卒業時に国際バカロレア資格を取得可能な、又はそれに準じた教育を行う学校を5年以内に200校程度へ増加。
- ☆英語担当教員採用で、TOEFL・TOEICの成績等を考慮。また、外国人教員の採用を促進。等

20

4. 大学教育(大学入試、高等教育の国際展開、留学生交流等)

- ☆大学の学生のTOEFL・TOEICの成績等の公表、特色あるカリキュラムや授業方法、9月入学やセメスター制等を促進。
- ☆在外経験の重視・特色ある入試方法・単位取得や修了認定上の配慮等を通じて国際化推進に顕著な成果を上げる大学の取組を、財政支援の重点化等を図りつつ、強力に促進。
- ☆大学生で1年間以上の留学経験を有する者を8万人規模に増加。(18歳頃の時点までの3万人と合わせて11万人規模(同一年齢者のうち約10%相当))
- ☆学生・若手研究者・社会人を通じた在外期間中の滞在・生活費支援の仕組みづくりを促進。(産学連携による奨学金制度の創設)
- ☆大学・大学院への飛び入学・早期卒業の促進や高校の早期卒業の制度的整備等の検討。
- ☆国別・地域別の留学生交流戦略の明確化。等

5. 経済社会(採用活動、採用後のグローバル人材育成・活用等)

- ☆企業の雇用慣行として「卒後3年以内の新卒扱い」、「通年採用」、「Gap Year」等を普及・促進。
- ☆学業と両立する就職活動時期(早期化・長期化の是正)。
- ☆時代の変化に対応した企業等の求める人材像の明確化及び学生や大学・高校、保護者側への積極的な発信(企業トップと人事担当部課長の意識統一)。
- ☆留学経験者の積極的採用に向けた経済団体への働きかけ(就職活動・採用時期の改善等)や先進事例の収集等。
- ☆国家公務員に関し、2012年度(平成24年度)より、採用試験等に「政治・国際」の区分を創設し、博士号取得を目指す長期在外研修員を派遣。
- ☆各省(例えば外務、文科、厚労、経産等)の国家公務員採用時の在外経験者比率(実績)や中途採用の状況等を公表。
- ☆「新しい公共」の担い手たるNPO法人等を活用して、官民共同のネットワーク型センター機能「グローバル人材特訓道場(仮称)」を整備・創設。等

6. その他(職業教育・訓練、国際ボランティア活動、環境整備等)

- ☆新進の芸術家やスポーツ選手等各界での活躍が期待される人材を、関係機関の連携により戦略的に海外に派遣。
- ☆グローバル人材の育成・採用・活用に積極的な大学・高校・企業等を相互に連携して顕彰。
- ☆産学関係者による継続的な対話の場(フォーラム・円卓会議等)を設定。等

グローバル人材の育成は、ひとり政府・行政関係者のみならず大学関係者・団体や企業関係者・経済団体等を主体的な起点とする一つの社会的な運動として、継続的な取り組みが必要。

21

東日本大震災復興構想会議 提言(平成23年6月25日) 抜粋

<教育に関連する提言の抜粋>

第2章 暮らしとしごとの再生

2. 教育に関連する提言の抜粋

(2) 地域における支えあい学びあう仕組み

- ・ 保健・医療施設、教育施設等の一体的整備や共同利用
- ・ 学校・公民館等における防災機能や地域コミュニティ拠点機能の強化
- ・ 広く住民の参画を得て、地域の特色を生かした防災教育の推進
- ・ 被災地のニーズや実情を踏まえ、奨学金や就学支援等の支援
- ・ 大学・高専等における地元産業の復興やグローバル化対応のための人材育成

(5) 地域経済活動の再生

企業・イノベーション

- ・ 教育研究基盤の早期回復、一層の強化
- ・ 産学官の連携により、スピード感ある技術革新を可能にするための中長期的、継続的、弾力的な支援スキームを構築
- ・ 被災地の大学を中心とする地域復興センター的機能の整備
- ・ 研究開発の促進による技術革新を通じた新産業及び雇用の創出

22

平成24年度文部科学省概算要求・要望のポイント①

<文部科学省要求・要望額>

区 分	平成23年度	平成24年度	対前年度	増△減率
	予 算 額	要 求・要 望 額	増 △ 減 額	
文 部 科 学 省 予 算	5兆5,428億円	5兆7,037億円 (6兆2,720億円)	1,609億円 (7,292億円)	2.9% (13.2%)

※上段は「日本再生重点化措置」3,086億円を含む
 ※下段括弧書きは、さらに「復旧・復興対策に係る経費」3,222億円を含む

4. 平成24年度概算要求の概要(文部科学省関係)

<概算要求・要望に関する基本方針>

- 我が国経済社会を再生し、国民一人ひとりが希望をもって前に進める社会を実現するため、教育による多様な人材の育成、スポーツ・文化芸術の振興、科学技術の推進に資する施策を、未来への先行投資として「日本再生重点化措置」において要望。
- また、学校施設の復旧・耐震化や原子力災害からの復興支援など、国家的な危機である東日本大震災を乗り越えて復興を実現するために必要な復旧・復興対策に係る経費を要求。

24

平成24年度文部科学省概算要求・要望のポイント②

平成24年度文部科学省概算要求・要望のポイント③

<文教関係予算のポイント>

区 分	平成23年度	平成24年度	対前年度	増△減率
	予 算 額	要 求・要 望 額	増 △ 減 額	
文 教 関 係 予 算	4兆1,641億円	4兆2,776億円 (4兆5,998億円)	1,135億円 (4,357億円)	2.7% (10.5%)

※上段は「日本再生重点化措置」3,086億円を含む
 ※下段括弧書きは、さらに「復旧・復興対策に係る経費」3,222億円を含む

- 国家的な危機である東日本大震災からの復興を実現し、我が国経済社会を再生するためには、国民全員に質の高い教育を受ける機会を保障し、様々な分野において将来の日本、世界を支える人材を育成することが必要

○そのため、以下の施策に重点化

- ・小学校2年生における35人以下学級の実現
- ・教育費負担の軽減(高校・大学の新しい奨学金制度の創設、授業料減免等の充実等)
- ・世界最高水準の高等教育を支える基盤的経費の拡充
- ・世界に雄飛する人材の育成
- ・安全で質の高い学校施設の整備

<高等教育(短期大学)関係のポイント>

①学生が安心して学べる環境の実現

- 大学等奨学金事業の充実と健全性確保 1,331億円 (対前年度増減+72億円)
- うち育英事業に必要な経費 1,311億円 (対前年度増減+70億円)
- (育英事業費) 1兆1,433億円 (対前年度増減+652億円)

経済的に困窮する学生等が修学を断念することがないよう、修学に必要な経費を支援するため、無利子の奨学金貸与のみでは修学が困難な者に対し、給付型の奨学金を支給。
 また、奨学金を希望する学生のニーズに広く応えられるよう、有利子貸与事業についても着実に実施するとともに、貸与事業における返還金の確実な回収を図り、事業の健全性を確保。

◇対象人員 大学等修学支援奨学金127万2千人→134万9千人(7万7千人増)
 (給付・無利子貸与) 35万8千人→38万8千人(3万人増)
 (有利子貸与) 91万4千人→96万1千人(4万7千人増)

- 国立大学・私立大学の授業料等減免等の充実 309億円 (対前年度増減+35億円)
- うち、私立大学授業料等減免等補助の拡充 49億円 (対前年度増減±0億円)
- (復旧・復興対策経費(47億円)を含めた額) 96億円 (対前年度増減+47億円)

私立の大学等が経済的に修学困難な学生を対象に実施している授業料等減免等への支援や学生の経済的負担軽減のための多様な支援策・体制を講じる大学等に対する支援を引き続き行うとともに、東日本大震災により被災し、経済的に修学が困難となった学生を対象とした授業料等減免(2/3補助)を行う大学等を支援。
 (免除対象人数:約1.2万人増平成23年度:約3.3万人→平成24年度:約4.5万人)

平成24年度文部科学省概算要求・要望のポイント④

平成24年度文部科学省概算要求・要望のポイント⑤

②大学教育等の充実と教育の質保証

- 大学教育の充実と質の向上 130億円 (対前年度増減+34億円)
- (復旧・復興対策経費(15億円)を含めた額) 145億円 (対前年度増減+50億円)
- ・大学教育改革新展開推進事業(新規) 101億円
- 東日本大震災等により激変する社会や大学、学生のグローバル化への対応のため、学長のリーダーシップに、大学としての明確な使命を設定し、学生の「出口」を見据えた、学部や大学の垣根を超えた学位課程を構する全学的な教学システムの確立を、国公私立大学を通じた競争的環境のもとで重点支援し、機能別分化に応じた教育の質保証システムを構築。
【要求内容】
 ①世界と戦える人材の養成 (単独型)250万円×10件=2,500百万円
 ②地域の発展を支える人材の養成 (単独型)150万円×20件=3,000百万円 (連携型)150万円×30件=4,500百万円
- ・大学等における地域復興のためのセンター的機能の整備事業(新規) 15億円 (全額を復旧・復興対策経費に計上)
 東日本大震災からの被災者のくらしや地域コミュニティの再構築、及び地域産業の再生のため、大学等が、地域の自治体からの要望等を踏まえ、自治体や他大学等と連携・協力してこれまで行ってきた様々な取組を継続発展的に実施していくため、地域のコミュニティ再生(ボランティア、アーカイブ化)や地域復興の担い手育成等組を行う大学等の地域復興センター的機能の整備を支援。
 (支援対象)岩手県、宮城県、福島県(隣接地域を含む)の大学、短期大学、高等専門学校
 (被災地の大学等を拠点とした被災地内外の大学等との連携も含む)
【要求内容】
 ○大学等の地域復興センター的機能の整備を支援。103百万円×15件=1,545百万円

③グローバル人材育成のための大学の国際化と学生の双方向交流の推進

- 大学教育のグローバル化のための体制整備 189億円 (対前年度増減+137億円)
- 「政策推進の全体像」(平成23年8月15日閣議決定)を踏まえた「グローバル人材育成推進会議中間まとめ」の具体化として、若い世代の「内向き志向」の克服、国際的な産業競争力の向上や国との絆の強化のため、グローバルな舞台で活躍できる人材の育成を図る、大学教育のグローバル化の体制整備の推進、及び他国の大学との協働教育を支援。
 ・グローバル人材育成推進事業60件(新規)121億円
 ・大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業13件26億円
 ・大学の世界展開力強化事業41億円
 ・ASEAN諸国等との大学間交流形成支援10件(新規)
 ・世界に開かれた復興のための協働教育支援10件(新規)
 ・「日本語・日本文化」の世界展開10件(新規)等
- 学生の双方向交流の推進 360億円 (対前年度増減+18億円)
- 復旧・復興対策経費(10億円)を含めた額 370億円 (対前年度増減+28億円)
- 「新成長戦略」(平成22年6月18日閣議決定)及び「グローバル人材育成推進会議中間まとめ」(平成23年6月22日)において示された国際的な学生交流に関する提言への対応のため、日本人学生の海外留学及び外国人留学生の受入れを推進し、グローバル人材育成に必要な環境の整備・充実を図る。
 ・海外での情報提供及び支援の一体的な実施 5億円
 ・奨学金など留学生の受入れ環境の充実 329億円
 国費外国人留学生制度10,656人→10,865人(+209人)
 私費外国人留学生学習奨励費11,406人→10,265人(△1,141人) ※別途、1,498人(復旧・復興対策)
 留学生短期受入れと日本人学生の海外派遣を一体とした交流事業
 ・短期受入れ分(3ヶ月～1年)1,600人→1,440人(△160人)
 ・ショートステイ支援分(3ヶ月未満)7,000人→6,300人(△700人)
- 日本人学生の海外留学の推進 36億円
 留学生短期受入れと日本人学生の海外派遣を一体とした交流事業
 ・長期派遣分(1年以上)100人→200人(+100人)
 ・短期派遣分(3ヶ月～1年)760人→3,000人(+2,240人)
 ・ショートステイ支援分(3ヶ月未満)7,000人→6,300人(△700人)

(1).(特に地域における)高等教育機会の確保の役割

○前掲のとおり、短大は自県内進学率が高く(10ページ)、大学は置かれていないが短大は置かれている、といった地域においては、短大の人材養成の拠点としての重要性は高い。

(参考:市内に4年制大学が存在せず、短大のみが存在する例)

- ・山梨県大月市:大月短期大学
- ・石川県小松市:小松短期大学
- ・鳥取県倉吉市:鳥取短期大学
- ・愛媛県宇和島市:愛媛女子短期大学
- ・熊本県八代市:中九州短期大学

5. 短期大学教育への期待

○また、大学と比較して、年間収入額の低い層の割合が高く、高等教育機会の提供の面において果たしている役割も大きいといえる。

(参考)

- ・学生の家庭の平均年間収入額…大学屋間部:8220千円、短大屋間部:6620千円
- ・家庭の年間収入が700万円未満である割合…大学屋間部:40.2%、短大屋間部:54.7%
(独)日本学生支援機構「平成20年度学生生活調査」より)



引き続き、これらの役割を果たしていくことが望まれる。

31

(2).今後の短期大学に求められるもの(現状を踏まえた試案)①

①入学者の多様化等への対応

○短期大学では、大学に比して短い修業年限で、教養教育を基礎としつつ行われる専門的な職業教育を通じ、学士力や社会人基礎力の養成が行われている。

⇒学生にとっては短期間、かつ比較的低廉な学費で資格・免許を取得できるというメリット。加えて、短期の完成高等教育の修了証としての「短期大学士」の授与もなされ、4年制大学への編入学も可能。

○その一方、現在の短大は、様々な課題に直面。特に、冒頭でも触れた、高等教育機関への進学率の上昇等に伴い、多様な学力層の者が大学に進学する状況の中、入学者の多様化(学力や精神面等)が課題と考えられ、短大では、大学よりもその影響が強くなっている傾向にあると考えられる。

○加えて、

- ・修業年限が短く、就職活動が大学に比べて早い段階で始まってしまふ
 - ・資格、免許等の取得に必要な授業科目数が多く、カリキュラムが過密になる傾向にある
- といった特有の問題がある。

32

(2).今後の短期大学に求められるもの(現状を踏まえた試案)③

②ミッションの明確化とそれに対応した教育課程の編成

○短大に関しては、大学への進学率が高まる中、あえて短大を進学先に選ぶ者に対する就職先の見方は厳しいとの指摘がある。

○こうした状況だからこそ、短大教育ならではのアイデンティティの確立が必要。

○一方、現在学生募集が堅調な短大に共通する特徴として、地域の人材ニーズを的確に把握した上で、それに対応した教育を行うことで、地域の評価を確立してきている点が挙げられる。



○「短期大学士」を授与する課程に関しては、完成教育としての短期高等教育を提供するという特性、及び地域の人材養成ニーズを踏まえつつ、教育上のミッションの明確化(アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーの3つの方針の策定と公表)を行うとともに、それを実現するための教育課程の編成、出口管理をしっかり行うことが重要。(学生の学習や精神面のケアも併せて実施することが望ましい。)

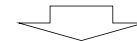
注:出口管理に関しては、全学的な取組が困難であれば、まずは定員の一部を対象としたコースで試行することや、複数の短大による共同学位課程により実施するといったことも考えられる。

cf:某大学で出口管理を強化した結果、志願者数が長期にわたり減少した事例。

34

(2).今後の短期大学に求められるもの(現状を踏まえた試案)②

○入学者の多様化の中で、学生に実力をつけさせる教育を実施することについては、概して小規模である短大が、単独で対応し続けることが困難であるなら、早急な対応が必要。



○複数の短大で連携し、人的・物的資源を持ち寄り、1短大あたりの負担を軽減しつつ、短期間で集中的に対応可能な方策をとることが考えられる。
(職業的な専門教育や、各短大独自のカリキュラムに充てる時間の確保に繋げることで、カリキュラムの過密化・就職活動の時間の軽減等も図られる。)

○短大間の連携にあたっては、短期大学コンソーシアム九州の「戦略的パートナーシップ」の考え方(※)も参考となると考えられる。

(※)地域の短期大学は、学生募集ではお互いライバル関係にあるものの、短期大学に共通する課題の解決のため、そうした関係を超えて連携することの重要性を提起している。小規模な私立校が大半を占める短期大学が単独で地域との関係を築くには限界があるとの考えのもと、「地域の短期大学教育に共通する課題に連携・協力して取り組む窓口が必要」としている。

33

(2).今後の短期大学に求められるもの(現状を踏まえた試案)④

③米国コミュニティ・カレッジの在り方を念頭に置いた方向性

○アメリカのコミュニティ・カレッジでは、学位課程だけでなく、様々な非学位課程も開設。
(特に非学位課程については、州や企業との連携により、社員等の教育プログラムとして開設されているものも見られる。)

○こうした教育課程の構成を、我が国の短大の現状を踏まえつつ取り込むことが、コミュニティ・カレッジ化への第一歩。

○具体的には、短期大学の中核たる学位課程を基盤としつつ、様々な非学位課程(専攻科、履修証明プログラム、科目等履修等)の柔軟な活用を行うことが考えられる。現在開設している非学位課程のみにとらわれるのではなく、より多様な人々がアクセスしやすいものを、既存の教育資源の活用や、自治体、企業等との連携により開設することが望ましい。

○卒業者を地域に送り出すだけでなく、リカレント教育等を通じ、現職者や、一度退職した者への学び直しの機会の提供により、更なる人材育成の機会の提供・地域貢献を実現。また、地域の高等教育機関として、様々な地域住民、特に高齢者の学びへの意欲に応える場の提供も、一つの方向性。

これらを行う際、複数の短大(もしくは大学との連携)によるプログラムの提供も考えられる。(なお、短期大学は、その発展の経緯から学生の大半が女性となっているが、18歳人口の減少等も踏まえ、より様々な層の学習ニーズへの対応の検討も必要。)

35

(3) .教育情報の公表への対応 (ネガティブからポジティブへ)

- 平成23年4月より、学校教育法施行規則が改正され、教育情報の公表が義務付けられた。(項目は前出のとおり。)
- 短大に求められる対応として、単に教育情報を公表すればよいというのではなく、積極的な活用を図ることが肝要。
- 具体的には、短大の良さのアピール、もしくは短大の活性化に繋がる公表の仕方の検討が求められる。そして、そのための基礎情報の収集のための、他大学の情報との比較による自大学の分析が重要。
- 他の大学や短大とのベンチマークにより、自らの短大の強みを見出し、積極的に打ち出すとともに、相対的に弱い点を見出し、強化を図ることが重要。また、定量的な強みと、校風等の定性的な強みとの組み合わせによるアピールの方策も考えられる。

(4大と比較した短大の強みの例としては、トータルの学費や教員1人あたり学生数(→少ないほど、より手厚い学生生活のフォローが可能)等が考えられる。

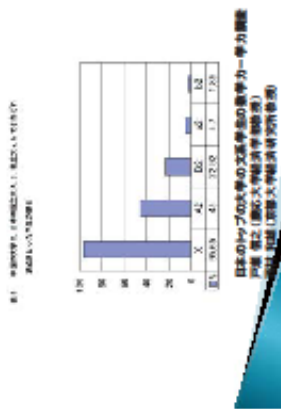
また、定量的な強みと定性的な強みの組み合わせとしては、例えば、教員数1人あたり学生数が少ないことにより、学生と教職員の距離が近いという校風を説得力ある形でアピールするなどが考えられる。)

36

以上

<p>株式会社短期大学 「高大連携推進センター」教育フォーラム開催</p> <h2>短期大学に必要とされる 教養教育とは</h2> <p>教育ジャーナリスト 友野 伸一郎</p> 	<p>こんな原稿を書いています</p>  	<p>大学の教育力を調査してきましたが、「教育力」って何でしょう？</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 昔は「教育力」は、問題にされてこなかった。 ▶ 教育力が問題にされるようになったのは、つい最近のこと。 
<p>以前は大学入学はゴールだった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 大学で何を学んだかは、一流大学ではほとんど問題とされなかつた。 ▶ (理系学部では、企業の採用担当者から「大学では何も教えないでいてください」と言われていた) ▶ その大学に入れた基礎学力があるというだけで、企業に評価され、就職できた。 	<p>「Jモード」は終焉した。</p> <p>大学で学んだことよりも、基礎学力を持っていることを基準に企業が学生を採用。OJTで職業知識を与えらるることも、各職場を定期的な経験して企業全体についての知識を身につける。大学の選抜性が高い時代に、また企業が終身雇用をなした時代は融解した。今では、Jモードは融解している。</p> <p><small>「電子版の『大学の教育力』(友野伸一郎)</small></p> 	<p>メリトクラシーとハイパーメリトクラシー。</p> 
<h3>3つの変化</h3> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 1. 大学入試の選抜機能の喪失 ▶ 大学全入時代 ▶ 学生募集競争の激化→入学方法の複雑化 ▶ 2. 企業における国際競争の激化 ▶ 社員をじっくり育てられない ▶ 3. 求められる能力の変化 ▶ メリトクラシーからハイパーメリトクラシーへ 	<p>そして、「教育力」が問われるようになった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ では、改めて「教育力」とは？ <p>何を教えたか＝教授者中心の教育</p> <p>▶ 何ができるようになったか ＝学習者中心の教育</p> 	<p>ところで、こうした観点はユニバーサル段階を考慮するべきでは</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 高等教育を受ける比率は約7割 ▶ 幼稚園の就園率も約7割 

日本の大学生の学力(1)



ユニバーサル段階で、多くの
高等教育機関で求められることは？

- 基礎学力
- +
- 汎用的能力(応用力)
- +
- 一つのことと深く取り組んだ経験

「教育力」に関してお話しするのは3つ。

- ▶ 1、アクティブラーニングのこと
- ▶ 2、初年次教育のこと
- ▶ 3、教養教育のこと

日本の大学生の学力(2)

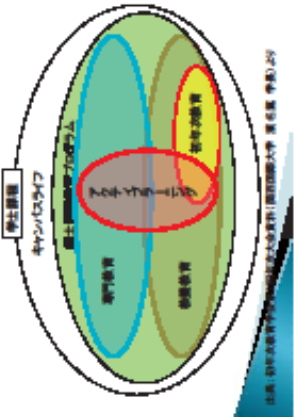
ある会社の新卒採用試験
「定額6万円のもの15個、45パーセント引きで購入した時、消費税を含めて支払額はいくらになるか？」
早稲田大学、立教大学、青山大学等の10人の受験者の正答率は？

キャリア教育について

キャリア教育が前提とされていることと見落とされていること。

- 1、前提とされているバリエーション
未来の目標設定→現在からの準備 (未来志向)
- 2、見落とされているバリエーション
現在の課題→所懸念になる→未来が見えてくる (ポジティブな現在志向)

アクティブラーニングと初年次教育と教養教育の関係



九州国際大学(法)の経験

課題A「ホップスとルソーについて与えられた資料を読み、二人の思想家の対比的な考え方を踏まえた上で、なぜ人間社会において法徳は必要なのかという点について、あなたの意見を400字以内で述べよ。」
課題B 次の3つの日本経済に関する表から読み取れることは何か、40字以内でまとめなさい。

国	1970年	1975年	1980年
日本	37.0	37.0	37.0
アメリカ	22.0	22.0	22.0
西ドイツ	22.0	22.0	22.0
フランス	22.0	22.0	22.0
イタリア	22.0	22.0	22.0

キャリア教育の課題

散歩の途中に富士山に登った人はいない、けれど・・・。
キャリア教育の課題は
見逃せない将来に対応できる学生を育てること。
そのため教育力であるべき。

この3者には共通点があります。

- 【教員にとって】
- 1、どれも教員にとっては負担が大きい。
 - 2、どれも専門研究のような評価に直結しない。
 - 3、システムとして取り入れるには大学や学部・学科の組織としての取り組みが不可欠。
- 【学生にとって】
- 1、高くて良い成績が取れる受講科目ではない。

調査の3つの前提

調査に当たっての3つの大前提

1. 学んでみなければ、学んでいることの本当の価値は分からない
2. 教員は教育よりも研究をやりたい、教育なら初年次や教養よりも専門教育をやりたい。
3. 学生は楽をして良い成績を取りたい、楽勝科目か、得意分野で単位を取りたい。

アクティブラーニングとは？

●アクティブラーニングを取り入れた授業形態

- 少人数授業
 - ・ゼミ、演習
 - ・小グループ学習
 - ・グループワーク
- 各課の学習形態を取り入れた授業
 - ・問題解決学習 / 問題解決学習 / 問題解決学習
 - 先生を取り入れた授業
 - ・Problem-based Learning / Project-based Learning
 - （京都大学 高等教育研究開発推進センター 溝口 清太郎 課長）

アクティブラーニング=能動的な学習 【学習者中心の教育】

アクティブラーニングには2種類がある。

本調査での「アクティブラーニング科目」の定義



教育力調査の3つの視点

- (1) 学生の「基礎的学力」が他国と比べて劣る
 - ・ 基礎的学力の不足が、就職活動や進学に不利な状況を生み出している
 - ・ 基礎的学力の不足が、就職活動や進学に不利な状況を生み出している
- (2) 学生の「自己学習能力」が他国と比べて劣る
 - ・ 自己学習能力の不足が、就職活動や進学に不利な状況を生み出している
 - ・ 自己学習能力の不足が、就職活動や進学に不利な状況を生み出している
- (3) 学生の「応用能力」が他国と比べて劣る
 - ・ 応用能力の不足が、就職活動や進学に不利な状況を生み出している
 - ・ 応用能力の不足が、就職活動や進学に不利な状況を生み出している



アクティブラーニングの必要性 「知識の定着・確認」



英語の学習にたとえると

- 日本の英語教育
- 明治以来 進んだ欧米の文化・文学の翻訳紹介
- 構文や文法の習得が中心
- これらを習得した後に、自然にコミュニケーションで使えるようになるはず.....
- コミュニケーションができるようになるには、並行して英語コミュニケーションの訓練が不可欠。

知識の習得+知識の活用

アクティブラーニングからみた教育力

アクティブラーニングの必要性 「知識の活用」

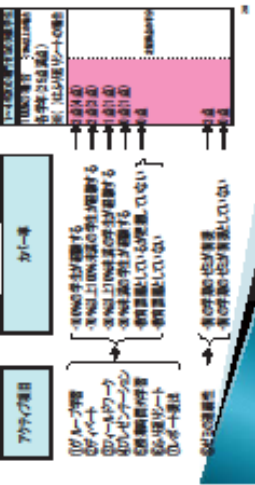


アンケート質問紙調査と実地調査

- ① アンケート質問紙調査
 - 「ゼミ・演習などの教育システム調査」
 - 1年から4年のゼミ・演習におけるアクティブラーニング項目の導入状況、導入の程度などの教育システムを質問紙で調査。
 - 対象：経済・経営・商学系学部、法学部・薬学部（全国の工学部・理学部・農学部、電子系学部および理学院）
 - 実施時期：2010年6月～9月
- ② 実地調査
 - 「4年間を通じた大学のアクティブラーニング調査」
 - ①の採点で得点の高かった大学・学部を訪問、カリキュラム設計やアクティブラーニングの取り組み実態などを取材。
 - 訪問時期：2010年8月～12月

アンケート視点・・・基準は各年次のAL経験者カバー率。

①質問紙調査の回答分析 専門系での演習の視点



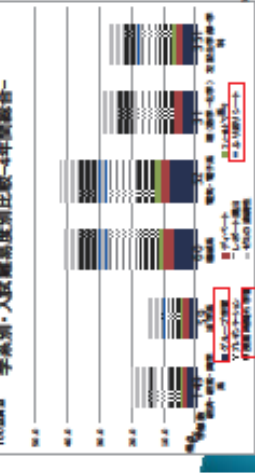
アンケート質問紙調査のポイント化は4年間の合計

①質問紙調査の回答分析 アクティブラーニング



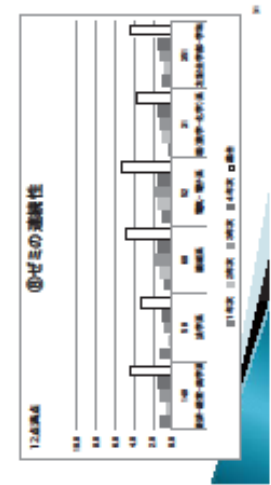
文系は理系に比べて得点が低い

①質問紙調査の回答分析 アクティブラーニング



文系では2年次がALの谷間

①質問紙調査の回答分析



経済系の実地調査訪問大学は私立大が多い

②実地調査の訪問大学

- ・函館大学(商学部)
- ・東日本国際大学(経営情報学部)
- ・千葉商科大学(サービス創造学部)
- ・中央大学(経済学部)
- ・立命館大学(経営学部)
- ・専修大学(経営経済学部)
- ・立命館大学(経営学部)
- ・創価大学(経営学部)
- ・新井大学(経済学部)
- ・流通科学大学(サービス産業学部)
- ・聖光学院大学(経済学部)
- ・和歌山大学(経済学部)
- ・香川大学(経済学部)
- ・宮崎県立大学(経済学部)

実地調査で評価した点(評価の視点)

①質問紙調査の回答分析

- 【評価の視点:Ⅰ】アクティブラーニングそのものについての評価
 - (1)一時的アクティブラーニングにおける知識定着・習得の具合
 - (2)1年次のアクティブラーニングの導入度
 - (3)2年次のアクティブラーニングにおける専門知識の活用度
 - (4)産学連携のアクティブラーニング導入度
- 【評価の視点:Ⅱ】教育内容統一するためのチームラーニングへの取組
 - (1)複数年次への習得力と対応したアクティブラーニングの導入度
 - (2)習得力と習得力と対応したアクティブラーニングの導入度
 - (3)習得力と習得力と対応したアクティブラーニングの導入度
 - (4)複数年次への習得力と対応したアクティブラーニングの導入度
- 【評価の視点:Ⅲ】学生の能力形成と自律・自立性
 - (1)習得力と習得力と対応したアクティブラーニングの導入度
 - (2)習得力と習得力と対応したアクティブラーニングの導入度
 - (3)習得力と習得力と対応したアクティブラーニングの導入度
 - (4)習得力と習得力と対応したアクティブラーニングの導入度

実地調査で評価した点(評価の視点)

- 【評価の視点:Ⅰ】アクティブラーニングそのものについての評価
 - (1)一時的アクティブラーニングにおける知識定着・習得の具合
 - (2)1年次のアクティブラーニングの導入度
 - (3)2年次のアクティブラーニングにおける専門知識の活用度
 - (4)産学連携のアクティブラーニング導入度
- 【評価の視点:Ⅱ】教育内容統一するためのチームラーニングへの取組
 - (1)複数年次への習得力と対応したアクティブラーニングの導入度
 - (2)習得力と習得力と対応したアクティブラーニングの導入度
 - (3)習得力と習得力と対応したアクティブラーニングの導入度
 - (4)複数年次への習得力と対応したアクティブラーニングの導入度
- 【評価の視点:Ⅲ】学生の能力形成と自律・自立性
 - (1)習得力と習得力と対応したアクティブラーニングの導入度
 - (2)習得力と習得力と対応したアクティブラーニングの導入度
 - (3)習得力と習得力と対応したアクティブラーニングの導入度
 - (4)複数年次への習得力と対応したアクティブラーニングの導入度

龍谷大学の指示書

- 【龍谷大学 経済学部】
- 入門ゼミの中で講義のマクロ科目との連動が図られている。特微的なのは、入門ゼミ指示書に『現代と経済』(全員履修)、『マクロ経済入門』(必修)の講義内容とリンクした読書(需要と供給、価格、GDP、景気動向、経済政策等を想定)と明記している点。

講義科目を独立させているのは日本だけ

- 【欧米系】
- ・同じ科目を週3時間行い、2時間が講義+1時間がアクティブラーニング
- ・アクティブラーニングでは講義で得た知識が深く問われる。
- 【日本】
- ・工学部系では講義と演習とセットの科目が見られる。
- ・経済系の学部では極めて少ない。

立教経済学部 経営学部 講義科目と演習(実証)が連携

- 専門教育科目 =**
基本プログラム(実証) + 「ハッパッグプログラム(理論)」
 ●ビジネス経営コース
 ●講義「株式会社の実務」
 ●AL「ビジネス経営演習」(グループワークでビジネスプランを作成)
 ●マーケティング情報コース
 ●講義「マーケティング実証」
 ●AL「マーケティング情報演習」(ビジネスゲームを導入して、定量的評価の実証)

立教経済学部 経営学部は高次のALと実学が連携

3年過半 ユニーク専門科目

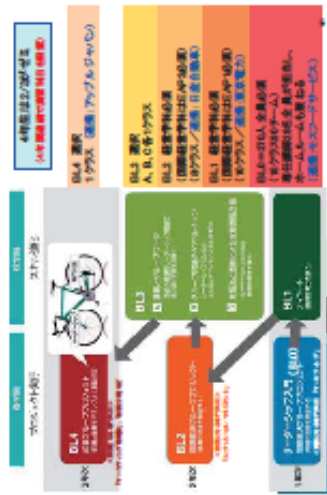
リアルビジネス課題がフォーカスされたPBLが特徴的実践・演習、である。



実地調査で評価した点(評価の視点)

- 【評価の視点:1】 エキスパート・エンジニアのニーズへの対応**
 (1)一般的アクティブラーニングにおける知識定着・習得の度合
 (2)高次のアクティブラーニングの導入度
 (3)学生連携のアクティブラーニング導入度
【評価の視点:2】 教育の質を向上させるためのチーム・ラーニング・PBLの実践
 (4)履修者が1人の積み上げ型科目における有機的連動性
【評価の視点:3】 学生の能力形成と自律・自立化
 (5)連携させるべき能力と対応したアクティブラーニングを含んだカリキュラム設計
 (6)学生の量産りと教員のコメントメント

立教大学経営学部 産学連携で実践セメスターの高次のAL



実地調査で評価した点(評価の視点)

- 【評価の視点:1】 エキスパート・エンジニアのニーズへの対応**
 (1)一般的アクティブラーニングにおける知識定着・習得の度合
 (2)高次のアクティブラーニングの導入度
 (3)学生連携のアクティブラーニング導入度
【評価の視点:2】 教育の質を向上させるためのチーム・ラーニング・PBLの実践
 (4)履修者が1人の積み上げ型科目における有機的連動性
【評価の視点:3】 学生の能力形成と自律・自立化
 (5)連携させるべき能力と対応したアクティブラーニングを含んだカリキュラム設計
 (6)学生の量産りと教員のコメントメント

専門知識と関連しないと「お遊び」

高次のアクティブラーニングは「専門知識との関連を不問にすると、楽しいが単なる「お遊び」になる。

【工学系】

専門知識を活用しての「ものづくり」= 高次のアクティブラーニングが行われている。

【経営系】

専門知識を問題とせず、単なるイベントになってしまっている科目も少なくない。

立教大学経営学部 高次のALにおける専門知識の活用

【立教大学 経営学部】

問題解決のために専門知識の活用が前提。

前期 BL0 →「マーケティング」

2学期 BL2 →「ファイナンシャル・マネジメント」

2学期 BL4 →「マーケティング動向」(新着分析)など

立教大学経営学部 チームティーチング

- BL0は共通キースト、共通テスト。教員の会議毎月1回。
- BL2でもパワーポイントスライドは統一し、コンテンツを行うことで内容が標準化。
- BLPは各クラスにSA(2年生or3年生)が1人つくが、SAは常時、授業内容やスライド内容、科目構成についての改善提案を行う。これがFDとなっている。
- BLPのみで行われている「匿名座談会」もユニーク。SAが選んだ学生4人程度による座談会を実施。学生の名前は匿名にしてその内容をテープ起こして、教員に閲覧させる。

立教大学経済学部 産学連携のPBL

【立教大学 経済学部】

「三学協賛型ゼミ」チームでは、連携企業のOJの報告書作成。

実習時間 16名 実証の他実習
 実証時間 16名 実証の他実習
 実証時間 16名 実証の他実習



実地調査で評価した点(評価の視点)

- 【評価の視点(Ⅰ)】アクティブラーニングの場における知識定着・理解の具合**
 (1)一般的なアクティブラーニングにおける知識定着・理解の具合
 (2)初年次アクティブラーニングの導入度
 (3)高次アクティブラーニングにおける専門知識の活用度
 (4)履修選択のアクティブラーニング導入度
- 【評価の視点(Ⅱ)】教育実践と学生のためのエンゲージメントの状況**
 (1)知識定着・理解の場における専門知識の活用度
 (2)知識定着・理解の場における専門知識の活用度
 (3)履修選択のアクティブラーニング導入度
 (4)知識定着・理解の場における専門知識の活用度
- 【評価の視点(Ⅲ)】学生の能力形成と自律・主体的な学習態度**
 (1)知識定着・理解の場における専門知識の活用度
 (2)知識定着・理解の場における専門知識の活用度
 (3)履修選択のアクティブラーニング導入度
 (4)知識定着・理解の場における専門知識の活用度
- 【評価の視点(Ⅳ)】学生主体の学習と教員のコミットメント**

振り回りシートと教員のコミットメント 経済系

実際にPDCAが回せるように、踏み込んだ仕掛けや仕組みがあるのは、経済・経営・商学学部では、立教大学経済学部、産業能率大学経済学部、新編大学経済学部、新編大学経営学部のみ。

【新編大学 経営学部】
 1年後期と2年前期のどちらか選択必修でグループ演習が置かれているが、その中でテーマを自分たちで決めてCPBLに取り組む。この授業で、「学び始めシート」「対話ジャーナル」「プロジェクト企画書」「グループ演習研究分組表」「振り回りシート」のシートがセットになって活用されている。これに教員は毎回コメントをし、蓄積して成績評価に結び付けている。

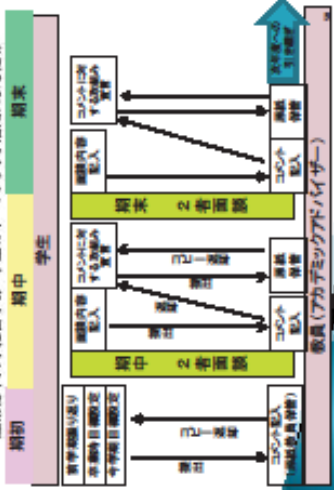
2010年度 経済系で評価の高かった大学・学部

大学・学部	1. 知識定着・理解の場における専門知識の活用度		2. 知識定着・理解の場における専門知識の活用度	
	評価	順位	評価	順位
立教大学経済学部	4	1	4	1
産業能率大学経済学部	4	2	4	2
新編大学経済学部	4	3	4	3
新編大学経営学部	4	4	4	4
立教大学経営学部	3	5	3	5
産業能率大学経営学部	3	6	3	6
新編大学経済学	3	7	3	7
立教大学経済学	3	8	3	8
産業能率大学経済学	3	9	3	9
新編大学経営学	3	10	3	10
立教大学経営学	3	11	3	11
産業能率大学経営学	3	12	3	12
新編大学経済学	3	13	3	13
立教大学経済学	3	14	3	14
産業能率大学経済学	3	15	3	15
新編大学経営学	3	16	3	16
立教大学経営学	3	17	3	17
産業能率大学経営学	3	18	3	18
新編大学経済学	3	19	3	19
立教大学経済学	3	20	3	20

立教大学経営学部 カリキュラムチェックシート

科目	1. 知識定着・理解の場における専門知識の活用度		2. 知識定着・理解の場における専門知識の活用度	
	評価	順位	評価	順位
経営学概論	4	1	4	1
経営学入門	4	2	4	2
経営学基礎	4	3	4	3
経営学演習	4	4	4	4
経営学実務	4	5	4	5
経営学応用	4	6	4	6
経営学発展	4	7	4	7
経営学研究	4	8	4	8
経営学実践	4	9	4	9
経営学探究	4	10	4	10
経営学創造	4	11	4	11
経営学革新	4	12	4	12
経営学変革	4	13	4	13
経営学突破	4	14	4	14
経営学超越	4	15	4	15
経営学飛躍	4	16	4	16
経営学飛翔	4	17	4	17
経営学飛騰	4	18	4	18
経営学飛昇	4	19	4	19
経営学飛躍	4	20	4	20

立教大学経営学部 学生のポートフォリオ活用による指導



初年次教育から見た教育力

振り回りシートと教員のコミットメント 金沢工大

学年	1. 知識定着・理解の場における専門知識の活用度		2. 知識定着・理解の場における専門知識の活用度	
	評価	順位	評価	順位
1	4	1	4	1
2	4	2	4	2
3	4	3	4	3
4	4	4	4	4
5	4	5	4	5
6	4	6	4	6
7	4	7	4	7
8	4	8	4	8
9	4	9	4	9
10	4	10	4	10

初年次教育の一般的な目的

グループ演習振り回りシート	評価
1. 知識定着・理解の場における専門知識の活用度	4
2. 知識定着・理解の場における専門知識の活用度	4
3. 知識定着・理解の場における専門知識の活用度	4
4. 知識定着・理解の場における専門知識の活用度	4
5. 知識定着・理解の場における専門知識の活用度	4
6. 知識定着・理解の場における専門知識の活用度	4
7. 知識定着・理解の場における専門知識の活用度	4
8. 知識定着・理解の場における専門知識の活用度	4
9. 知識定着・理解の場における専門知識の活用度	4
10. 知識定着・理解の場における専門知識の活用度	4

初年次教育の一般的な目的

- ① 学生生活や学習習慣などの自己管理・時間管理能力をつくる
- ② 高校までの不足分を補習する
- ③ 大学という場を理解する
- ④ 人としての守るべき規範を理解させる
- ⑤ 大学の中に人間関係を構築する
- ⑥ レポートの書き方、文献探訪方法など、大学で学ぶためのスタディスキルやアカデミックスキルを養育する
- ⑦ コミュニケーション、コミュニケーション力など大学で学ぶための思考方法を身につける
- ⑧ 高校までの受動的な学習から、能動的で自立的・自律的な学習態度への転換を図る

[フォーラム資料 3] 卒業生プロフィール

氏名	やぎ かなこ 八木 香名子	てらさわ まり 寺沢 万里	おおたか まいか 大高 舞華
湘北短期大学入学年度・学科	2009年度 情報メディア学科 (Webデザインコース) 入学	2009年度 生活プロデュース学 科(フットスペシャリストコース) 入学	2006年度 総合ビジネス学科入 学
出身高校	神奈川県立厚木西高等学校	神奈川県立相模原総合高等学校	神奈川県立厚木西高等学校
勤め先	厚木瓦斯株式会社	三光機械株式会社	厚木市農業協同組合 (JAあつぎ)
配属部署		総務企画部	総務部庶務課
現在のお仕事の 内容	<ul style="list-style-type: none"> ・営業職 (営業訪問) ・事務職 (電話対応、発注、請求 処理。広告制作) 	事務職 (電話対応、来客対応、 発注業務、納品処理、請求書の 照合)	一般事務、秘書業務 (電話応 対、来客対応、お茶出し、スケ ジュール管理、会議資料の作 成・準備、経理事務、共済手続 き、消耗品の管理)
仕事で目標としていること	業務内容を把握し、工事受付の電 話対応を一人でこなせるように なる。	<ul style="list-style-type: none"> ・効率よく業務を行う ・社内外でコミュニケーション を取り円滑に業務を行う 	スキルアップ。部署異動がある ので、どの分野でも活躍できる 職員になりたい。
大学で得たもの	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーション能力、プレ ゼンテーション能力 ・インターンシップ (プログラム 制作や現場での経験) 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業以外の様々な活動 (サー クル・学友会活動・湘北ナビ) ・インターンシップ 	<ul style="list-style-type: none"> ・入学前のPC通信教育 ・インターンシップでの経験
現在の仕事と大学で得たもの との関連	コンピューターグラフィックスのスキ ルが広告制作に役立った。	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な活動をとおしてコミュ ニケーションの大切さを学んだ り、仕事のことで相談できる友 人ができた。 ・インターンシップの経験が志 望のきっかけとなった。就職活 動の幅が広がった。 	「オフィスワーク演習」の授業 でのロールプレイングを使った 電話対応や来客対応。
湘北に期待すること	就職前に様々な経験が出来る環境	学生が様々なことに挑戦できる 場 (活動の場)	企業から望まれるような学生指 導
その他大学で身につけて(おけ ばよかった/おくと良い)と思わ れること	<ul style="list-style-type: none"> ・正しい敬語 (日本語リテラ シー) ・ビジネスマナー 	<ul style="list-style-type: none"> ・インターンシップ・授業以外 の様々な経験 (やりたい仕事を 探すきっかけづくり。様々な人 との関わり。) ・語学力 (仕事の幅が広がる。 海外のお客様と関わる際に役立 つ。) 	現在の金融関係の業種で活かす ため、ファイナンシャルプラン ナーや金融の資格や知識を身に つけておけばよかった。

2011年10月8日

高大連携キャリア教育フォーラム

現代型社会人育成のためのキャリア教育

ソニー株式会社 半導体事業本部
人事部 松久 功

1. ソニーと湘北短大

ソニー創業者・井深 大「私の期待する大学教育」

なんとかして有名大学を出ることが、もっと簡単に言えばよい大学へさえ入ってしまえば人生の大半が決まってしまう様な今日の世の中の機構に、私は大変疑問を感じる。ほんとうに世の中の役に立ち、その存在に意味のある人は、こんな教育の考え方の中から決して生れてこないだろう。

教育は決してだまっていて上から自動的に与えられるだけのものではない。自分で求め何処までも自分で追求して行くのが真の教育の姿ではないだろうか。こんな方向を目指し、どんどん実現して行ける学校がこれからの日本にはどうしても必要であるということから、湘北短期大学が生れることになったのである。実技を通じて智識のみでなく、世の中を生きていく、人を率いて行ける人柄を身につける教育を、私は大いに期待している。(昭和49年湘北短大開設の辞)

2. 湘北短大卒 ソニー隣在籍者

238名 (男性:92名 女性:146名)

<卒業学科内訳> 情報メディア:120名 総合ビジネス:44名 生活プロデュース62名 その他:12名

3. 採用実績

	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011
湘北短大	10	7	2	1	6	1	1	2	0	0	1	2	0	0
短大(全体)	52	59	18	19	33	10	3	2	0	0	6	27	0	0

<配属先> 開発、設計、事業企画、調達、品質保証、システム、管理、経理、営業、人事、総務 他 (人)

4. インターン受入実績

	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011
本 社	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	6	5	1	8
厚 木	8	13	11	4	9	6	9	3	4	3	5	1	3	3

- ・毎年2月～3月、経理、人事総務など間接部門を中心に受入れ。期間は1週間～1ヶ月間。 (人)
- ・受入職場にてチューター1名につき、業務、生活面の指導、サポートを行う。

[職場のコメント]

- ・思った以上に能力、スキルがあり、戦力として助かった。
- ・挨拶、礼儀作法もしっかりしており、一生懸命さ、勉強意欲が高く、職場にも刺激となった。
- ・初めての職場で仕方ないかもしれないが、受身の姿勢が少し強く見られることがある。
- ・社会人としてのコミュニケーションができるようになること。(言葉遣い、舌足らずな話し方)
- ・仕事の基本を身につけること。(正確さ、素早さ、仕事の優先順位を考えられるとよい)

新採用職員CDP（Career Development Program）

夢ある未来へ 人とともに、街とともに、大地とともに・・・

『夢ある未来』とは、

人とともに

～ 人とのふれあいを通じ、人々の健康で心豊かな生活を築いていきます～

街とともに

～ 地域住民との交流を深め、いろいろな活動を通じて住みよい街づくりをすすめていきます～

大地とともに

～ 自然を愛し、緑豊かな地域農業をすすめていきます～

平成 年入職 名前：



● 新採用職員CDPの目的

新採用職員の人材育成における主体的な柱として、① 配属先で仕事の経験を積みながら能力開発を行なうOJTと、② 研修や資格などのツールを使って業務に必要な知識の習得を行なうOff・JTに分け、JAあつぎの組織人として必要な能力開発を行なっております。この新採用職員CDPは内定段階から経験年数2年目までのOff・JTをプログラム化し、新採用職員が3年目以降のキャリアアップ実現を目指し、作成されたものです。

● 新採用職員CDPの意識

CDPは『組織の支援』と『職員の自律』が相まって効果を発揮するものであり、どちらか一方が変わるだけで有効に機能しないものです。組織が研修などの道具を用意したとしても、プレイヤーである職員の自発的な取組姿勢がなければ効果的な能力開発は成り立ちません。職員自らがモチベーションを高めて、このCDPを意欲的・着実に取り組むことにより、JAあつぎの組織人として、最大限の能力を発揮できるよう成長することが重要です。

● 自分の目標（どんな職員になりたいか）

-
-
-
-
-

～もっとATSUGI～（JAあつぎ行動規範）

Active	もっと積極的に行動します。	(行動)
Try	もっと何事にも意欲的に努力します。	(努力)
Service	もっと奉仕の心を大切にします。	(奉仕)
Upright	もっと正直な気持ちを大切にします。	(正直)
Gentle	もっと人に優しく接します。	(優しさ)
Ideal	もっと理想の実現に励みます。	(理想)

[フォーラム資料 6] インターンシップ先アンケート結果のまとめ (小棹)

湘北短期大学 湘北インターンシップ生に関するアンケート集計結果 (簡易版)

リベラルアーツセンターでは、インターンシップセンターと協働して、インターンシップ生受け入れ先にアンケート用紙を配布し、インターンシップ生の評価等をお願いしました。回答結果を集計・分析いたしましたので、ご報告いたします。

期間：平成 23 年 9 月 1 日～10 月 5 日

方法：郵送、FAX・返信による回答

対象：インターンシップ生受け入れ先企業等 62 社 (園) 回答：43 通 (回収率：69.4%)

設問 (Q1～Q3)

Q1 リベラルアーツセンターでの今後の教育の力点の置き方の参考とするため、下に掲げる<基礎能力>のうち、これまでお目に触れた湘北短大生に対して、5段階でご評価ください。

5	4	3	2	1
平均より優れる	平均よりやや優れる	平均的	平均よりやや劣る	平均より劣る

- | | |
|------------------------------|----------------------|
| a. コミュニケーション能力 | g. 企業やビジネスの仕組みの理解 |
| b. ビジネス文書力 | h. 就労意識・職業観 |
| c. 英語の基礎能力 (会話・読解・作文) | i. 自分の考えを纏め企画・提案する能力 |
| d. PCの基礎能力(E-mail、Office 群等) | j. 交渉・説得などの対人能力 |
| e. 計算能力・数理的理解能力 | k. 総合的な評価 |
| f. 社会人としての幅広い一般常識 | |

Q2 経済産業省が主となってまとめた「社会人基礎力」が重要視されています。この力は、4段階で評価されています。これまでお目に触れた湘北短大生の社会人基礎力を評価してください。

4	3	2	1
周囲が認める知識があり、行動ができる	知識があり、行動ができる	どちらかといえば知識があり、行動ができる	どちらかといえば知識がなく、行動もできない

社会人基礎力

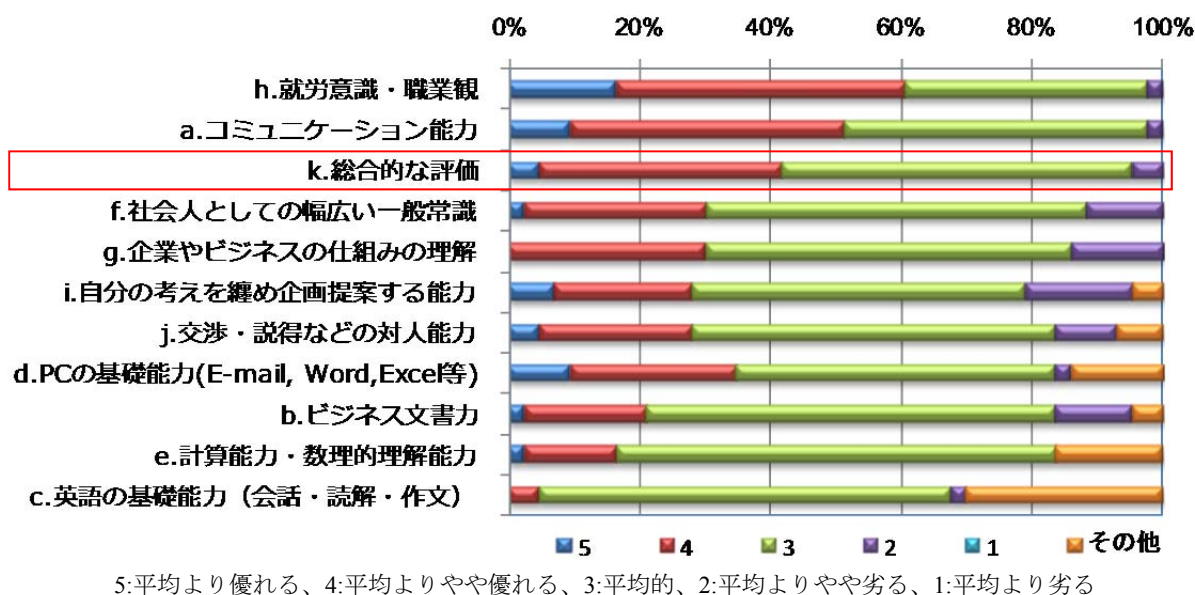
- ① 物事に進んで取り組むことができる
- ② 他人に働きかけ巻きこむことができる
- ③ 目的を設定し確実に行動することができる
- ④ 現状を分析し目的や課題を明らかにすることができる
- ⑤ 課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備することができる
- ⑥ 新しい価値を生み出すことができる
- ⑦ 自分の意見を分かりやすく伝えることができる
- ⑧ 相手の意見を丁寧に聴くことができる
- ⑨ 意見お違いや立場の違いを理解することができる
- ⑩ 自分と周囲の人々や物事との関係性を理解することができる
- ⑪ 社会のルールや人との約束を守ることができる
- ⑫ ストレスの発生源に対応することができる

Q3 インターンシップ学生の受け入れにあたり、企業・団体の皆様にとっての利点について、あてはまるものをお選びください。

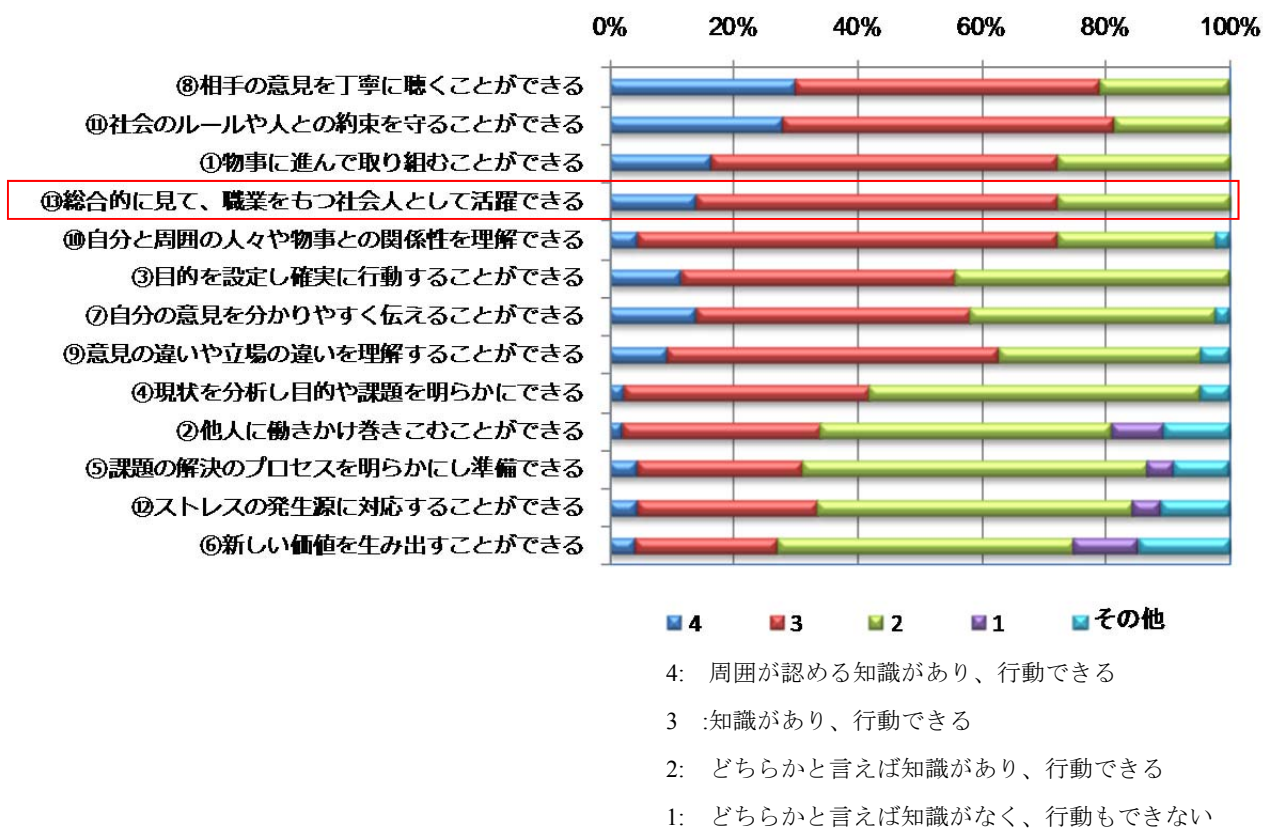
- | | |
|-----------------------------------|------------------------------|
| a. 学生の能力を把握することができる | e. 学生を受け入れることにより、組織内に活気が生まれる |
| b. 学生の感覚を知ることができる | f. 採用試験の判断材料の参考にすることができる |
| c. 学生の発想を業務に生かすことができる | g. 社会貢献の一環として認識することができる |
| d. 社員が学生を指導することにより、指導者として学ぶことができる | h. その他 () . |

回答結果（簡易版）

Q1. 湘北短大インターンシップ生の基礎能力の評価（5点法平均点降順）



Q2. 湘北短大インターンシップ生の社会人基礎力の評価（4点法平均点降順）



Q1 湘北生に向上が求められる基礎能力（総合評価との相関による分析結果）

下表より、向上が求められるのは、「総合評価と高い相関があるが、満足率の低い能力」であることがわかる。向上すべき最優先項目として「f.社会人としての幅広い一般常識」と「g.企業やビジネスの仕組みの理解」、次に「i.自分の考えを纏め企画提案する能力」と「j.交渉・説得などの対人能力」が挙げられる。

基礎能力 項目	相関係数	満足率
a.コミュニケーション能力	0.64	0.51
b.ビジネス文書力	0.41	0.21
c.英語の基礎能力（会話・読解・作文）	0.12	0.05
d.PCの基礎能力(E-mail, Word, Excel等)	0.26	0.35
e.計算能力・数理解理解能力	0.18	0.16
f.社会人としての幅広い一般常識	0.70	0.30
g.企業やビジネスの仕組みの理解	0.61	0.30
h.就労意識・職業観	0.69	0.60
i.自分の考えを纏め企画提案する能力	0.49	0.28
j.交渉・説得などの対人能力	0.55	0.28
平均	0.47	0.30

Q2 湘北生に向上が求められる社会人基礎力（総合評価との相関による分析結果）

下表より、向上すべき優先項目は「⑥新しい価値を生み出す力」と「②他人に働きかけ巻きこむ力」であることがわかる。

社会人基礎力 項目	相関係数	満足率
①物事に進んで取り組むことができる	0.636	0.721
②他人に働きかけ巻きこむことができる	0.566	0.372
③目的を設定し確実に行動することができる	0.659	0.558
④現状を分析し目的や課題を明らかにできる	0.401	0.419
⑤課題の解決のプロセスを明らかにし準備できる	0.477	0.326
⑥新しい価値を生み出すことができる	0.555	0.302
⑦自分の意見を分かりやすく伝えることができる	0.463	0.581
⑧相手の意見を丁寧に聴くことができる	0.600	0.791
⑨意見の違いや立場の違いを理解することができる	0.386	0.628
⑩自分と周囲の人々や物事との関係性を理解できる	0.465	0.721
⑪社会のルールや人との約束を守ることができる	0.521	0.814
⑫ストレスの発生源に対応することができる	0.430	0.349
平均	0.513	0.548

Q3 インターンシップ受け入れ先企業・団体にとっての利点（複数回答）

項目	回答数
社員が学生を指導することにより、指導者として学ぶことができる	26
学生を受け入れることにより、組織内に活気が生まれる	21
社会貢献の一環として認識することができる	21
学生の感覚を知ることができる	18
学生の能力を把握することができる	12
学生の発想を業務に生かすことができる	8
採用試験の判断材料の参考にすることができる	6

以上です、ありがとうございました。

[シンポジウム 記録]

●シンポジウム 「湘北短期大学におけるキャリア教育」 16：00～17：00

コーディネーター：湘北短期大学 インターンシップセンター長 総合ビジネス学科准教授
飯塚 順一

◆ 企業からの評価

ソニー株式会社 半導体事業本部人事部統括部長 松久 功氏
厚木市農業協同組合（JA あつぎ） 総務部人事課長 井上 勲氏

◆ 湘北短大におけるキャリア教育報告

三光機械株式会社 総務企画部 寺沢 万里 氏
(生活プロデュース学科 11 年卒業生)
厚木市農業協同組合（JA あつぎ） 総務部庶務課 大高 舞華氏
(総合ビジネス学科 08 年卒業生)
厚木瓦斯株式会社 八木 香名子氏
(情報メディア学科 11 年卒業生)

◆ アンケート調査結果報告

湘北短期大学 リベラルアーツセンター 情報メディア学科教授 小棹 理子



飯塚（コーディネーター）（以下敬称略）：シンポジウムの定刻の午後4時をまわりましたので、ただいまより3番目のプログラムにまいります。「湘北短期大学におけるキャリア教育」というタイトルでシンポジウムを開催いたします。よろしくお願いいたします。

今回のこのシンポジウムですけれども、短い時間の枠の中で実施いたしますので、特にどこか細かいところにつつまこんでというような観点ではなく、この後ご紹介いたしますけれども、卒業生のみなさんもお招きしておりますので、大きな観点からインターンシップ、それからキャリア教育というものを、みなさんと一緒に考えていきたい、と思っております。

また、最初にお断りさせていただきますけれども、時間の都合でこの時間の中では質問タイムをもうけることができませんので、このプログラムの後、情報交換会、を別室でご用意いたしております。飛び入りの参加も歓迎いたします。ぜひそこでご質問ご意見ありましたらいただきたいと思っております。

今回のフォーラムに先立ちまして、企業の皆様を中心にキャリア教育に関するインターンシップも含めまして、アンケートをとらせていただきましたそのご報告を、最後5分ほどになりますが、情報メディア学科の小棹教授からご報告申し上げます。

(紹介略)

飯塚：本学のインターンシッププログラムにご協力いただいております、毎年インターンシップ学生を受け入れていただいております、ソニー株式会社、それからJAあつぎ様のお二人。まずこのお二人から、人事ご担当の立場からのお話をそれぞれお伺いしたいと思います。

まず、松久様からお願いいたします。

松久：ソニーの松久でございます。今日はお招きいただきましてありがとうございます。座ってお話をさせていただき、ご了解ください。お手元にレジュメを配らせていただいているかと思いますが、今ご紹介に預かりましたように、ソニーではですね、湘北短大の学生さんを毎年受け入れさせていただいております。

湘北短大にソニー学園と書いておりますけれども、少なからず関係がございますそのへんのご紹介も含めて、お話しさせていただければと思います。

まずソニーと湘北短大ですが、もともとソニーは厚木に拠点を置いており、現在はテクノロジーセンターとして開発設計をしていますが、開設当初は、半導体の工場として、地方から来て働く社員の皆さんの高等教育をするために学校が設立されました。それが湘北短大のもとになった、と聞いております。昭和49年、その学校が当初の目的を果たしたということで廃校となり、新たに設立されたのが湘北短大です。そのときに、ソニー創業者の井深大が「私の期待する大学教育」という開設の挨拶をしています。それが今も建学の理念として引き継がれています。

湘北短大とソニーはそんな関係ですが、私はこちらに寄らせてもらうたびに、学内の雰囲気はソニーに似ていると感じます。例えば歩いていると学生のみなさんが「こんにちは」って声をかけてくださる、そういうところはなんとなくソニーっぽい、正しく言うと今のソニーというよりちょっと前のソニーに、大変似ているなあ、という感じがします。

そんな関係もあるからではないのですけれども、ソニーにおいてもたくさんの方に入社いただいております、実際はですね、240名程が在籍されています。おそらく定年退職あるいは転職等された方も含めると、もっと多くの方がソニーに来て頂いているのだらうと思います。女性だけではなくて、男性の方もおられまして、また技術系の方もおられまして、採用実績をみると配属先も多岐にわたっております。

インターンですけれども、さかのぼって調べるのは難しく、記録もきちんと残っていないようでお恥ずかしいのですけれども、先程飯塚先生からは15年くらい前からだと言う事でしたが、お手元の資料と大体合っているのかなと思っております。厚木だけでなく、品川の本社にも記録で追いかける限り、2007年以降ですが毎年来て頂いています。期間的には1週間から1カ月程度です。

受け入れ職場のコメントについてですが、受け入れ先が大変活性化されるというメリットが寄せられています。一方で学生のみなさんに、物足りなさというのを感じるところもございまして、うまく職場からのフィー



ドバックさせていただきながら、お互いにとっていいインターンシップができるようになっていったらいい、と思っています。簡単でございますが、ソニーについてご紹介させていただきます。

井上：厚木市農業協同組合人事担当をしております、井上と申します。本日はよろしくお願ひいたします。厚木市農業協同組合は幅広い事業を行っております。農協という組織でございますけれども歴史から事業分野、幅広くご説明させていただければと思ひますが、説明をしておりますと3連休が終わってしまう、ということになってしまいます。

湘北短期大学にみなさんがいらっしゃるときに入口の信号の所に「夢未市」というファーマーズマーケットがありますので、そちらをご覧くださいいただいたら大体農協がどういうことをやっているのかな、ということがわかるかなと考えておりますのでお帰りの際には是非お立ち寄りになっていただいでのぞいていただければと考えております。より深く農協の組織を知りたいという方がいらっしゃったら、中でキャベツ1個買っていただいで今晚のご飯をおいしく食していただければと考えておりますのでよろしくお願ひいたします。

湘北短期大学さんで今回ご紹介をいただきましたが、実はですね、JA あつぎは過去をさかのぼりますと、あまり採用という関係ではありませんでした。私が人事担当をして6年目になりますが、人事担当になりました求人票を（大学に）提出した方がいいという事を上司に相談しました。地元に着した企業ということで、せめて地元の大学さんには出ささせていただきたいということを了解を得て、当時こちらのキャリアサポート課の近藤次長さんに話をさせていただき、求人票からパソコンから採用へつなげるということになったわけです。

今日うちの職員で来ております大高ですが、彼女は、私が1年目の時に、支所のインターンシップとして仕事をやらせてくださいと直接、支所に来ました。所長から電話をいただきまして、こういった学生が来ていると、仕事をさせてもらいたい、と言って来ていると、人事でなんとかしてくれ、ということで急きょ話をお伺いしましたら、インターンシップということで職場体験をさせていただきたい、と。私はすぐ上司に話して、せっかくのいいチャンスなのでインターンシップを受け入れさせてもらいたいと伝えました。それまではうちの企業もインターンシップをやっていなかったのですが、大高さんからインターンシップが始まって、湘北さんとのつながりになり、それから毎年数名のインターンシップ生を受け入れております。

インターンシップの状況としましては、その数名の中からはいろいろと経験をしていただいで、主に庶務の仕事、それから金融、一般に言われる保険の分野、うちでは共済といいますけれど、そちらの3部門で体験をしていただいでおります。

率直な私の印象なのですが、非常に湘北の学生さんは素直であるという印象をうけております。先程も友野さんのお話にもありましたけれど、非常に、企業に入って仕事を覚えるためにはですね、まず素直さが必要だと考えております。その素直さがないと仕事を習得しようとか、意識付けが足りないと思うからです。湘北の学生さんは非常に素直で、入って2～3年経ちますと、非常に成長する、という状況でございます。うちとしてもインターンシップをとりいれて、湘北の学生さんにも職場を体験していただきたいと考えておりますのでよろしくお願ひいたします。

またのちほどみなさんといろいろお話をさせていただくのですが、私も担当としてですね、現場の方でやっておりますので、みなさんにお役に立つことが少しでも話ができればと思っておりますので本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

飯塚：はい、ありがとうございました。

松久さん、井上さん、それぞれ少し異なる切り口からお話いただきました。

今お二人のお話の中にもありましたけれども、本学ではインターンシッププログラム、これ今年で15年目を迎えます。主な形を少しだけご説明いたしますと、1年次の春休み、1年生最後の2月から3月にかけて1週間から4週間、のプログラムを用意しております。昨年度2010年度は、のべ150名を超える学生がインターンシップの実習を体験しました。

これはいわゆる選択科目としておいていますので、希望する学生のみインターンシップに参加いたしますけれども、これに先立ちまして、約半年間の事前のトレーニング科目、インターンシップリテラシーという科目がございまして、それでトレーニングを受けた学生が、1年生の最後の春休みにインターンシップの実習に参加する、そういう形をとっております。

インターンシップは本学では選択科目です。わたくしどもインターンシップの担当教員としましては、がんばる学生に一人でも多く実習に参加してもらいたいというのが本音のところなのですが、別の見方をしますと、やらなくてもいいプログラムでもあります。インターンシップは実習先で緊張しそうですし、毎日毎日通勤のラッシュの電車で行って、ラッシュアワーに通って、なんだか大変そうだからいいです、そういう学生の声ももちろんあります。

そういった中で今日は3名の卒業生のみなさんは、あえてインターンシップを体験したみなさんなのですが、学生時代に、まずどうしてインターンシップをやってみようと思ったのか、そのへんをちょっとお話しうかがいたいんですが。

寺沢さんは、品川のソニー株式会社で、一番期間の長い長期のプログラムに参加しましたよね？

寺沢：厚木の・・・

飯塚：ごめんなさい。厚木の・・・

寺沢：はい。5週間。

飯塚：5週間という話が出たのですが、学科によりまして、期間を延長することももちろんあります。

企業の受け入れ先の都合によって期間を流動的に変更しているわけですが、5週間と聞いたときに、大変だなとは思いませんでした？

寺沢：大変というよりも、私が志望した理由としては、働くことが理解できていなかったもので、働くってどういうことだろう、って思いがあったので、楽しみ、の方が強くてですね、5週間で自分がどんな仕事、というものを体験できるのだろう、これを機にどういった就職活動をしていけるのだろう、という楽しみのほうが強かったもので、やはり1週間という短期よりも、長期のインターンシップでやりたいという思いがありました。



飯塚：わかりました。単純に仕事を体験してみたいということでしたら、たとえば人によっては、せっかくだからお金もらえるアルバイトでいいな、という人がいると思うんですけど、それをお金は何も出ないインターンシップ、（交通費とか一時補助とかはあっても）はどうしようかなとは思いませんでしたか？

寺沢：アルバイトと正社員の違いとかっていうのを良く面接で聞かれるよ、というふうに言われていたんですけど、何が違うんだろう、というのが私自身にもわからなかったんで、どうせなら正社員として（ではないですけど、インターンシップなので）、その体験を、どうして違うんだろうっていうのを自分で確かめてみたい、という気持ちがあったので5週間のインターンシップを選びました。

飯塚：わかりました。なかなか今お話を伺ってみて、当時、学生としてはしっかりした考えだな、と、何も打ち合わせをしていませんので、ちょっと感心しながら聞いていたのですけれども。

こんどは大高さんに聞きたいんですが、さっきJAあつぎの大高さんの上司でもいらっしゃる井上さんの方から、大高さんは自分からインターンシップ先を開拓した、というお話がありました。

基本的にどこの大学、短大でも、インターンシップについては、実習先というのは学校側が基本的には用意します。もちろんこの湘北短大でもきちっと学生のインターンシップの希望の人数分の実習先は用意しているわけですが、あえて、大高さんの場合は自分で、それまで実習先として無かったJAあつぎさんの方に、自分から交渉したわけですが、けっこう度胸がいると思うんですが。



大高さんどんな気持ちで、これに取り組んだのですか？

大高：実習先を選択するときに、私自身金融業界に興味がありましたが、そのときに湘北の実習先のリストの中には金融業界が一つもございませんでした。貴重な機会なのでできれば今、自分が今興味のある金融業界に行って実習を行いたいという気持ちが大きかったので、自分で見つけてみようと思いました。

飯塚：すばらしい姿勢だと思うのですが、恐さとかはありませんでした？私もたくさんさんの学生と接していて、なかなかそういうふうに分の知らない世界ですし、学校でも全く用意していない所に自分で電話をして、というのはなかなかできることではないのですけれども。

どうですか？恐さみたいなものはその頃はなかったですか？

大高：すごく迷ってしまって、他にも魅力的な企業さんもたくさんありましたので、そちらに希望を出そうか、やっぱり自分でやりたい所に行ってみようか、そのときは迷っていたんですけども、なかなかそういう機会もないですし、学生の時しかできないな、と思いましたので挑戦してみようと思いました。

飯塚：わかりました。私の所にも毎年、私の知っている会社でこういう会社があるので交渉してみてもいいですか、とか懂れている会社があるので、自分でお願いしてみたいんですが、と言ってくる学生もけっこういるんですけども、実際にそれをやる学生はそんなに多くないんですね。実際に挑戦してみようというという姿勢は、それはやってみて良かったんですね。それが今の仕事にしっかりつながっているわけですね。

今度は八木さんにもお話を伺いたいんですが、私の記憶ではとくに学科の先生からインターンシップやってみたら、と強く薦められたというふうに分たんですけども、自分では当初、先生から薦められる前にやってみようとは思いませんでしたか？

八木:当時まだインターンシップというものが湘北にあるということを知らなかったの、先生に薦められたことでインターンシップに行くきっかけになりました。

飯塚:八木さんはたしか、私と初めて、インターンシップを申し込みたいんですが、という話をしたとき、ちょっと迷っているなあ、とどうしようかなあという印象をちょっとあったのですが。でも最終的には自分で決めて。

八木:そうですね。4週間という期間をきいたときに長く感じてしまい、自分がやっていけるのかなあという不安もありました。ちょうど2月頃は就職活動の始



まる時期という事で、就職活動への支障はないだろうかという悩みもありました。それで先生にも相談したのですが、就職活動に対する不安もインターンシップに行くことと同じようにあって、それを、就職への不安があるのなら一度実際に企業の方へ出向いて、インターンシップさせていただいたうえで、自分の中の印象が変わるのではないかと、自分のスキルアップのためにも挑戦してみたいと思ってインターンシップに行くことを決めました。

飯塚:続けてお伺いしたいのですが、実際インターンシップに行ってみて感じたことで、大きな違いというのは何かありましたか？

八木:思っていたよりも周りの方にも恵まれていたので、教えていただいて学ぶことも多く、今までできなかったことができるようになって、本当に自分が成長できることを実感できたり、その成長できたことを自分で実感できたときにやりがいを感じたりすることができました。そうすると、働くということへの不安は、学生の時はちょっとあったんですが、そういったやりがいを見つけることで良い方向に持っていける、ということを知って、就職活動にも自信を持って活動することができました。

飯塚:やはり最初は不安もあった、ということなんですけれども、とりあえずやってみよう、ということによって一歩踏み出して、終わってみたら本当にやっていたと。

八木:そうですね。自分が不安と思っていたことに挑戦することで、インターンシップに行ったら企業で学ぶことも、自分を成長させるという面でも、自分に自信が持てたり誇りを持つことが出来る出来事がやりとげることができたので良かったなと最後には思いました。

飯塚:はい。ありがとうございます。

卒業生のみなさんの話を聞いていると、こちら側が襟を正さなきゃな、という気もするんですけども。3人のお話をうかがって、とりあえずどうなるかわからないけどやってみよう。おそらく自分のプラスになることは間違いないからやってみよう、という姿勢をとっても強く感じたんですけども。

今のような若い方々の話を伺って、松久さん、井上さん、いかがでしょう、こんどは人事のご担当のお立場からお話を伺いたいたいです。

松久さんはこのインターンシップのプログラム。私達もちょっとそうなんですけれども、インターンシップというのは役に立つもの、今、3人の卒業生もおっしゃっていたように、役に立つものだと、毎年毎年わたしたちも学生を送っているとだんだんそれに慣れてしまう部分もあって、本来であればもっといろんなところを考えるべきところを、学生にも絶対に役に立つから、と慣れてくるとちょっと簡単に薦めてしまう、これは良くないんですけども、受け入れて下さる立場から反対に、インターンシップはたとえば社会貢献の一貫だから、ということで、それで慣れてしまうようなことはないか。

もしそんなようなことがあれば教えていただきたいんですけども。

松久：ちゃんとしたお答えになるかわからないですが、インターンシップの今の流れを見てみますと、就職活動の一環という要素が非常に強くてですね、たとえばソニーに入りたいからインターンシップをやってソニーを受けて名前を売ってですね、場合によってはうまくいくんじゃないかとかですね。

会社側もインターンシップで採用に結び付けたいという、どこか採用の意図が見え隠れするようなどころがあって、私も否定しませんが、そういうところが、どうしても新規採用のツールとして見られてしまうことが多いと思っています。



今、3人のお話を聞くと、なるほど実は問題意識を持って来ていただいている、と強く感じました。そうすると企業も社会貢献うんぬんではなく、未来ある学生さんが将来活躍できるように何ができるのかな、という発想で、インターンシップを捉えなおす必要があるのかな、という気がしました。

正直、職場に言わせるとけっこうインターンシップは嫌だという所もけっこうあるんですね。

飯塚：たぶんそうだと思います。

松久：もう仕事用意しなきゃいけないし、面倒みなきゃいけないし、時間空いたらなんかやってもらおうことを考えてやらなきゃいけないし、それなりにクレームもあるのですが。でも一度やるとけっこう来年もいいですよ、って言ってくれるところも多いですね。それは先程も言いましたように、それは職場もなにか刺激があった感じてくれているからだと思います。最近、新入社員が少ないものですから、教えることが一番学ぶ機会になるのですが、そういう機会にもなっているんですね。

一方ですね、もう一步進むとですね、職場の方から、そもそも事前に何を学びたかったのか教えてもらえれば、もっと事前に用意したのに、という建設的な意見に入ってくるが多くなってきます。就職のツールとしてのインターンシップではなくて教育の一環として、あるいは職場の活性化を含めた制度関係がなんかできないかなと今お話を聞いて改めて思いました。

飯塚：ありがとうございました。大変ありがたいお言葉だなと思います。教育の一貫と捉えて頂けるのは実際にはなかなか、私共がインターンシップを受け入れて頂く際に難しい部分でもあります。受け入れていただく企業さんの中には、もしかするとアルバイトの代わり、人件費もかからないですし、若い学生さんにちょっと雑用をやってもらおう、というのにはちょうどいい機会だとお考えになるような場合もなくはないんですけども、そういった意味では私達もこのインターンシップというものを、これだけのトレーニングを積んで送り出している、いろいろな側面を紹介してやってるわけですけども、いまお話いただいたような形での受け入れというのは本当にありがたい形だと思います。

おそらく松久さんもそういうふうに教育の一環というふうに感じていただけるまでには、おそらく現場の方と松久さんといろんなやりとりがおありだったと思うんですけども、なにか一番大きな問題点とありますか、難しかった点というのはどんな点でしょうか？

松久:やはり何をやらせたらいいの?っていう質問が多くてですね。もう一つは、期間が限定されていること。なかなかその期間限定で何かやってもらう、っていうと難しい。それで先程のように、雑用でもいいんだっけ、というようになってしまう。

学生がそういった問題意識を持ってこられるというのは、それにお答えできるインターンシップスタイルとこののを、私たちは考えなくてはいけないのですが、ソニーでそれを出来ているかというとなかなかそこまではできていないのが現状ですけれども、来年以降はまたいろいろ考えたいなと思っております。

飯塚:ありがとうございます。

井上さんはいかがでしょう?さきほど大高さんのように、きっかけとしては大高さんからぜひやらしてください、とJAあつぎさんの扉を開いたということになるんですけれども、その後の受け入れとして、卒業生の方々の声を受けて、受け入れ側としてのお考えを教えてくださいなんですけれども。

井上:うちもソニーさんと同じようにやはり、受け入れる部署、それから体験していただく仕事、最初は非常に困ったと。やはりうちとしましては、大高は最初、金融をやりたいという話がありましたので、非常にいまコンプライアンスの関係もありますんで、顧客の情報とか、職員以外の方がそこいることによって情報が流れたりすることが、問題になる可能性がありました。そこから整理して、庶務の関係だったり、金融それから共済だったり、ということで、かなり各部署と受け入れの前には毎日のように業務内容を検討したということです。ただ、受け入れる側としては、ほんのさわり部分だけではやはり本人のためにならない、とそんなことも役員と話をさせていただきました。



うちの役員がそのときに話した内容ですが、体験は体験で受け入れを全面的にバックアップしてあげる。その後、採用にうちに縁がなかったという場合にも、ほかの企業さんでしっかり就職活動ができるように、それなりの礼儀とかそういった人間にして成長させて送り出してやれ。このような話を役員からいただきまして、それを各部署に人事の方からお話をさせていただきました。

受け入れに対しては、未来のことに悩みながら、プログラムを作って、やっとなんか最近になって順調になってきたというかんじです。

飯塚:ありがとうございます。井上さん、先程、松久さんからのお話にも少し出てきたんですけれども、若手の職員の方の能力の向上という、教えると言う事がたとえばインターンシップの学生が実習に伺った際にはどなたかが指導させてくださるのかなと、最近では、かつて実習に行っていた大高さんが指導係になっている、ということで、私も訪問したときに非常に嬉しく思ったんですが、その面ではどのような形になっていらっしゃるのでしょうか。

井上:インターンシップ以外にもですね。新採用の形もそうなんですが、先輩が基本的には指導に携わるという形で、うちは基本的にはやっております。それはなぜかという、教えるということは、非常に自分が勉強しなければならない。仕事に対してあいまいなところもはっきりしていけないと教えられないということが、当然ありますので、やはり教える事によっても、教える先輩が非常に成長するという面がありますんで。今現

在もインターンシップを受け入れておりますが、各部署、比較的一番若い職員が事務の指導や電話の受け答えなどを指導しております。

いま大高は庶務のほうを担当しておりますので、インターンシップはまず庶務は2日間。基本的には大高の方から学生さんに指示をしてもらうということになっています。

飯塚：大高さんはいかがですか？私が実際に今年の2月だったのでしょうか、学生がインターンシップの実習期間中に、担当教員である私をご挨拶に訪問に行ったんですけども、その最後に大高さんが指導していたところを拝見して、かつて実習生だった大高さんがこんなにしっかりやってくれてるんだなあ、というふうに思ったんですが、自分が若いながらも教える立場になるのは現場ではどうでしょうか？負担に思ったりということはないですか？

大高：わたしは就職してもう4年になるのですが、直属の後輩が今までいたことがないので、唯一インターンシップのときは先輩になるきっかけなんですけれども。やっぱり教えることって難しいなと毎年感じています。

飯塚：インターンシップの学生に教えるのは、そうすると今年で3年目ですか？

毎年自分の中で、たとえば教え方とか接し方とかで、今年ここはちょっとうまくいかなかったから来年はこうしようとか、そんなふうなことはありますか？

大高：自分自身の仕事もまだ慣れていない部分がありまして、実習生にこれやってみてと放置してしまったり。毎年それを反省点にしています。

飯塚：先程、井上さんが、教えることは成長につながる、ととても簡単にサラッとやってのけましたが、現場の方としては、やっぱりそれは不安でもあり、もちろん自覚に時間がかかるとか、いろんなことがあると思いますけれど。でも私が（大高さんのインターンシップの指導を）拝見した時に、大高さんがいろいろアドバイスをされていて、実習生の学生が非常に一生懸命、大高さんの言葉をきちんと聞こうと言う姿勢が見えたんですけど。反対に実習生の学生から刺激を受けるとかいうものはありますか？

大高：学生さんから質問されて、それをすぐには答えられないことがよくあるので、そういうところで自分の知識不足だなと思うことがあります。

飯塚：やはり時期としては、毎年2月頃に学生が実習に何うんですけれど。毎年同じ繰り返しではなくて、なにか新しい新鮮さとか学生に対して、そういうのは学生に対して感じていらっしゃいますか？

大高：はい。

飯塚：わかりました。ありがとうございます。特に大高さんの場合は、自分で切り開いたということで、そのあとよく学生に大高さんの例を学生に説明するんですが、いま松久さん、井上さんそして卒業生のみなさんから話をうかがっていると、卒業生の3人のみなさんはもちろんそうですけれども、松久さん、井上さんから、インターンシップ、その取組みそのものが、新たな取組みといたしますか、新しいものを受け入れよう、新しいことに取り組んでいこう、という姿勢を、私はいまお話を伺ってとても強く感じたんですけども。

この新しいことに取り組んでいこうという姿勢を、聞きながら、ソニー株式会社の創設者、松久さんに紹介していただいた井深さんの言葉と通づるものがあると思うんですが、与えられたものだけをやるのではなくて自分からそこを探していく、求めていくという姿勢、というのを今、それにつながるなあと感じたんですけども。

寺沢さんは、今の職場においては、かつてのソニー株式会社でインターンシップを経験されて、なにか新しいものにチャレンジしようというような姿勢というのはなんらかの形で活かされていますか？

寺沢：そうですね。よく学長がチャレンジ精神といていたように、私は今、業務を行っている総務企画部のほうなんですけど、私が今行っている業務をやっている方がいない状態でのスタートだったんですね。ですので、自分で手探りで業務を覚えていくような形だったんですけど、ゼロからのスタートなので、前の方のをそのまま引き継ぐのではなくて、もっと良くしていく、改善していくことができるな、っていうのがあったので、いまチャレンジしていること挑戦していることとしては外注さんとの関わりが多いので、外注さんと相談しながら業務改善を行っております。

飯塚：寺沢さんは、まだ入社一年目じゃないですか？

寺沢：はい。

飯塚：半年足らず、ですよ。先程、学生時代のインターンシップに不安はありませんでしたか、なんて聞きましたけど、今の方が、不安という点では完全にプロフェッショナルとしてやっていかなければならないですよ。やっぱり不安は感じますよね？

寺沢：そうですね。不安もあります。あるんですけどそれよりも改善とか行っていくと色々な人と関わる機会が多くて、楽しいと感じる部分も多くてですね。つい最近も外注さんと一対一で話し合いをして、今度こうしていこうという相談とかをしていったんですけど、そういった自分が知らなかったことを知ることができますので、不安ももちろんあるんですけどそれよりもインターンシップをやるきっかけのときのように、楽しみの方が多いような気がします。



飯塚：そうですね。お話を伺っていると、なんか若いってうらやましいなあと思いながら聞いてたんですけども。わかりました。

今そういう不安とか楽しみっていうのが出てきたんですけども、八木さんの場合には、当時、株式会社ラッシュジャパンという会社で、実際はかなりハイレベルなプログラミングなどこなされましたよね。あれはもともと予定にあった内容でしたか？

八木：はじめてラッシュジャパンさんを訪問させていただいたときに、私が学んでいることを活かせる仕事をまかせたい、とおっしゃっていただいて、学校ではどんなことをしているの？って担当の方が聞いてくださって。パソコン関係の学科で毎日勉強しています、ということをお伝えしたときに、じゃプログラムの方とか挑戦してみようか、というお話をいただきました。

それまでは、プログラムの授業は受講していたんですけど、一つ二つほどで。本格的にプログラムの方を専門的に、自分から受講していたわけではなく、最初のうちはたいへん苦戦してしましまして。1か月という限られた期間で一つのもを作り上げるということでしたので、最初はもう頭がパンクしてしまいそうな時期もありましたが、家では復習して、数学など高校時代から好きだったので、自分が動かしたとおりの公式を当てはめていって、最後にそのとおりになるというプログラムの形がすごい自分の好みにあっていたというか。う

まくいったときの達成感がやはりちょっと、新しい感覚を得ることができたので、1か月間すごく楽しく、初めての経験だったのですがインターンシップ先で楽しく、作り上げることが出来ました。

飯塚：はい、わかりました。

実は八木さんがインターンシップに行かれる際に、先方の担当者と私が直接やりとりをしたんですけども、情報メディア学科に所属しているといいましても、一年間完璧に終わっていませんし、あくまで一般事務のレベルで、というお話をしたんですが。八木さんが履歴書を送ったり、いろんな事があってから、先方からまた再度連絡がありまして、もうちょっとハイレベルなことをやらせてみたいんですがいいですか、とお話が、実は私のところにありまして。私もちょっと、ん？と思ったんですが、いやあもうこれはどうなるかわかんないけれどまた例によってやってみようと、私が勝手に判断して是非やらせてみてください、ということでお願いした経緯がありますけれども。

このこと何も言っていないですよ。

八木：はじめて聞きました。

飯塚：ごめんなさい。勝手にやっちゃいましたけれども。

でも、今お聞きしますと、インターンシップ中も家で勉強しながらやられた、と。

八木：そうですね。最初の3日で1つの言語を覚えて、というハードなスケジュールだったので。でもすごく楽しく行えて。プログラムというのも今まであまり就職の視野にも入れてなかったんですけども、そこで体験したきっかけを通して就職活動の職種の視野も広げようかなというきっかけにもなりました。

飯塚：はい、わかりました。いろいろお話を伺ってますと、なにか今インターンシップということを軸にみなさんからお話を聞いてみたんですけども、ひとつちょっと別のキーワード的に、なにか挑戦する、とか、やってみる、とかこういうことが卒業生のみなさんからも松久さんや井上さんからも私はとても感じ取れた、先程もお話したんですけども、感じ取れました。もしかすると、どうなるかわからないけどやってみよう、という姿勢が、キャリア教育っていうものの基盤に、根底にあるのかもしれないなというふうに今感じました。そういうふうに挑戦するとか自分から求める、というのは学生に教育していく、というだけではなくて、われわれ、いわゆるみなさん全員プロフェッショナルとしてなんですけれども、企業人、企業の方々、それから大学関係者ですね。そうした立場の人間が常に持つべき意識なんだなと感じます。

またあともうひとつ感じたのは、常に現状をあたりまえというふうに受けとらずに、これはきつこういうふうにしたほうがいいのかも、とか。少しでもいい方向に変えていこうっていうようなことは、先程の冒頭のお二方のお話でも私は感じましたけれども、そのへんを私達が教育に反映させていく、と。このキャリア教育というものの根底がもっとしっかり持てるかもしれない、と感じました。

それと時間が終わりに近づいているんですけども、最後にちょっと今日のまとめをさせていただきますと。挑戦する、あるいは新しい環境に取り組むというのは、インターンシップはもちろんですし、この短大で実施している入学前教育ですね。これも高校生が短大に入る前に是非やってみようということで取り組む課題ですけども、そのへんにも共通していくものだなというふうに感じました。

おそらくインターンシップのプログラムを通して、また湘北短大でのキャリア教育というものが、今日の基調講演でも友野さんがお話しいただいた中で、生きる力とか、それから見通せない将来に対応できる力を育てるというキーワード、言葉があったんですけども。私達もそういうところをしっかりと見据えて、このインターンシップやキャリア教育というものに取り組んでいけたらと、思います。

最後にちょっと松久さん井上さんに、ちょっとお伺いしたい点がありまして。

私、今お話しを伺いながら、いま厳しい経済状況、それから雇用状況。厳しい状況ですけれども。人事のご担当のお二人に伺いたいのは、こういうときだからこそ、自分のキャリアを育てていく、考える、いい機会なのかもしれないというふうに今感じているんですけれども。

松久さんいかがでしょうか？

松久：難しい質問ですね。会社で採用の担当をしていますと色々な学生さんと話します。それ以外にも、親戚縁者ですね、知り合いの方から、うちの息子が・・・とか、そういう風な相談を受けたりもします。そうした時、今、飯塚先生がおっしゃったように、今すごく世の中が安定志向に向かっていると感じる人が多いです。

そこと飯塚先生の話されたチャレンジとか挑戦というキーワードとキャリアとを結び付けることができます。キャリアを自分が立っていく道と定義して考えてみましょう。たとえば僕は最初、営業を希望してこの会社に入ったのですが、今は人事をやりたいと思っています。それはある日、上司から人事やれ、って言われて、えっ？って言いながら、僕はそんなの希望していません、とか言ったんですけど、やるだけやれ、って言われてですね、やってみたら、これがすごく大事な仕事なんだ、っていうのがわかって、そのうち自分に向いている、やっていきたいと思うようになったんですね。そういう自分が意識していない、予想していないことを言われた時に適応していくということも肌で経験して、さらに自分の道が開けていくということがわかったのです。

この会社にしか行きたくなかった、この仕事しかしたくない、ということではなく、チャレンジすることで新しい自分を発見するチャンスになる、というふうにとらえると良いですね、チャレンジすることは自分にいい経験、その一つにインターンシップをやられるといい、と僕は思います。

飯塚：はい、ありがとうございます。井上さんいかがでしょうか？

井上：ちょっと、同じように難しい質問なのかなと思いましたけれども。

うちのほうで採用に関していろいろ学生さんと話しをして、よく考えることですが、企業としてはヒト・モノ・カネ・情報とよく言われることなんですけれども、やはり最近としては、知恵ですね。ヒトだったりモノだったりをいかに使っていくか。そういった知恵がうちの職員も各個々にそれぞれ考えていかなければならないとですね、これからの経営は難しいと。

学生さんも非常に個々の能力というのは、非常に優秀だと思っています。知識をひとつ教えるにしても、簡単に覚えてこなす。その先をですね、いかに応用していくか、いわゆるそこに知恵が。その知恵というのも、通り一遍の知恵ではなくて、そのヒトが持っている個性の知恵、そういったものがないとですね、なかなか応用ができないというものがあります。

これらのキーワードとして知恵というものも取り入れて教育をつませるか。そういったことも考えています。高校や大学はいろんな授業をされているとは思いますが、よくうちなんかで新人研修でまずやるのはビジネスマナー。その中でも接客のスキルとか、電話の応対、それは必ず研修でやりますが、たとえば常識というものがありますよね。小学生が、たとえば道路を歩くときにはどっち側を歩くのか。右じゃなくて左側を歩くのが常識ですよ。じゃあなんで左側を歩くの？っていうことをですね、小学生の方は当然やりとりをします。うちの研修なんかでもやはりそういったところからもやらなければいけないということも考えております。

ゴミが落ちていたらゴミを拾うとか、そういった道徳的なところも勉強して、知恵を積むというのを考えております。先程、松久さんの話しにもありましたとおり、自分がこの先、経験していくためには、そういったものを自らがどんどん学んでいかなければいけないと。これはちょっと自分の感想もふまえての話しとさせていただきます。

飯塚: はい。ありがとうございました。今日みなさまからの話しを伺いまして、自分からどんどん求めていく力、いろいろなものを求めていく姿勢、というものがどれだけやはり大切で、キャリアを考えていくうえで基盤になる、ということを私はとても強く感じましたし、みなさんご理解いただけたのではと思います。いま非常に経済、それから私達短大にいる人間としては雇用の厳しさというのは、大変つらい面ではありますが、そういう面ではキャリアとか学生に考えさせる、自分が何をしていくべきか、チャレンジするとか、そういうことを考えさせる点では、厳しさというのは追い風ともとらえてもいいのかあと感じました。

はい。もっともっとお話しをお伺いしたいんですけども時間になってしまいましたので、今日5名のみなさまにご出席いただいて、たいへん有意義なお話しを聞かせていただきました。ありがとうございました。会場の皆様からぜひ感謝の拍手をお願いしたいと思います。

それでは冒頭に申し上げましたとおり、今回このフォーラムに先立ちまして企業のみなさまにアンケートをお願いいたしまして、その結果を情報メディア学科の小棹教授、ご報告お願いいたします。

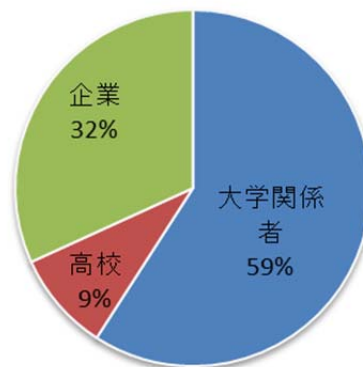
(シンポジウム 完)

[フォーラム出席者のアンケート集計結果]

Q1 参加者属性

学生以外のアンケートへの回答は21通であった。回答者の所属内訳をグラフに示す。

参加者内訳



Q2 フリーコメント：興味を持った理由など

- 「キャリア教育」「教養」といったことについて、大学、文科省、企業がどのように考えているのかを知る良い機会。
- 二年という短期間で、効果的な教養教育をどのように実施したらよいか。（特に専門職養成課程において）
- 本学におけるキャリア教育推進、改善のための情報収集となるため。
- 今月、カリキュラム編成上でも取組が必須となっている「キャリア教育」についての動向や取組の現状について学びたいと考えました。
- 大学進学率等改めて現状の説明を聞き、認識を新たに出来たと思います。
- アクティブラーニングについての着眼が参考になったと考えます。
- 全体的に大変勉強させていただきました。特に、基調講演2のフィールドワーク（アクティブラーニング）調査の報告、湘北短大のキャリア教育については本務校においても参考になる点（取組）が多く勉強になりました。
- キャリア教育（特にインターンシップ）の他校事例を知りたかったので。
- アクティブラーニングをどのように導入していけばよいか参考にしたいと参加させていただきました。
- 所属機関で現在、教養教育とキャリア教育の問題が検討されており、現実的な問題として聞くことが出来た。
- 産能大のキャリアフォーラム、神奈川大のフォーラム等に参加し、各大学、短大のキャリア教育の進行が著しく、比較してみたいと思った。
- 今日キャリア教育の重要性が論ぜられるなか教育内容においてもリーダー的存在である貴学のとり組を学びたいと思い参加させていただきました。
- 勤務校でもキャリア教育の本格的導入を検討しているから。キャリア教育を自身の研究テーマとしているから。
- 第3者である人の評価を知りたかった。貴学の取組みに興味があったから。
- 御校からのインターンシップの受け入れを行っているの。
- インターンの受け入れの参考になった。どうしても守りのインターンになってしまっていたが、学生さんに挑戦させてみる必要があると実感致しました。
- 短大教育への関心。「教育力」ということば。
- 4年生大学と短期大学の違いに興味があったため
- 湘北短大の教育について関心があったため

Q3 キャリア教育についての意見

- 就職後も3年先はわからない時代に、学生が自分で自分の将来像を描くことは難しい。それを大学がカリキュラムとしてどのようなものを〇〇（解説不可）できるかも難しい。
- 世界的な金融危機により、金融恐慌からいずれは産業恐慌となり、失業等の増加、物価高により生活恐慌となって大きな混乱が予測されます。ここは既存の産業社会への人材供給だけでなく戦略的低エネルギーと持続可能な社会を目指した新しい産業の構築のグランドデザインと共にそのための人材育成を教育機関として考える時期にあるのではないのでしょうか？
- キャリア教育の一貫として、インターンシップを活用していくことについての有効性が、貴学卒業生のお話から感じる事ができた。
- 短大2年間の中で、教養教育、社会人基礎力、専門教育、キャリア教育等を全て実施することは非常に困難であると感じています。ただ、カリキュラムの工夫や組み合わせにより、それらを複合的に養成していくことも可能なのではないかと感じました。大変参考になるフォーラムでした。ありがとうございました。
- わが国の産業の発展段階を考えると、高度な産業人を育成することが大切と思われれます。小手先の就活指導ではなく、真に職業生活の準備となる教育が求められていると思います。
- キャリア教育について最近、小学生の時から必要といわれるようになってきているが、まだまだ偏差値教育の方に保護者が傾いているように思います。社会全体でキャリア教育の大切さを啓発していく必要があると日頃から思っています。
- 必要性は十分に理解できるが、大学という組織の中で、従来の教育とも就業支援とも異なる人間形成教育として現実的に実施しようとする場合、その方法、実施上の問題の難しさを感じた。
- 本フォーラムの友野氏の発言にあった、未来志向間だけではなく、今ある現実、足場を固めることの重要性をもっと広めてほしい。
- 「大学は就職予備校ではない」という意見も理解できますが、現実問題としてキャリア教育は学校教育の内部に市民権を得ています。そこには採用試験のためのツールとしてではなく、もっと大きく人間教育の基礎に根づいたシステムであるべきだと思います。
- キャリア教育が単なる就業支援ではなく、生涯キャリアを見通した長期的なキャリア形成支援となる必要性を感じている。
- 出身学部が文学部であったため、大学は「時間」と「場所」の提供する機関で、「何をどう学ぶか」は学生本人の取り組み方、学ぶテーマの理解の仕方に大きく依存するものとの認識をしていました。が、現在の大学教育は大きく変わっているのかな？と思いました。
- 時代の変化に対応した実学教育が必要と思われる。インターンシップの取組みが多目的に実施される点、企業と大学のそれぞれの考え方を知ることができた。(シンポジウム) キャリア教育は学生自身の「自分」を知ることではないかと思えます。
- 私は小学生を相手に中学入試対策のアルバイトをしているのですが、彼らにも求められる能力は私の頃とは変わってきているなど感じています。生きる力ですとか、リーダーになれる素質のようなものを適性検査としてみられる公立中高一貫校が増えてきましたが、大学の方の試験形態が従来のままでは根本的には変り切れないような気がします。今は過渡期だと思います。
- 大学は、ただ教育指導をするだけではなく、日本において重要とされる人材育成という面もあり、キャリア教育は必要とする内容である。

Q4 その他ご意見

- いつも貴大学の先進的取組み事例で学ばせていただいております。心より感謝申し上げます。
- インターンシップについて大変長期間のプログラムを実施している点に興味を持ちました。マクロの経済環境ですが、ミクロのこうしたIT教育が学生の就職問題を切り開くと思います。インターンシップのアンケート分析に興味を持ちました。
- 基調講演2との関係で、湘北短大におけるアクティブラーニング（インターンシップを活用した取組でもよいのですが）についての取組をうかがいたかったです。また、今回はインターンシップ関連のシンポジウムでしたが、湘北短大の教育内容（インターンシップ前後の教育を含めて）と現在の仕事との関連性（教育の有効性）等について言及していただけると、より湘北短大のキャリア教育について理解できたのではないかと思います。
- 大変参考になりました。ありがとうございました。
- いつも先進的な取組みを勉強させていただいています。ありがとうございます。
- インターンシップを活かして社会で活躍されている卒業生の姿が立派でした。
- 卒業生の話がとても良かった。
- 今回のシンポジウムで4～5週間のインターンシップがあること、自分の求める業種にインターンシップ先を自ら開拓する学生がいること。初めて知ったことなので驚くとともにその積極的な姿勢に感銘を受けました。すばらしいと思います。
- テーマ毎の参加スタイルになるとより良いかと思います。
- 大変勉強になりました。湘北短大の教育への取組みが強く感じられました。
- 塾のアルバイトでは小～高校先まで教える機会があり、またここ湘北においてはTAとして短大生と接しています。私自身も来年4月に就職を控えている身であり、「キャリア」というものについて色々と考えさせられました。残りの半年でどういった教育ができるのか、今日聞いた話を役立てていきたいです。
- 湘北短期大学の教育において専門性を高めるだけではなく人生観や礼儀も指導されており、学生のほとんどが社会へ出てもすぐに適応されると考えます。

以上

4.2 e-ラーニング検討ワーキンググループ活動

入学前教育に一部 e-ラーニングを導入する可能性を全学的に検討するために、平成 22 年度よりワーキンググループ（WG）を設立し、活動を行ってきた。22 年度に 2 回ミーティングを開催している。23 年度は、22 年度の結果を受け、本格導入に向け活動を行った。初期の活動趣旨とメンバー、23 年度のスケジュールを以下に示す。

活動趣旨

多くの大学で入学前教育の拡大/効率化の一助として e-ラーニングの導入が進んでいる。本学でも、22 年度以降の規模拡大に伴い、下記課題を検討する時期に来ている。

- ① 繰り返し学習による学力向上の方法の検討
- ② 遠隔地の学生への対処
- ③ 400 人超の規模に対応する教員の確保
- ④ 高大連携高校出身者への差別化（優遇措置）

そこで、e-ラーニングが上記課題の対応に適するかどうかを検討する。そのために下記を実施するワーキンググループを設立する。

- (1) e-ラーニング先進事例の調査
- (2) e-ラーニングの導入—方式とコンテンツの検討

メンバー

各学科より教員 1 名以上（E 内海、小棹；C 田口；L 岩崎；P 野口）

ICT センターより 1 名（岡原）、教務部より 1 名（山崎）、図書館より 1 名（高橋）

その他 LA GP 派遣スタッフ 赤羽

23 年度活動スケジュール

- ・4 月～7 月 第 3 回、第 4 回ミーティング開催
方式、コンテンツ、システム構築業者の検討、決定

- ・9 月～2012 年 2 月 第 5 回、第 6 回ミーティング開催
導入スケジュールの確認
システムテスト、運営の確認
マニュアル作成
コミュニケーションリテラシー受講生の実施

4.2.1 第3回 e-ラーニング検討ワーキンググループ ミーティング議事録

日 時：平成23年5月10日（火）13:30-14:30

場 所：湘北短期大学 1号館 小会議室

参加者（敬称略）：岩崎、内海、岡原、高橋、田口、山崎、小棹（授業の為欠席：野口、佐藤（知））

配布資料：

- ① 第2回 MTG 議事録
- ② 入学前 e-ラーニング実施結果（小棹）【参考資料に掲載】
回覧資料：入学前 Web 課題の内容と解答
- ③ PowerPoint スライド：e-ラーニングシステム Moodle の紹介（岡原）

議題：

第2回 MTG 議事録に関して

検討課題1 「コミュニケーションリテラシー」A、B 日程受講生（高大連携校出身者）に対し課題を e-ラーニングで、C、D 日程受講生に対し同一内容を印刷物で与えて比較することに関して
—C、D 日程が東日本大震災で休講になったため、実施不能となった旨報告があった。

検討課題2 「中村学園大学短期大学部との協働提案」に関して

—先方の組織体制、システム完成度、ともに時期尚早との回答があり、今年度実施困難と報告があった。

入学前 e-ラーニングの実施報告

配布資料②、回覧資料に基づき、説明があった。

受講期間：3月15日~4月20日

問題数：言語42問、暮らし44問、数学42問

受講登録者数197名のうち、85.3%がアクセスし、一人当たりの平均アクセス数は11回であった。

学科別では情報、保育のアクセス率（登録者のうち e-ラーニング受講者）が93%と高く、とくに保育学科では、平均アクセス回数は13回に達した。また、1か月の間、まんべんなくアクセスされていたこともわかった。

質疑・応答

- (1) 携帯・スマホでアクセス可能か？ 今回は PC からのみ。受講生から質問もあったので、今後検討する。
- (2) 内容や操作方法に関する質問は？ 携帯でのアクセスができない、との問い合わせが1件。操作方法に関してはなし。
- (3) PC/Internet 環境のない学生は？ 4月入学後、15日間に短大の PC 環境で実施するよう伝えた。
- (4) 学生の満足度や、取組時間、難易度は？ 当初効果を客観的に評価できるものとしていたので、アンケートを用意していなかった。5月20日までにアンケートを用意するので、各学科の WG メンバーの協力を得て、アンケート調査を実施したい。

今後の方向

85%が自主的に Web 課題に取り組んでおり、効果が期待できる。今年度(24年4月入学生対象)も e-ラーニングを実施することを決定した。

検討事項

(1)インフラ (いれもの) をどうするか

Moodle を利用する

- ・ ID を別に作ることが可能
- ・ 映像、音声、画像、数式を入れることが可能
- ・ 解答をつけることが可能
- ・ 学習管理が可能 (解答時間や進捗状況の管理)

(2)コンテンツをどうするか

役割、学習基本方針を決定して、計画的に実施することが必要 (参考 : PowerPoint スライド)

- ・ 役割 : ディレクター、学習シナリオ・教材ポリシー設計者、教材作成者、画像政策担当者、教材テスター、マニュアル制作者、教科サポート担当者 (内容)、システムサポート担当者 (システム管理者)
- ・ 作成手順 : 学習シナリオ・コンテンツポリシーの決定
- ・ その他 : 教材支援ソフトもある (SATT/SmartForce、KiBAN/PPT2FLASH)

次回 MTG までの実施・検討事項

- ・ 学科ごとに e-ラーニング受講生へのアンケートの実施 (5月20日までにアンケート作成)
- ・ 役割と学習基本方針の策定

次回開催予定 : 2011 年 7 月頃

以上

4.2.2 第 4 回 e-ラーニング検討ワーキンググループ ミーティング議事録

日 時 : 平成 23 年 7 月 28 日 (木) 11:00~12:00

場 所 : 湘北短期大学 1 号館 小会議室

参加者 (敬称略) : 岩崎、内海、岡原、高橋、田口、山崎、小棹 (欠席 : 野口、佐藤 (知))

書記 : 赤羽

配布資料 :

- ① 第 3 回 MTG 議事録
- ② 2011 年 3~4 月実施 Web 課題アンケート実施結果 (各学科教員へ別途配付) 【参考資料に掲載】
- ③ Power Point スライド : e-ラーニングシステム導入について

議題 :

Web 課題アンケート実施結果について

配布資料②、回覧資料に基づき、説明があった。

- ・アンケート対象者数 196 名に対し 97%という高い回答率だった。先生方のご協力によるものである。

・生活プロデュース学科の学生の課題への意欲の低さが見られる。入学時のデータなので今後の授業の参考にしたい。

・学生のコンピューターやインターネットに対する認識が未だ低いと思われるが、今後はより一層慣らされてくるだろう。（適性検査の結果はいいのだが。）

・今後のテスト問題作成の参考にしたい。

今後の入学前教育の e-ラーニングの具体的な導入策について

配布資料③、スライドに基づき、進行。

検討課題 e-ラーニングのコンテンツをどうするか

- (1) 役割：教材（画像）制作を、慶情報センター、または新規事業者にするか、早急に決定。
- (2) 学習シナリオ：
 - ・全問回答を目指す
 - ・実施時期を入学前1ヶ月間とし、入学後2年間も使用できるシステムの準備が必要だが、入学後の実施については要検討。
 - ・4月以降に実施する場合は、データを学生カルテなどに残し、実施担当者が引き継ぐ。
- (3) 教材作成の流れ：
 - ・「言葉」「暮らし」「数字」を柱に作成。
 - ・選択式にする。
 - ・時間制限はなし。再受講は有。
 - ・正解、不正解についての解説が必要。（データ量の問題がある）

*試験を受けさせることが目的ではなく、楽しみながら知識を増やすことが目的。
- (4) 業者：
 - 慶情報センター：コンテンツのみ
 - 廣済堂：Moodle制作。コンテンツそのものを持っていない。（使いやすい画面設計、更新性、モチベーションアップ）
 - エレファンキューブ：売り上げの75%をコンテンツ制作会社へキックバックする仕組み。就職トレーニングなどの教材も有り。（実績650件/3年）
 - ヒューマンサイエンス：e-ラーニング以外のDTP関係も扱っている。（実績907本/10年）Moodleのカスタマイズなどのほか、コンテンツ作成も有り。価格帯もさほど高くない。放送大学（受講生22万人）もクライアント。

*業者は、将来性と価格面を考えて決定したい（他の業者も検討したいが、日程に余裕がない）。

*12月にシステムテストを学生に行ってもらおう。

*高校教員・本学教職員も実施する方向で検討する

次回 MTG までの実施・検討事項

- ・業者などの決定事項をメールにて連絡。

次回 MTG 開催予定：2011年11月頃

以上

4.2.3 第5回 e-ラーニング検討ワーキンググループ ミーティング議事録

日 時：平成23年11月10日（木）11:00~12:00

場 所：湘北短期大学 1号館 小会議室

参加者（敬称略）：岩崎、内海、岡原、高橋、田口、野口、山崎、小棹（欠席：佐藤（知））

書記：赤羽

配布資料：

- ① 第4回 MTG 議事録
- ② 第5回 MTG 資料（パワーポイント）【参考資料に掲載】
- ③ e-ラーニング画面イメージ（4枚アップ）

議題：

業者選定の過程の報告

- ・ 3候補（「慶情報センター」、「エレファンキューブ」、「ヒューマンサイエンス」）に対し1～2度ヒアリングを実施、価格、コンテンツ、実績、技術などを勘案して選定（小棹、内海、岡原）。
- ・ 「慶情報」（価格×）、「エレファンキューブ」はカリスマ講師の登用で面白い提案だが、一般的な内容の方が良いという判断、また放送大学での実績などを評価して、「ヒューマンサイエンス」に決定した。
- ・ 「Web教材」契約締結、発注済み（GP予算充当、1,575千円）
- ・ 日程調整や打ち合わせにおいてプロの仕事をしていただいたICTセンターの力が大きい。

今後のe-ラーニングの導入スケジュールと内容

(1)スケジュール：

- ④ 11月~1月末 問題修正
- ⑤ 1月末：納入、動作テスト（小棹担当）、操作説明会開催（検収は1週間）
- ⑥ 2月初：学内周知
 - * 高校教員・本学教職員も実施する方向で準備する
 - * 高大連携高校に対しては、3月の高大連絡協議会でWeb教材の案内を行い、体験用IDを配布。
- ⑦ 2月末~4月：コミュニティ受講者
 - * 教材サポート担当—小棹、システムサポート担当—岡原

(2)内容の説明：

・ Web教材は「ことば」「数字」「暮らし」の3分野、各30問ずつで構成。「ことば」、「数字」はSPIの問題分類から本学の学生に合わせて取捨選択している。「暮らし」は一般常識（政治・法律、経済・社会、国際問題、地理・歴史・文学、理科、生活）。スポーツ・芸能も追加してもらっている。時事問題等、年々内容更新が必要。

・ 今年度はGP予算での導入のため、「コミュニティ」受講者が主体となるが、全学年のキャリア教育科目で利用可能。一分野の問題を解いて、解説を読むと90分程度であるので、3コマ分に充当可能。

質疑応答

Q：制限時間はどのくらい？

回答しながら全体像はリアルタイムで把握できるのか？

達成感が必要では？

A：制限時間は設けていない。途中で放棄すると、得点が出ない。ランダム出題になっている。

Q：昨年、締め切りギリギリに図書館 I T コンシェルジュに生徒からの質問があった。ログイン方法、携帯からできない、など、授業でその旨を伝えてほしい。「コミュニテ」受講後に期間が開くので忘れてしまう。

A：携帯から受講不能であることは授業では伝えて、プリントも配布していたのだが。今年度はむしろ、マニュアル等を整備し、図書館、ICT センターなど、サポート体制の充実を図りたい。

Q：次年度以降必要となる予算は？

A：作問だけだと 100 万円弱。

Q：担当部署がどこになるのかを理事会等でご審議いただきたい。「コミュニテ」だけにとどめずにキャリア教育のツールとして利用してもらいたい。たとえば、「キャリアベーシックス(非言語)」の今年度授業では、反復学習の部分の比率を低くして、レポートや説明文を書く練習へとシフトしている。次年度以降、この Web 教材を活用したい。

次回 MTG までの実施・検討事項

- ・ マニュアルの作成、マニュアルの配布範囲、問い合わせ窓口の決定
- ・ 次年度（H24 年）以降の管理体制の検討
- ・ アドホック WG をどう発展させるか（委員会？）

次回 MTG 開催予定：2012 年 2 月初

以上

4.2.4 第 6 回 e-ラーニング検討ワーキンググループ ミーティング議事録

日 時：平成 24 年 1 月 26 日（木）15:00~15:45

場 所：湘北短期大学 1 号館 小会議室

参加者（敬称略）：岩崎、内海、岡原、高橋、田口、山崎、小棹（欠席：野口、佐藤（知））

配布資料：

- ① 第 5 回 MTG 議事録
- ② e-ラーニング・マニュアル(Ver.1)【参考資料に掲載】

議 事：

e-ラーニングコンテンツ作成進捗状況の報告

(1)スケジュール通りに進行

- ・ 12 月 9 日 「暮らし」コンテンツの確認と修正済み
- ・ 12 月末 「数字」「言葉」コンテンツの確認と修正済み
- ・ 1 月 13 日 e-ラーニングコンテンツを Moodle に導入
- ・ 1 月 14 日 実操作して動作を確認

- 学習履歴抽出プログラムの不具合 → 解決済み
- FireFox ブラウザリサイズに伴う不具合 → InternetExplorer に限定することで解決
- 時間制限の変更（「数字」を 30 分から 60 分に）、など
- ・ 1 月 26 日 e-ラーニング・マニュアル（Ver.1）
 - 動作環境の指定、問い合わせ先を追加する
- ・ 1 月 31 日に納入完了

(2)学内での運用テスト

WG メンバーで実施（1 月 27 日～2 月初）

② コミュリテ受講生のサポート（問合せ先）

問合せ対応は、岡原（E-mail）と IT コンシェルジュ（対面）。マニュアルを準備する。

③ e-ラーニングシステムの周知

- 教授会（2/6）：全学にマニュアル配布と FSD 研修での実施をアナウンス
- 高大連携高校：3 月 19 日高大連絡協議会で Web 教材の案内を行い、体験用 ID を配布。
- 学科：情メはキャリアベーシックスやプレゼミで活用

④ 次年度（H24 年）以降の管理体制

ICT：システムの管理を行う

LA：授業等で活用する（コミュニケーションリテラシー）

⑤ 質疑応答

- ・ 中断して内容を保存し、後ほど解答を続けることはできるか？

30 問のランダム出題なので、最初から始めることになる。学習履歴は残る。

- ・ 次年度以降の管理体制に関して

コンテンツに関する議論を行う場がない。全学的に利用できるシステムができたので、活用するためには、FSD 委員会のような、全学的な組織が必要。

内海 ICT センター長、岩崎 LA センター長が理事会で委員会の提案を行う。

次回最終 MTG での報告・検討事項

- ・ コミュリテでの実施状況報告
- ・ 高大連携協議会での報告に対する反応
- ・ e-ラーニングシステムの学内周知方法の検討
- ・ コンテンツ拡充の方法の検討

次回 MTG 開催予定：2012 年 3 月末

以上（文責小棹）

(1) Web 課題実施状況報告

22 年度に試験的に導入した市販の Web 課題の実施結果は下記の通りであった。

1. 期 間：平成 23 年 3 月 15 日～4 月 15 日（4 月 20 日 9 時まで集計）
2. 内 容：慶情報センター（KIT 能力開発研究所）
「入学前教育プログラム Web ラーニング」（言語 42 問、暮らし 44 問、数学 42 問）
3. 対 象：「コミュニケーションリテラシー」受講生（A、B 日程 計 197 名）
4. 結 果：

受講状況： 学科別受講状況を下記に示す。

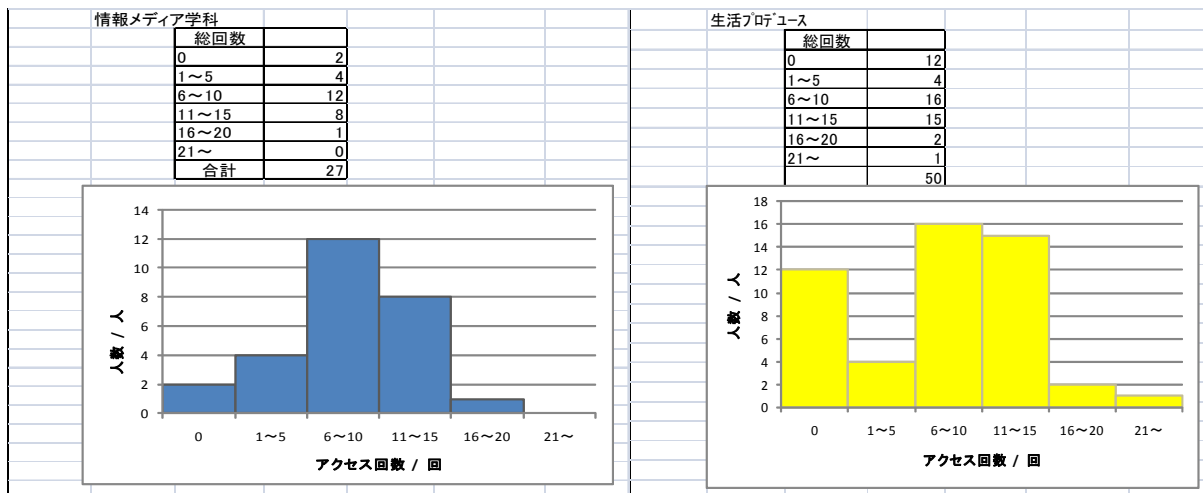
表 1 学科別 Web ラーニングアクセス状況

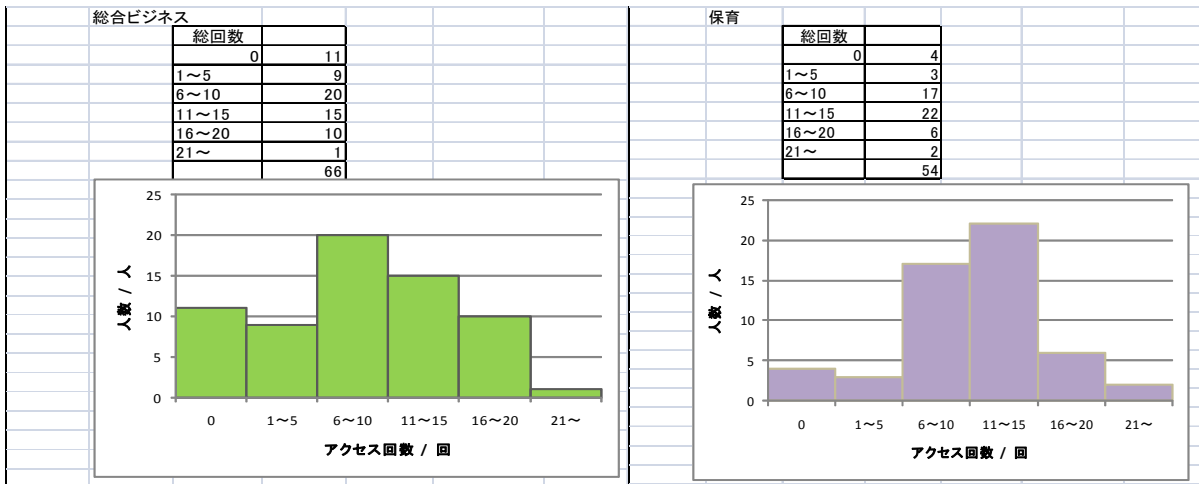
	登録受講生数	アクセス率	総アクセス数	平均アクセス数
情報メディア	27	92.6%	234	9.36
生活プロデュース	50	76.0%	396	10.42
総合ビジネス	66	83.3%	575	10.45
保育	54	92.6%	614	12.28
合計	197	85.3%	1819	10.83

$$\text{アクセス率} = \frac{\text{総アクセス人数}}{\text{登録受講生数}}$$

アクセス率（受講生のうち、e-ラーニングを実施した割合）は情報メディア、保育で高く、生活プロデュースで約 3/4 であった。一人当たりのアクセス回数は、保育、総合ビジネス、生活プロデュース、情報メディアの順に高かった。

受講回数分布：学科別の受講回数分布を下記に示す。





アクセス時期：アクセス時期についても統計をとった。

3月15日～3月31日

920 アクセス

4月1日～4月20日

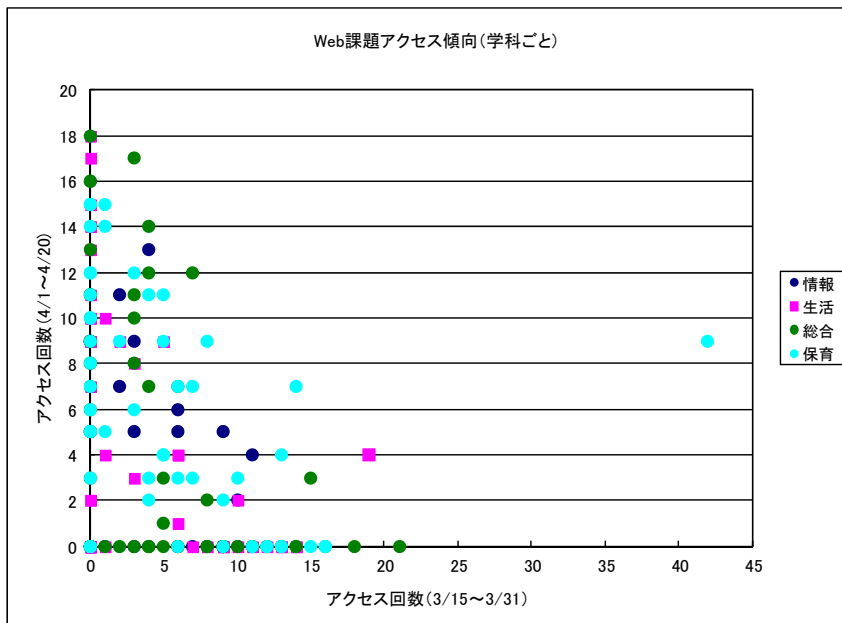
899 アクセス

総 アクセス

1819 アクセス

時期に関係なくアクセスされていることがわかる。ただし、締め切り(4月15日)以降にも37件のアクセスがあった。

以上



(2) 第5回 MTG 資料-eラーニングコンテンツ作成業者選定の経緯と内容

<p>E-learning MTG 資料 2011年11月10日(水) 13:00-13:30 小金 麗彦</p>	<p>1. 議題</p> <ul style="list-style-type: none"> 報告事項 <ul style="list-style-type: none"> E-learning コンテンツ作成業者の選定 E-learning コンテンツ導入スケジュール 審議事項 <ul style="list-style-type: none"> E-learning コンテンツの内容 受講生の確保 今後のスケジュール (24年度への管理体制) 	<p>E-learning コンテンツ業者の選定</p> <ul style="list-style-type: none"> 提携センター：コンテンツのみ 講師等 Model校内、コンテンツの活用(期待して欲しい)、(強い) 学びの場(校内、校外、モバイルコンテンツ) エリアキープ 約15%の7.5%をコンテンツ制作会社へバックパックス 2011年 個別E-learningなどの教材も有り、(2011年6月30日) ヒューマンサイエンス E-learning以外の区(専攻)も有り、(2011年10月30日) Model校の2/3がモバイルなどの教材、コンテンツ制作も有り、 契約が不明 2011年(受講生22万人) モバイルアカウント、 																				
<p>業者ヒアリング</p> <ul style="list-style-type: none"> 提携センター (小・中・内務) エリアキープ (内務・風原・小・中) ヒューマンサイエンス (小・中・内務・風原) 決定連絡 9月21日 発注 10月22日 	<p>比較</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>業者</th> <th>価格 (円)</th> <th>7割</th> <th>8割</th> <th>7-8割</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>K</td> <td>115,000</td> <td>○</td> <td>○</td> <td>People 等作成</td> </tr> <tr> <td>HS</td> <td>118,000</td> <td>○</td> <td>○</td> <td>別途7割</td> </tr> <tr> <td>EC</td> <td>11,500</td> <td>○</td> <td>○</td> <td>11,500 1割</td> </tr> </tbody> </table> <p>K: 提携センター HS: ヒューマンサイエンス 01,575円 EC: エリアキープ</p>	業者	価格 (円)	7割	8割	7-8割	K	115,000	○	○	People 等作成	HS	118,000	○	○	別途7割	EC	11,500	○	○	11,500 1割	<p>導入スケジュール</p> <ol style="list-style-type: none"> 10月中旬 前段階確認 10月末 画面設計確認 11月10日 E-learning MTG 11月末~12月中旬 前段階修正 <p>段階的な修正依頼 (9割)</p> <p>2012年</p> <ol style="list-style-type: none"> 1月中旬 実導入 1月末 操作説明 2月~ コミュニティ受講生利用
業者	価格 (円)	7割	8割	7-8割																		
K	115,000	○	○	People 等作成																		
HS	118,000	○	○	別途7割																		
EC	11,500	○	○	11,500 1割																		
<p>内容-SPIバース「Web教材」 (数字・ことば・暮らし)</p> <ul style="list-style-type: none"> 非言語 (30問) 得意算 料金の割引 分母払い 代金の精算 差立・算額・時差 (旅人算) 推計表 (集合) 推論 (40問) 推論 (順位づけ) <ul style="list-style-type: none"> 組み合わせ (場合の数) 確率 グラフの領域 不等号と領域 割合 数列 	<p>内容-SPIバース「Web教材」 (数字・ことば・暮らし)</p> <ul style="list-style-type: none"> 二語関係 10問 熟語 10問 語句の用法 8問 文章の並び替え 2問 	<p>内容-SPIバース「Web教材」 (数字・ことば・暮らし)</p> <ul style="list-style-type: none"> 非言語 (30問) 得意算 料金の割引 分母払い 代金の精算 差立・算額・時差 (旅人算) 推計表 (集合) 推論 (40問) 推論 (順位づけ) <ul style="list-style-type: none"> 組み合わせ (場合の数) 確率 グラフの領域 不等号と領域 割合 数列 																				

(3) Web 受講生アンケート結果

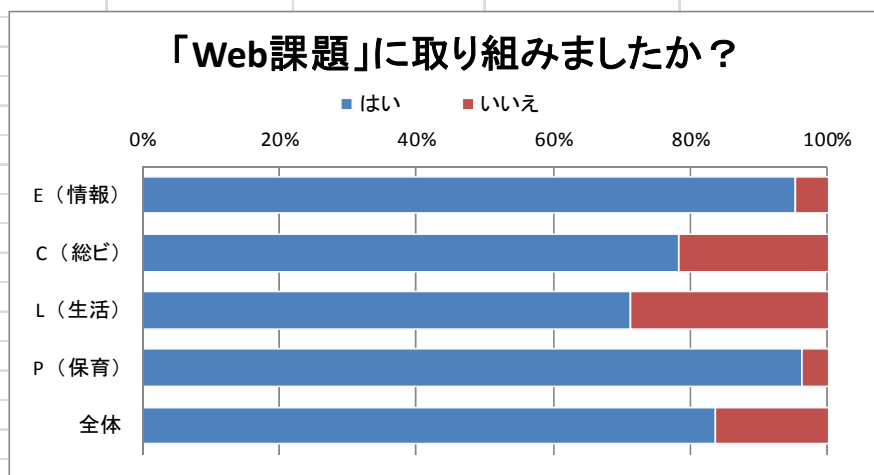
下記に、Web 課題受講生に対し、5-6 月中にアンケートを実施した。内容は、アクセス状況、各分野の受講状況、難易度、興味の有無、有用性を感じたかどうか、などである。

2011年3-4月実施 Web課題アンケート結果

1. 基本情報	E(情報)	C(総ビ)	L(生活)	P(保育)	全体
アンケート対象者数	26	66	50	54	196
↑回答者数	22	65	49	54	190
回答率	85%	98%	98%	100%	97%

2. 今年3月15日～4月15日間に指定した「Web 課題」に取り組みましたか？

	E(情報)	C(総ビ)	L(生活)	P(保育)	全体
はい	21	51	35	52	159
いいえ	1	14	14	2	31
合計	22	65	49	54	190

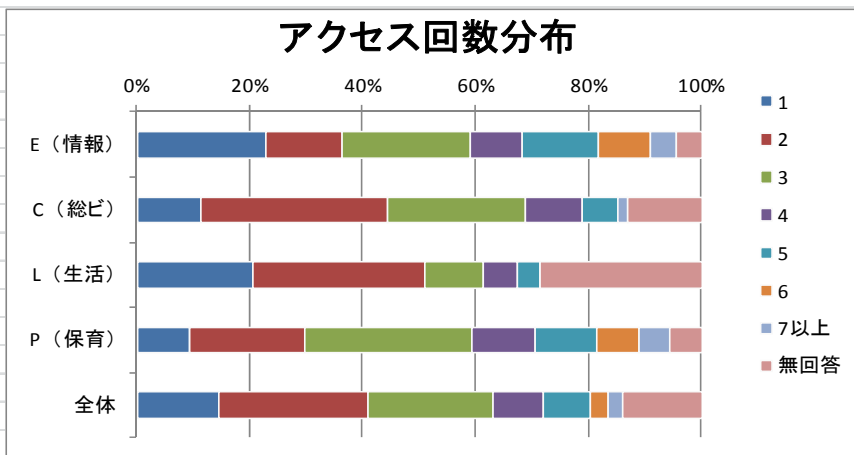


3. 「Web 課題」を実施しなかったのはなぜですか？

理由	E(情報)	C(総ビ)	L(生活)	P(保育)	全体
忘れていた	0	7	3	1	11
サイトやパスワードがわからなくなった	0	1	1	0	2
時間がなかった	0	4	3	1	8
PCやインターネットが使いえなかった	1	0	4	0	5
意味がないと思った	0	0	0	0	0
成績に関係ないと思った	0	0	0	0	0
その他	0	1	3	0	4
合計	1	13	14	2	30

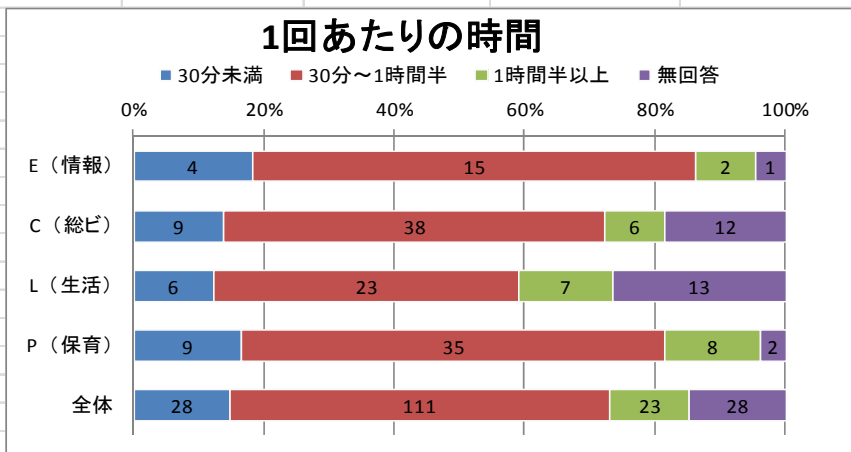
4. (1) 何回ぐらいアクセスしましたか

回数	E(情報)	C(総ビ)	L(生活)	P(保育)	全体
1	5	7	10	5	27
2	3	20	15	11	49
3	5	15	5	16	41
4	2	6	3	6	17
5	3	4	2	6	15
6	2	0	0	4	6
7以上	1	1	0	3	5
無回答	1	8	14	3	26
合計	22	61	49	54	186



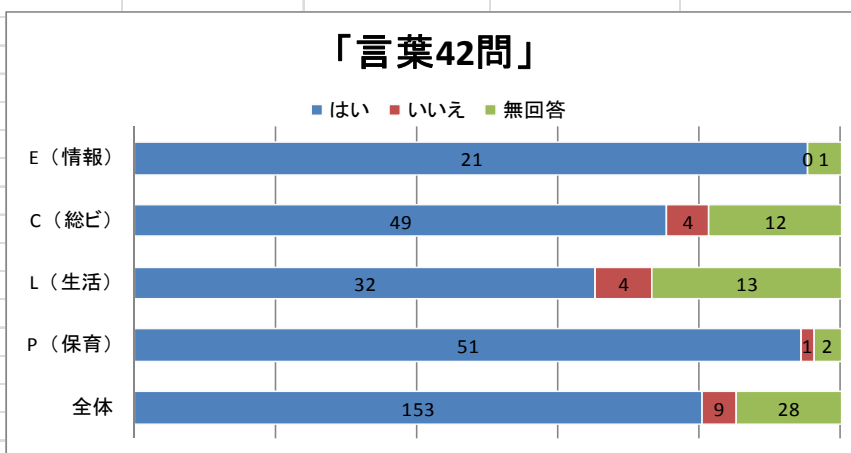
4. (2) 1回あたりの時間は、平均してどれほどですか (該当するものに○)

	E(情報)	C(総ビ)	L(生活)	P(保育)	全体
30分未満	4	9	6	9	28
30分～1時間半	15	38	23	35	111
1時間半以上	2	6	7	8	23
無回答	1	12	13	2	28
計	22	65	49	54	190



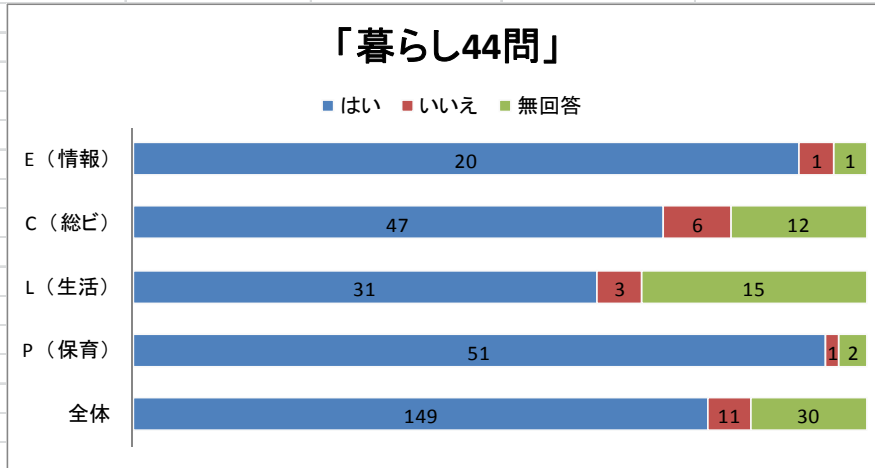
4. (3) 「言葉42問」全部終了しましたか？

	E(情報)	C(総ビ)	L(生活)	P(保育)	全体
はい	21	49	32	51	153
いいえ	0	4	4	1	9
無回答	1	12	13	2	28
合計	22	65	49	54	190



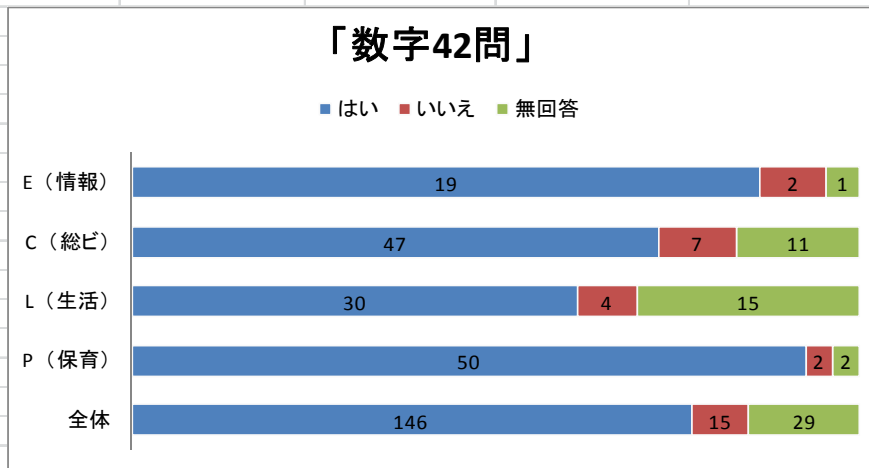
4. (3) 「暮らし44問」全部終了しましたか？

	E(情報)	C(総ビ)	L(生活)	P(保育)	全体
はい	20	47	31	51	149
いいえ	1	6	3	1	11
無回答	1	12	15	2	30
合計	22	65	49	54	190



4. (3) 「数字42問」全部終了しましたか？

	E(情報)	C(総ビ)	L(生活)	P(保育)	全体
はい	19	47	30	50	146
いいえ	2	7	4	2	15
無回答	1	11	15	2	29
合計	22	65	49	54	190

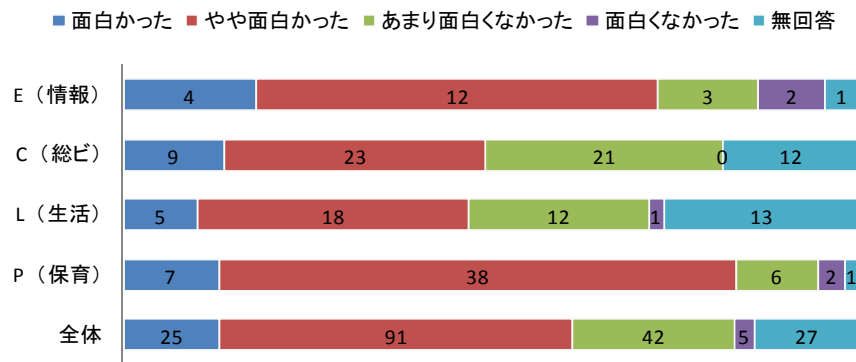


4. (4) この課題は、社会人に必要な常識力を高めることを目的としています。全体的にどのような感想を持ちましたか？

(a) 興味

	E(情報)	C(総ビ)	L(生活)	P(保育)	全体
面白かった	4	9	5	7	25
やや面白かった	12	23	18	38	91
あまり面白くなかった	3	21	12	6	42
面白くなかった	2	0	1	2	5
無回答	1	12	13	1	27
合計	22	65	49	54	190

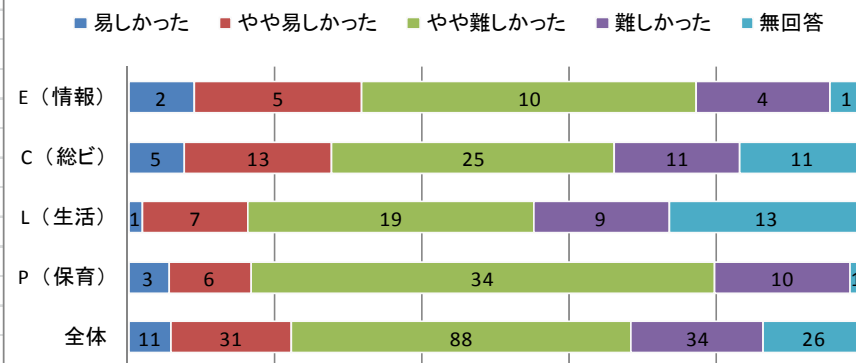
(a) 興味



(b) 難易度

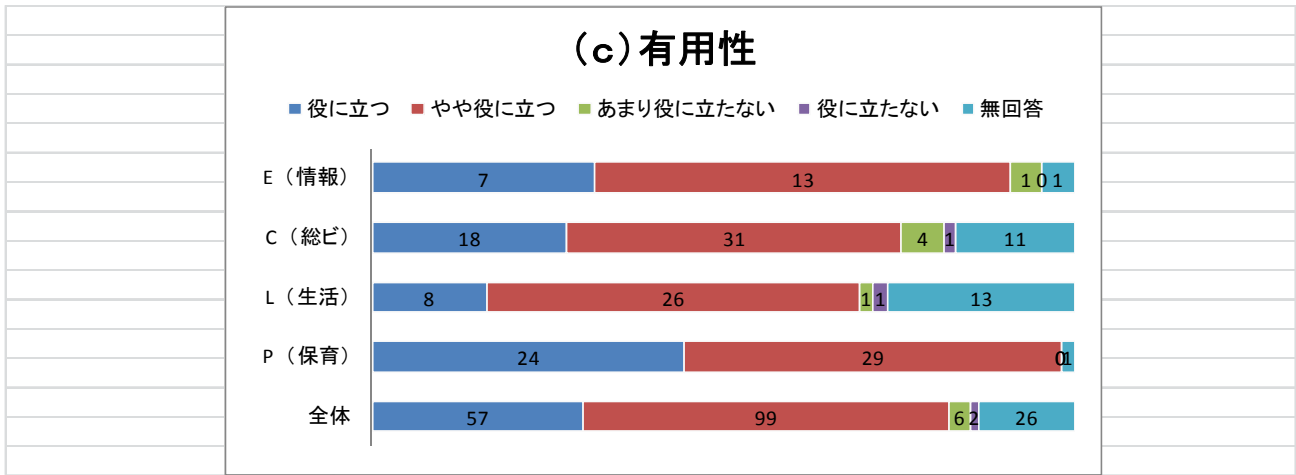
	E(情報)	C(総ビ)	L(生活)	P(保育)	全体
易しかった	2	5	1	3	11
やや易しかった	5	13	7	6	31
やや難しかった	10	25	19	34	88
難しかった	4	11	9	10	34
無回答	1	11	13	1	26
合計	22	65	49	54	190

(b) 難易度



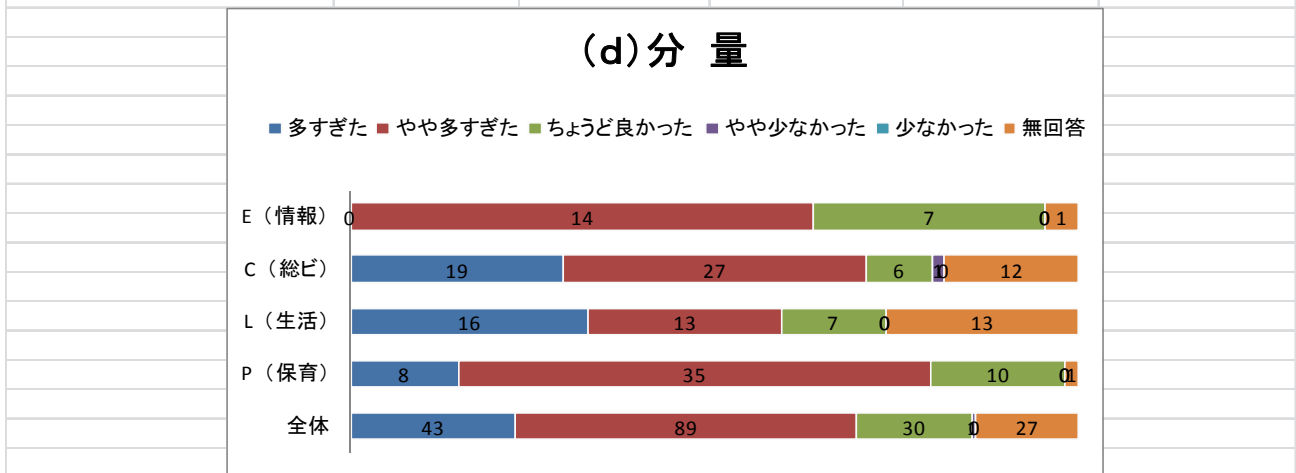
(c) 有用性

	E(情報)	C(総ビ)	L(生活)	P(保育)	全体
役に立つ	7	18	8	24	57
やや役に立つ	13	31	26	29	99
あまり役に立たない	1	4	1	0	6
役に立たない	0	1	1	0	2
無回答	1	11	13	1	26
合計	22	65	49	54	190



(d) 分量

	E(情報)	C(総ビ)	L(生活)	P(保育)	全体
多すぎた	0	19	16	8	43
やや多すぎた	14	27	13	35	89
ちょうど良かった	7	6	7	10	30
やや少なかった	0	1	0	0	1
少なかった	0	0	0	0	0
無回答	1	12	13	1	27
合計	22	65	49	54	190



*上記アンケート結果から、約 85%の学生が Web 課題にアクセスし、各分野にまんべんなく、各回 1 時間程度取り組んでいることがわかった。面白かったと答えた学生は保育、情報メディア学科で 80-90%、全体では 60%程度であるが、有用性に関しては、80%以上が「やや役に立つ～役に立つ」と答えている。分量が多いと感じた学生が 70%を占めており、これからの課題である。

以上

eラーニング@湘北の使い方

2012/2/9

湘北短期大学 リベラルアーツセンター

1. パソコンにログインして、Internet Explorer を起動します。
2. 表示されたホームページ（湘北学友会 Web サイト-Setaria）で「Eラーニングシステム」をクリックします。



3. 「eラーニングシステム ID 通知書」に記載された ID とパスワードでログインします。



4. ページ上部の「★入学事前学習★」をクリックします。



5. 三種類の課題が表示されます。
3つ全てを受講してください。

- ・ ことば（言語系 30 問）
- ・ すうじ（数理系 30 問）
- ・ 暮らし（一般常識系 30 問）

(注意) 各課題は、必ず 30 問目まで解答してください。



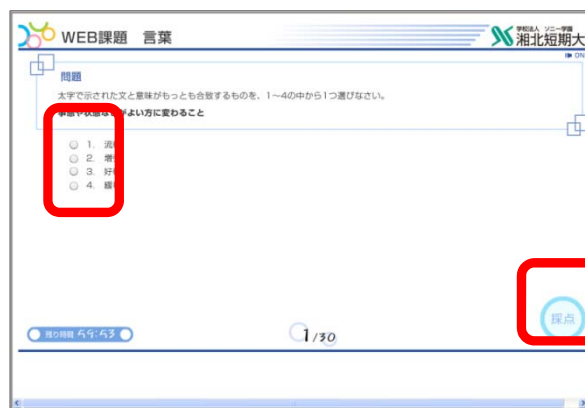
Enter をクリックする。



6. 設問を読み、選択項目横の「○」を選び

「採点」をクリックして下さい。

- ・ 課題は 1 問 1 点です。
- ・ 設問順序はランダムです。
- ・ 何度でも同じ課題を行えます。
- ・ 時間制限があります。



(注意) ブラウザの「戻る」ボタンは押さないで下さい。

7. 答え合わせの結果が表示されます。

- ・ 選択肢の横に と表示されれば正解です。
- ・ [解説] ボタンをクリックすると、各選択肢の解説画面が表示されます。
- ・ [次へ] ボタンをクリックすると、次の問題に移ります。

8. 30 問目に解答し[結果]ボタンをクリックすると、合計点が表示されます。

9. 以上で 1 つの課題を終えます。

状況に応じ、ページ右上のリンクをクリックしてください。

再び同じ課題に取り組む

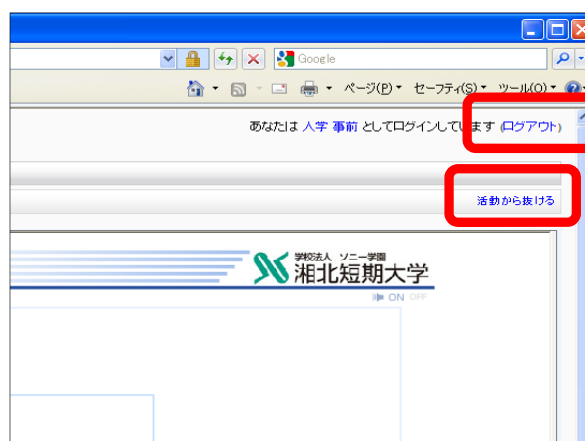
⇒ [活動を抜ける] をクリックし同じ課題を選ぶ。

別の課題に取り組む

⇒ [活動を抜ける] をクリックし別の課題を選ぶ。

課題を一旦終了する

⇒ [ログアウト] をクリックする。



以上

4.3 視察研修・調査研究報告

初年次教育、e-ラーニング、表現教育、社会人基礎力に関してさまざまな形態で広く調査・研究を行うことで、参考となる事例から種々の知見が得られた。この結果を本補助事業の実施に反映してゆくことで、より一層の改善が期待できる。とくに、表現教育において、米国シカゴの Chicago Shakespeare Theater の教育部門が行っている中～高等教育機関向けのワークショップは、たいへん印象深いものであった。一方で、研究会において高大連携やキャリア教育、初年次教育、FD 活動の事例調査と議論により、様々な問題点や改善方法を把握し、今年度のプログラムに活かすことができた。さらに、FD 研修に参加し、あらたな教授法や事例に触れることができ、これらから得られた知見は、効果的な入学時事前授業を展開するためにたいへん有意義であった。

今年度実施した視察研修・調査研究の内容は以下のとおりである。なお、東日本大震災の影響で、予定の変更があった。

(A) 米国表現教育視察研修

2012年2月17日～22日 Illinois州 Chicago Shakespeare Theater の Education Department

(B) 研究会・学会関連

2011年6月4日 大学教育学会 第33回(2011年)大会 桜美林大学(多摩)

小棹理子(情報メディア学科教授)

2011年第6回 神奈川大学高大連携フォーラムー接続教育と「基礎学力」の確保(横浜)

岩崎敏之(生活プロデュース学科 教授 リベラルアーツセンター センター長)

2011年9月3-5日 私情協 短期大学教育改革 ICT 戦略会議(市ヶ谷)

岩崎敏之(生活プロデュース学科 教授 リベラルアーツセンター センター長)

小棹理子(情報メディア学科教授)

2011年11月10日 Future Skills Project 研究会 産学協同就業力育成シンポジウム(九段)

小棹理子(情報メディア学科教授)

2011年11月26-27日 大学教育学会 2011年度 課題研究集会(山形)

岩崎敏之(生活プロデュース学科 教授 リベラルアーツセンター センター長)

小棹理子(情報メディア学科教授)

2011年12月8日 大学 ICT 推進協議会 2011年度年次大会(福岡)

小棹理子(情報メディア学科教授)

2011年12月17日 日本教育工学会 研究会 「地域連携と教育・学習環境／一般」(香川)

小棹理子(情報メディア学科教授)

2012年3月1-2日 私情協 平成23年度 FDのための情報技術講習会(大阪)

小棹理子(情報メディア学科教授)

2012年3月3日 日本教育工学会研究会(山口)

野口 周一(保育学科 副学科長)

小棹理子(情報メディア学科教授)

2012年3月4日 大学コンソーシアム京都 第17回FDフォーラム(京都)

内海太祐(ICTセンター長、情報メディア学科准教授)

4.3.1 米国研修（Chicago Shakespeare Theater Education Department）報告

名 称	：米国イリノイ州 シカゴ Chicago Shakespeare Theater Teacher Workshop <i>The Taming of the Shrew</i> (full-day workshop)
日 時	：平成 24 年 02 月 17 日（土）8:30～15:00
場 所	：CHICAGO SHAKESPEARE THEATER ON NAVY PIER 800 East Grand Avenue • Chicago、 IL • 60611 (TEL : 312.595.5600)
主 催	：Chicago Shakespeare Theater
報 告 者 名	：小 棹 理 子

【概要】

入学事前授業である「コミュニケーションリテラシー」では、身体動作を含めたコミュニケーション力の向上をめざして、2010年度よりプロのナレーター・俳優による指導を取り入れて「ノンバーバル・コミュニケーション」の導入を試みている。さらに充実したプログラムを提供するために、2010年度米国研修の内容を検討した際に、この分野で教育実践の長い米国に学ぶべき点が多いことを認識し、シカゴのシェイクスピア・シアター(以下 CST)の教育部門の訪問が提案されたが、さまざまな制約からその実現は、2011年度に持ち越されることとなった。

CST では、20 年間にわたり、毎年 1 月～4 月にかけて教育機関向けの”Teacher Workshop”を、4 回ほど無料で提供しており、今年 1 月 21 日に *The Tempest*（「嵐」）、2 月 11 日に *Midnight Summer’s Dream*（「真夏の夜の夢」）がすでに開催されている（いずれも半日）。幸いにして、筆者は、本職の舞台俳優の稽古の参観が組み込まれた 1 日かかりのワークショップである 2 月 17 日の *The Taming of the Shrew*（「じゃじゃ馬ならし」）に参加することができた。この内容と得られた知見を報告する。

1. はじめに

シカゴ地域は伝統的に「dramatics」（演劇）を通じての教育（体感学習、自己表現）がさかんである。特に、伝統ある CST の”Team Shakespeare” program は、イリノイ州で最大規模の arts-in-education program であり、男女を問わず、学校の域を超えた教育手法の epitome（権化）のひとつとして、シカゴ地区の重要な軸になっている。この Team Shakespeare 方式の「dramatics」を用いているところは、シカゴ北部 District65 地区など優れた教育を実現している地区にも見受けられ、調査対象として十分価値があると考えられた。

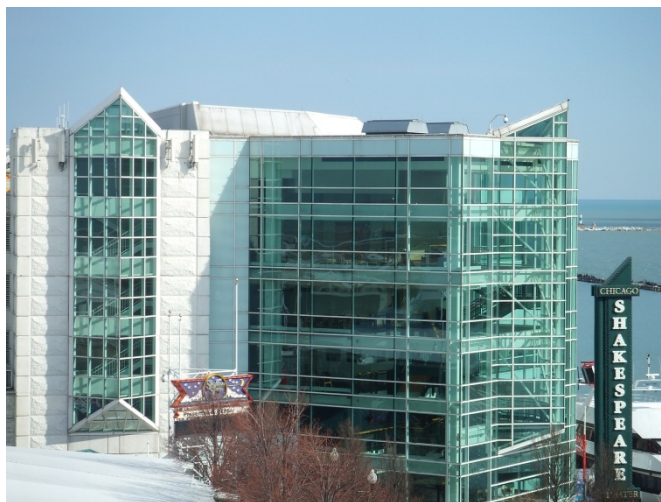


図 4.3- 1 Chicago Shakespeare Theater の外観

CST では、教員向けの資料センターやワークショップを提供しており、毎年 50,000 人の中学生以上の生徒や学生がマチネや短縮版の観劇を行い、その内容について話し合うことで理解を深めている。

Chicago Shakespeare Theater's "Team Shakespeare" program is the largest arts-in-education program in the state of Illinois. The program reaches nearly 50,000 students annually through group matinee performances, touring programs, abridged theater productions, and discussions, and also reaches out to educators with teacher resources and workshops.

以下に 2 月 17 日（土）実施のワークショップの詳細について述べる。

2. ワークショップ (2月17日)

スケジュール、担当者、場所

8:00~8:30 参加受付と朝食 (CST 6F ロビー)

8:30~8:45 挨拶と紹介

Marilyn Halperin, Director of Education (CST 6F Skyline Room)

8:45~9:45 研究者の視点から

Regina Buccola, PhD, Roosevelt Univ. (CST 6F Skyline Room)

10:00~11:00 オープンリハーサルと質疑応答

Rachel Rockwell, Director, & *The Taming of the Shrew* のキャスト
(CST 2F Courtyard シアター)

11:00~11:20 休憩

11:20~12:00 テキストワーク Textwork1 (初心者と経験者に分かれて実施)

経験者: Kevin Gudahl, CST text coach (CST 6F Skyline Room)

初心者: Marilyn Halperin,

CST Director of Education (CST 6F Theatre Room)

12:00~12:30 テキストワーク Textwork2

Kevin Gudahl, CST text coach (CST 6F Skyline Room)

13:30~14:45 音感と表現

Christine Adaire, Roosevelt Univ. (CST 6F Skyline Room)

参加希望者は、あらかじめ E-mail や電話で予約する。今回は、担当者 Kate Mayer への E-mail で、参加の趣旨を告げて予約した。当日は、名札と資料が渡されて、飲み物やベーグルなどを自由にとって着席する。参加者は、80名ほどであり、名札を見る限り、高校教員が多数を占めていたが、College の教員も参加していた。

Marilyn の挨拶では、スケジュールと担当者紹介に加えて CST 開所 25 年を迎え、本ワークショップも開催されて 20 年になること、今回のワークショップは通常の場合と異なり、*Taming of the Shrew* のキャストの実演リハーサルを見ることができると、などが説明された。また、初心者と経験者の数の確認を行った (予定より初心者数が多かったためであろうか、初心者向けのテキストワーク 1 の場所が変更になった)。

続いて Dr. Buccola の講義では、*The Taming of the Shrew* が著された背景や、この戯曲が持つ社会的な価値を含めて説明がなされた。シェイクスピアの戯曲の中でも絶妙な言葉の掛け合いがひとつの見どころでもあるが、単なるスラップスティックコメディではなく、当時の女性や家族に対する考え方、妻と夫の関係や、婚姻の持つ社会的意味も含めて説明された。また、原作を忠実に描くだけでなく、さまざまな解釈により繰り返し描かれている作品であることも説明された。さらに、原作として *The Taming of the Shrew* と *The Taming of A Shrew* の 2 つがあるとのことであった。これらの話の筋は類似しているが、セリフが異なっている。当時は、紙は貴重品であり、戯曲を著作として表すことは稀であり、~A Shrew が~the Shrew の贋作であるとか、その逆であるとか、さまざまな議論があるが、どちらが先かは決着がついていない、ということも初めて知ったことであった。~the Shrew をベースに、エリザベス・テラーを主人公として Franco Zeffirelli 監督が製作した映画(1962)は、とくに有名であるが、原著に忠実に描かれている。一方で、現代的な解釈による演出もなされている。BBC 版(2005)では、Katherina は成功した政治家の役柄で、現代的な衣装をまとうせて教会で結婚式を挙げる模様を描いており、Petruccio に正しい英語を話させる一方、Katherina には乱暴な言葉使いをさせることで、結婚を家柄と富

の結合であることを明確に描いている、とのことであった。今回 CST で演じられるのは、The Taming of the Shrew であり、衣装はエリザベス調でまとめながら、Petruccio と Katherina には赤いボクシンググラブをつけさせて言葉の応酬をより際立たせている。

第2限は、監督の Rachel Rockwell と本職の俳優陣（Baptista Minola: Don Forston、Lucentio: Nicholas Harazin、Hortensio: Matthew Sherbach、Gremio: Mick Weber、Petruccio: Matt Mueller、Katherina: Ericka Ratcliff、Bianca: Tiffany Yvonne Cox）によるリハーサルの参観であった。俳優は普段着のまま登場し、本番に用いる舞台上、最終第5幕が演じられた。

Petruccio と Katharina、Lucentio と Bianca、Hortensio と裕福な未亡人、の3組のカップルが決まったところで、妻の従順さを競い、Petruccio (Katharina) が勝って、妻の務めを語らせる場面である。セリフを忘れるハプニングもあったが、演出のポイントが良くわかった。舞台上での配置、タイミング、言葉のトーンに変更が加えられた。とくに、Bianca の表情の硬さや、舞台からの出入りのタイミング、最後の Katharina と Petruccio の構図や動作が修正された。このリハーサルが終わった後は、参加教員から矢継ぎ早に質問やコメントが飛び交い、時間が足りなくなるほどであった。Rockwell 監督は、2010年に Chicago Magazine に Best Director と賞賛された監督であり、今回の演出では、戦いによって妻と夫のベストマッチが決まること、最終的にはお互いが Win-win 関係になることを描きたかったと述べた。赤いボクシンググラブは、赤いハートに見えないか?、とのことであった。



図 4.3-2 Marilyn Halperin のリハーサル前の挨拶を実際に使用する舞台上



図 4.3-3 「じゃじゃ馬ならし」の第5幕のリハーサル

シェイクスピアの戯曲を正しく理解するには、さまざまな技巧がこらしてあるすばらしいセリフの理解が不可欠である。Marilyn による初心者向け Textwork1 は、セリフを読むための基本の講義と演習であった。全身を使っての表現がとてもよくわかった。初心者クラスでは、参考文献の紹介も行われた。押さえるべき基本事項は以下である：

- ① Definitions—きちんと言葉の定義を把握すること (Lexicon、脚注を利用する)。
- ② Verse and Prose—シェイクスピアの詩の 72%が短文の積み重ねで、左端が揃えられている verse で、28%が通常の書き言葉の prose である。
- ③ Iambic Pentameter—独特なリズム感をあたえるために、10syllables(=5iams)で揃えている

PETRUCHIO Why come I hither but to that intent? (10)
 Think you a little din can daunt mine ears?
 Have I not in my time heard lions roar?

Have I not heard the sea、 puffed up with winds、
Rage like an angry boar chafed with sweat?

The Taming of the Shrew、 Act 1 Scene 2

④Alliteration—同じ音の子音を重ねることで、気持ちを表す

PETRUCHIO Be mad and merry —or go hang yourselves.

But for my bonny Kate、 she must with me.

The Taming of the Shrew、 Act 3 Scene 2

⑤Assonance—同じ音の母音を重ねて気持ちを表す

PETRUCHIO But slow in speech、 yet sweet as springtime flowers.

The Taming of the Shrew、 Act 1 Scene 2

⑥Repetition—繰り返す。繰り返すを強調したり、違う扱いをすることで、言葉の意味がより明確になったり、感情が強調されたりする

PETRUCHIO I am content.

KATHARINA Are you content to stay?

PETRUCHIO I am content you shall entreat me stay—

But yet not stay、 entreat me how you can.

The Taming of the Shrew、 Act 3 Scene 1

⑦Antithesis—テキスト内で反対後を見つけると意味をとりやすい。

KATHARINA Asses are made to bear、 and so are you.

PETRUCHIO Women are made to bear、 and so are you.

The Taming of the Shrew、 Act 2 Scene 1

PETRUCHIO O Kate、 content thee; pritheee be not angry.

The Taming of the Shrew、 Act 2 Scene 1

TRANIO The one as famous for a scolding tongue

As is the other for beauteous modesty.

The Taming of the Shrew、 Act 1 Scene 2

⑧Small words—短い接続詞である but、 yet、 or と and や therefore の組み合わせは、キャラクターの考えが変化したことを意味する。

⑨Monosyllabic lines—Monosyllabic な単語や phrase は、役者が考えをめぐらしていることを意味し、重要な展開であることを示す。

PETRUCHIO I love her ten times more than e'er I did.

O how I long to have some chat with her.

The Taming of the Shrew、 Act 2 Scene 1

これらの基本事項を押さえた上で、Kevin による Textwork2 では、セリフの一部が与えられ、上記技巧の凝らしてある箇所を見つける作業と、これらを意識して、2 人一組で実際にセリフを話すワークが入る。



図 4.3-4 初心者クラスの講義を「テンペスト」の舞台上で

午後からは、体を使っての発音（話し方）を実践するワークであった。Christine は、「netlingo」を掴みに利用した。「母音が消えつつある」ことを強調した。さて、以下は何を意味するのでしょうか？

【()は答え】

CQRT	(security)	AML	(All My Love)
BC	(because)	AWC	(After a While Crocodile)
BFN	(Bye for Now)	GR8	(Great)
*\$	(Starbucks)	ILY	(I Love You)
CUL8R	(See you Later)	DISTO	(Did I Say That Out Loud)
10Q	(Thank you)	2Brnt2B	(To be or not to Be)

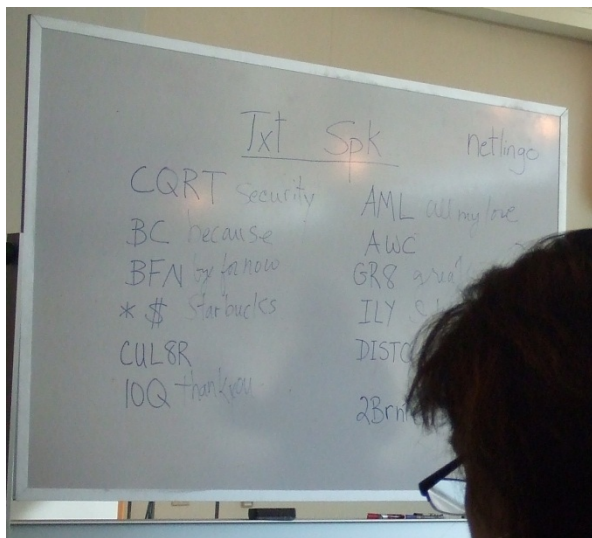


図 4.3-5 最初の話題—母音の重要性

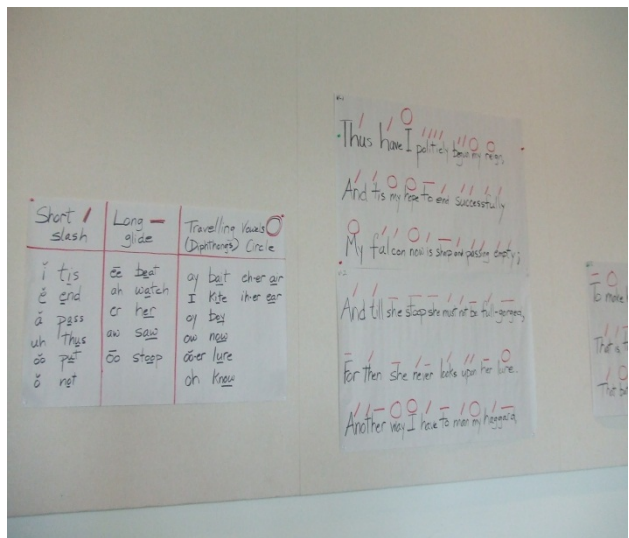


図 4.3-6 発声練習のための掲示

話し言葉の中から母音が消えることで、「気持ち」がこもらなくなる、との主張であった。この問題提起に対して、受講者からのコメントを十分聞いたのち、全員が立って体を使ってのワークとなった。母音は基本8通り、それぞれに動作をつけて、発音する。30分ほど、7つの文を全員で3回ほど繰り返し読んだのち、子音に入る。子音には2種類ある。鋭く短く発音するグループと、引っ張るタイプのグループである。これらについても15分程度のワークとなった（ワークに利用した教材を付録につけた）。



図 4.3-7 体を使ったワークショップの一つ：体をほぐしながらコミュニケーション

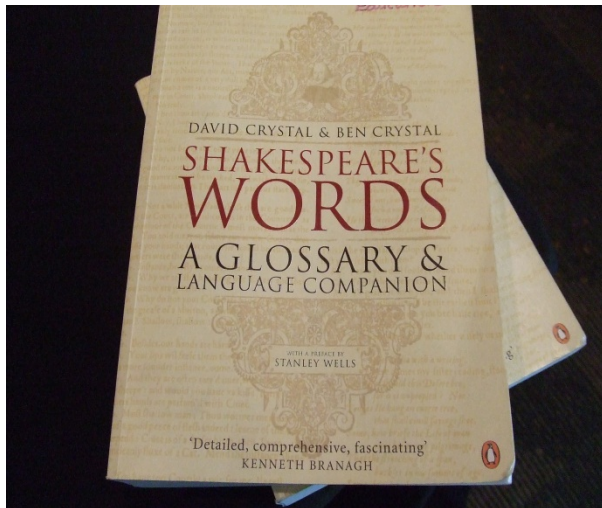


図 4.3-8 Teachers' Resources で準備されている書籍

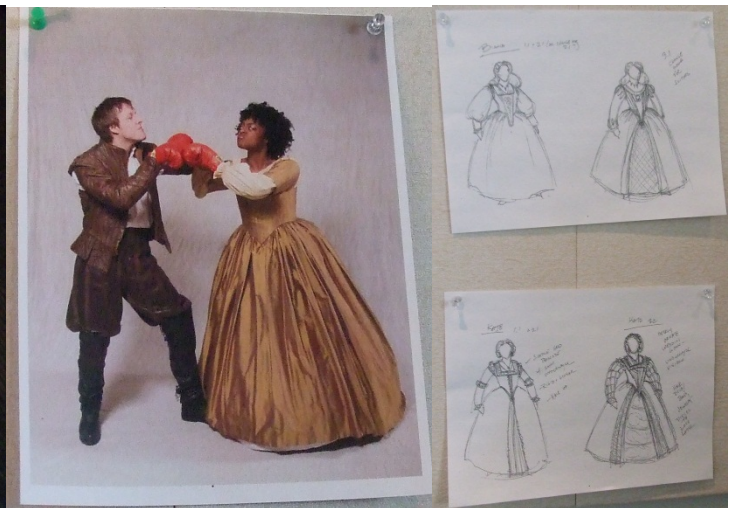


図 4.3-9 上演予定のシーンと衣装

3. Q&A

ワークショップ終了後、忙しい Marilyn を捉まえた。以下の3点の疑問点に対する回答が得られた。

(1) この教師向けワークショップは開催して何年ですか？

現在の CST に移ってから 20 年になる

(2) ワークショップはどのようにして広報するのですか？

Web に掲載するくらいで、特に何もしていない。基本的に口コミが多いと思う。

(3) なぜこれほど多くの参加者があるのですか？

シカゴでは、中学、高校で、シェイクスピアを教えなければならないが、教えるのが難しい。ここでは、教材をそろえ、教員のワークショップを開催し、生徒に実際に劇を見せるというセットになっているので、頼る教員が多い。

以上

[参考資料]

(1) ワークショップの案内 (Web)

BOX OFFICE THE PLAYS PLAN YOUR VISIT EDUCATION SUPPORT US PRESS, NEWS & EVENTS STORE ABOUT CST

25th ANNIVERSARY SEASON
chicago shakespeare theater
on navy pier theater

Join Email List
Welcome to CST
Login | View Cart

Education

For Teachers

Performances for Students

Teacher Workshops

Teacher Handbooks

Teacher Resource Center

CPS Shakespeare!

For Playgoers

For Artists and Arts Leaders

PRINTER FRIENDLY []
EMAIL A FRIEND []

Earn CPDU Credits through Free Teacher Workshops

All classroom teachers are invited to our free teacher workshops dedicated to each full-length Shakespeare production and the abridged production. Workshops qualify teachers to earn Continuing Professional Development Units (one CPDU credit per hour).

Conveniently scheduled on Saturday mornings, CST teacher workshops combine the latest in scholarship with practical and fun pedagogical approaches, plus production-based input from the Theater's artistic staff. Whether you're teaching any of the plays we perform this year, or you're thinking about it for the future, or simply wanting to learn more about teaching Shakespeare, you'll find our workshops stimulating and full of variety.

Please RSVP for our workshops no later than the Monday prior to each workshop date. Pre-registration is required.

Call the Education Department at 312.595.5678 to register and for further information.

The Tempest
Saturday, January 21, 2012
8:30 a.m. – 1:00 p.m.

The Taming of the Shrew
DATE CHANGE: Saturday, February 18, 2012 Please note new date
8:30 a.m. – 3:00 p.m. (Originally scheduled February 4)
Note: full-day workshop

A Midsummer Night's Dream
Saturday, February 11, 2012
8:30 a.m. – 1:00 p.m.

Timon of Athens
Saturday, April 28, 2012
8:30 a.m. – 1:00 p.m.

“Every time I come here I walk away filled with excited anticipation to share these activities and ideas with my students. Thank you!”
— Teacher, Chicago Talent Development Charter High School, Chicago

“The presenters are always so talented and inspiring. I appreciate that they talk to us like equals, as scholars and teachers.”
— Teacher, Woodlands Academy, Lake Forest



Teacher Workshop: The Taming of the Shrew
Saturday, February 18, 2012
Presenter: Kevin Gudahl

Text Work 101: Monologue

The Taming of the Shrew
Act 4 Scene 1

PETRUCHIO

Thus have I politically begun my reign,
And 'tis my hope to end successfully. 160
My falcon now is sharp and passing empty,
And till she stoop she must not be full-gorged,
For then she never looks upon her lure.
Another way I have to man my haggard,
To make her come and know her keeper's call, 165
That is, to watch her, as we watch these kites
That bate and beat and will not be obedient.
She ate no meat today, nor none shall eat;
Last night she slept not, nor tonight she shall not;
As with the meat, some undeserved fault 170
I'll find about the making of the bed,
And here I'll fling the pillow, there the bolster,
This way the coverlet, another way the sheets.
Ay, and amid this hurly I intend
That all is done in reverend care of her. 175
And, in conclusion, she shall watch all night,
And if she chance to nod I'll rail and brawl
And with the clamour keep her still awake.
This is a way to kill a wife with kindness,
And thus I'll curb her mad and headstrong humour. 180
He that knows better how to tame a shrew,
Now let him speak—'tis charity to show.

Exit

(over)

When you **argue** a situation, you must find out who, what and where you are.

An **argument** is a discussion that persuades:

- a change of mind
- a change in course of action

Most Shakespearean Monologues follow Aristotle's idea of plot development:

1. an introduction
2. a complication
3. a crisis/catharsis
4. some form of summary

Others can be formed more rhetorically as an argument/debate:

1. Share your problem (or ask a question)
2. Give the arguments (weigh the pros and cons)
3. State the conclusion (what will you do, what will you not do, what is the inevitable, what do you hope for, what do you fear, etc.)



Teacher Workshop: The Taming of the Shrew
Saturday, February 18, 2012
Presenter: Christine Adaire, Roosevelt University

Sound Patterns: Finding the Music of Language

Our language can be divided into two different kinds of sounds. Vowels are the emotional river running through the middle of the text. The consonants stop or shape the emotion. They bring definition and meaning. They shape the emotion so that we can express ourselves more precisely. If the vowels dominate, the sense is drowned in a sea of sound and feeling. If the consonants dominate, the emotional heart of the text is strangled by definition and reason. In both cases, the delicate balance between vowels and consonants, emotion and sense, heart and head has been lost.

We're going to explore the vowels and the consonants, the heart and mind, in the following text:

The Taming of the Shrew **Act 4 Scene 1**

PETRUCHIO

Thus have I poiticty begun my reign,
And 'tis my hope to end successfully.
My falcon now is sharp and passing empty;
And till she stoop she must not be full-gorged,
For then she never looks upon her lure.
Another way I have to man my haggard,
To make her come and know her keeper's call,
That is, to watch her, as we watch these kites
That bate and beat and will not be obedient.

(over)

Restoring Vowels for the “Txt Generation”

Warm-up: Ask the class to begin moving through the space. Call out the different sounds of vowels (for example: ooo, ah, eee, i, etc.). Invite the students to move while making the sounds. How do the different sounds make you want to move? What is the rhythm of the different sounds?

This exercise focuses on the vowels: isolating them so you can get a sense of their flow and rhythm. The flow comes from the fact that vowels are open, fluid sounds. The rhythm comes from the fact that vowels have different lengths.

There are three vowel lengths: short, long and diphthong. A diphthong is made up of two sounds, starting on one sound and moving to another. Diphthongs have a sense of movement as well as length. We’re going to call them “traveling vowels.”

We’re going to mark the text with symbols for short, long and traveling vowels. We’re also going to connect a different physical gesture to the different lengths.

SHORT /
(slash)

i tis

e end

a pass

uh thus

oo put

o not

LONG --
(glide)

ee beat

ah watch

er her

aw saw

oo stoop

“TRAVELING” VOWELS **
(asterisks)

ay bait

“i” kite

oy boy

ow now

air

ear

oo-er lure

oh know

/ / ** // / // ** **
Thus have I polifictly begun my reign,

/ / ** ** - / / / //
And 'tis my hope to end successfully

** / / ** / - / / / / /
My falcon now is sharp and passing empty;

/ / - - - / / - / -
And till she stoop she must not be full-gorged,

- / - / - / // - **
For then she never looks upon her lure.

// - ** ** / - / ** / -
Another way I have to man my haggard,

- ** - / / ** - - - -
To make her come and know her keeper's call,

// - - ** / - - - **
That is, to watch her, as we watch these kites

/ ** / - / / / - - - -/
That bate and beat and will not be obedient.

Try saying the text just with the vowels. How does that make you feel? How does it inform how Petruchio might feel?

Now put back in the consonants. Can you still feel the pulse of the river?

Consonants: The Defining Muscle of the Text

Warm-up: Ask the class to begin moving through the space. Call out the different sounds of consonants (for example, sss, ddd, fff, ttt, etc.). Invite the students to move while making the sounds. How do the different sounds make you want to move? What is the rhythm of the different sounds?

There are two kinds of consonants: short and long. The short ones are called "plosives" because they have an explosion of sound: b, p, d, t, g, k, j, ch. All the other consonants are "continuants": they have length.

LONG --
(glide)

SHORT /
(punch)

th, v, f, s, sh, z, m, n, h, r, ng

b, p, d, t, g, k, j, ch

Any word that doesn't have a consonant, I've marked as *. We can snap our fingers on those.

-- -- -- / -- / -- // -- -- --
Ths hv * pitkl bgn m m
Thus have I politticly begun my reign,

-- / / -- -- -- / / -- / -- / ----
nd tz m hp t nd sk sfl
And 'tis my hope to end successfully.

-- -- / -- -- -- / -- / / -- -- / /
m flkn n z shrp nd psng mpt
My falcon now is sharp and passing empty;

-- / / -- -- / / -- -- / -- / / -- / / / /
nd fl sh stp sh mst nt b fl gjd
And till she stoop she must not be full-gorged,

-- -- -- -- -- -- / -- / -- -- --
fr thn sh nvr lks pn hr lr
For then she never looks upon her lure.

---- -- -- / -- -- -- / -- /
nthr w * hv t mn m hgrd
Another way I have to man my haggard,

/ -- / -- / -- / -- -- / / -- / -- / --
t mk hr km nd n hr kprz kl
To make her come and know her keeper's call,

-/ -/ -/ -- -- -/ -- // -
tht z t wch hr z w wch thz kts
That is, to watch her, as we watch these kites

-/ // -/ // -/ -- -/ / // -/
tht bt nd bt nd wl nt b bdnt
That bate and beat and will not be obedient.

Try saying the text just with the consonants. How does that make you feel? How does it inform Petruchio's struggle? How does he use the consonants to control his feelings?

Now put back in the vowels. Can you feel the balance of heart and mind?

Now look at the rest of the speech (*over*). Explore it for vowels and consonants and come up with your version of the speech!

The Taming of the Shrew

Act 4 Scene 1

PETRUCHIO

Thus have I poltically begun my reign,
And 'tis my hope to end successfully.
My falcon now is sharp and passing empty;
And till she stoop she must not be full-gorged,
For then she never looks upon her lure.
Another way I have to man my haggard,
To make her come and know her keeper's call,
That is, to watch her, as we watch these kites
That bate and beat and will not be obedient.
She eat no meat to-day, nor none shall eat;
Last night she slept not, nor to-night she shall not;
As with the meat, some undeserved fault
I'll find about the making of the bed;
And here I'll fling the pillow, there the bolster,
This way the coverlet, another way the sheets:
Ay, and amid this hurly I intend
That all is done in reverend care of her;
And in conclusion she shall watch all night:
And if she chance to nod I'll rail and brawl
And with the clamor keep her still awake.
This is a way to kill a wife with kindness;
And thus I'll curb her mad and headstrong humor.
He that knows better how to tame a shrew,
Now let him speak: 'tis charity to show.

4.3.2 研究会・学会報告

学会等名称：大学教育学会 第33回（2011年）大会
日 時：平成23年6月4日（土）13:10～18:10
場 所：桜美林大学 多摩アカデミーヒルズ
主 催：大学教育学会
報告者名：小棹 理子

【概要】

基調講演：桜美林大学 学長 佐藤 東洋士 氏 「何のため、誰のための質保証」

多摩市 高齢化が進んでいる、7大学の拠点化（多摩アカデミーヒルズは、元厚労省のウエルサンピア多摩）

佐藤氏は、日本高等教育評価機構理事、大学評価・学位授与機構機関別認証評価委員会委員の立場から、国際水準での質保証を達成するためには、「大学による、ステークホルダーのための質保証」を実現する必要がある。質保証を考えるために3つの観点から講演した。

(1) 大学教育の質保証とは、いかなるステークホルダーを念頭において定義すべきか。

(2) 評価のシステムは、ゴールの共有に重点をおいた大学の平準化を目指しているように見えるが、創立の理念等に則した各大学固有の改善はどのように尊重・評価されるのか。

(3) 大学は社会的人材育成のための機関たるべきことが要請されているが、学生個人の向上をめざすための学びはどのように尊重され評価されるのか。

【GPとの関連性】

四年制大学での課題は、すでに短期大学では5-10年前から経験していることである。規模の大きさや、学生の勉学にかかる年限が違とはいえ、ユニバーサル時代を迎えて学力低下の同根の問題があることがわかった。

以上

学会等名称：第6回 神奈川大学高大連携フォーラムー接続教育と「基礎学力」の確保
日 時：2011年8月5日（金）13:00～17:00
場 所：神奈川大学横浜キャンパス
主 催：神奈川大学
報告者名：岩崎 敏之

【概要】

・基調講演「高大連携による若者の成長支援」 講師：桐村晋次氏 神奈川大学特別招聘教授

高大連携や接続教育についての具体的な話ではなく、基礎学力についてどのように認識され、現時点でどのように捉えなければならないかということについての確認をする内容であった。

・実践発表2「地域の活性化を担う次世代の創出」

ーキャリア教育における自分らしい生き方を育むー

報告者：宮本秀男氏（三重県立木本高等学校）

コメンテーター：山口菊夫氏（三重県立木本高等学校）

木本高校は、三重県の熊野市にある普通科と総合学科を併せ持つ高校である。熊野市は、三重県庁のある津市から140kmも離れており、若者が都市部に出ていくことを止められない状況となっている。地域に戻ってきて働く若者を増やすことを目指して郷土に対する誇りを持たせるための科目の実践例が示された。連携の取組については、三重大学からの出張授業が紹介されていた。報告者の宮本校長のリーダーシップが十分に発揮されていて、組織的に取り組まれていることを伺い知ることができた。三重大学との

連携については、熊野の歴史的な位置づけを学ぶだけではなく、さらに、今後の熊野のあり方について考え、活性化に向けての提案がなされていくことが望ましいと感じた。

連携の事例とよりは、総合的な学習の時間における地域を知るための教育実践の例の報告であったといえる。

・パネルディスカッション

コーディネーター：桐村晋次 氏（神奈川大学特別招聘教授）

パネリスト：椋本 洋 氏（立命館大学）、青木 克比古 氏（金沢工業大学）

酒井 正三郎 氏（中央大学）、鈴木 陽一 氏（神奈川大学）

椋本 洋 氏

立命館大学におけるプレ・エントランス立命館開催デーについて紹介されていた。立命館大学では、全入学者中5割が2次試験を受験し、3割が付属高校から進学し、2割が特別入試で入学すること。紹介された例は、特別入試で入学する学生に対する入学前ガイダンスの位置づけのようであった。数ⅢCの成績分布について、特別入試による入学者が低い傾向にあるという報告があった。e-ラーニングについては、最後の目標にたどり着く学生が4割であったことから通信添削の方が効果的であると認識し、次年度以降は通信添削のみを行うとのことであった。

青木 克比古 氏

青木氏は金沢工業大学の数理工教育研究センターに所属されている。授業のカリキュラムに加えて、自学自習システムとして実施されている数理リテラシーパスポートについて、紹介されていた。それは文字通りパスポートサイズの冊子で、正課外での学習成果を学生自らが記録していくものである。平成23年度は、正課の教育プログラムも改善すると同時に、引き出す教育として開講した課外講座には、延6000名を超える学生が受講した。7学系の約16000人の対象者のうち、パスポートのプログラムへの参加率は35%であった。数理リテラシーをポイント化し、高ポイントの学生を学生スタッフとして活用する取り組みも行われている。自学自習システムの実例として、学ぶ点が多いものであるように感じた。

酒井 正三郎 氏

推薦・特別入試の入学手続き者を対象としたプレ・スチューデントプログラムの成果が紹介されていた。商学部1120名中、400名が特別入試による入学者であるとのこと。入学準備に、リメディアルでなはい、一つだけ正解がある問題ではないものに取り組むことが課されているようであった。受講した学生の方が、入学後のGPAが高いということが報告されていた。他に公認会計士の資格取得を目指して行われている高大接続教育の事例が紹介されていた。

鈴木 陽一 氏

神奈川大学で生じている学力格差問題を解決することに取り組んでいるという事例報告であった。報告者は中国語学科に所属されており、中国語学科が少人数であることもあり、偏差値がさほど高くはない学生が入学しているにも関わらず、満足度が高いということが語られていて、そのことが印象に残った。

・質疑応答

高校の先生から、高校の段階で、どういうことがらを身につけておくことが望ましいのかという問いかけがあった。

学の中でコミュニケーション能力等を伸ばす取り組みをしているなどの回答はあったものの、質問者の問いかけに、正面から回答がなされていなかったように感じた。

会の終了後、日を改めて、質問された先生と高校の段階で何を学べば良いかということについて議論するきっかけを得た。本学の取り組みにも関心を持っていただけ、今後の本学が主催するフォーラム等を通じて、情報交換をしていくこととなった。

以上

学会等名称：短期大学教育改革 ICT 戦略会議

日 時：平成 23 年 9 月 7 日（水）13:30 ～16:30

場 所：アルカディア市ヶ谷

東京都千代田区九段北 4-2-25

主 催：公益社団法人 私立大学情報教育協会

報告者名：小棹 理子

【概要】

「社会で通用するコミュニケーション能力の育成を目指して」をテーマとして、下記のとおり、2 件の事例紹介と企業人を交えた全体討議が行われた。参加者 35 名（26 短期大学）。

事例紹介 1

「就職できるコミュニケーション能力育成について」：

桜の聖母短期大学 加藤 竜哉氏

桜の聖母短期大学は福島県にある 400 名規模の短期大学である。授業科目だけでなく、正課外活動での体験を通じて、社会で役立つコミュニケーション能力を育成する取組が紹介された。より具体的には、「コミュニケーション能力」を IT 業界団体 CompTiA のビジネスコミュニケーション診断の枠組みである「信頼性」「共感性」「理論性」を柱としたスキルを評価のよりどころとし、入学前教育、基礎演習、ライフキャリアデザイン、ライフキャリア形成論、インターンシップ、ライフキャリア形成演習などの科目群を通して自己分析と他人との関係力を高めるというものである。以上正課外の活動として、他の短期大学同様、インターンシップ、ボランティア活動、オリエンテーションキャンプ、パーティ、スポーツ大会、文化祭、上級生と下級生の交流できる委員会（2010 年度より）が設けられている。

課題としては、教職員間の連携の取り方、科目間連携の強化、学生カルテの導入に加え、震災の影響が挙げられた。

事例紹介 2

「日本語運用能力の向上とコミュニケーション能力育成をめざして」

大阪城南女子短期大学 小林 孔氏

大阪城南短期大学には現代生活学科・総合保育学科・人間福祉学科の 3 学科があるが、共通基礎科目の中に、「日本語セミナー」を設け、これを 2 年間 4 期にわたる必修科目とし、学生の日本語運用能力の向上に努めている。より詳細には、基礎的日本語能力である「書く・話す・読む」の育成を強化するために、1 年次前期には履歴書やレポート、手紙の書き方、同後期では朗読、聞きとりテスト、3 分間スピーチを、2 年次前期には詩などを読み、評論・随筆を書き、同後期に文化としてとらえるために季語と俳句を学ぶ、という構成になっている。また、応用的発展的な科目として「大阪の人と文化 I、II」を設けてあり、学生自らが地元地域を取材し、ミニコミ誌を発行する中で、実際に自分のことばと視点で取材・編集、情報を伝える力を育成する取組となっている。

全体討議

「コミュニケーション能力の育成を連携の中で探る」ことをテーマとして、企業関係者から、短大卒業生に必要とされる能力や、問題点、これからの期待などがそれぞれ 15 分で具体的に指摘・提案されたのち、参加教職員との意見交換が行われた。

事例紹介 1 株式会社ホテルオークラ 事業管理部総務人事課 坂東 八栄氏

海外事業所ホテル人事採用代行業務を行っているため、まず英語力（英検 2 級、TOEIC500 点以上）が必要である。それに加え、心身共に健康で、コミュニケーション能力、チームプレーができることも必須。他には、一般常識や日本の文化（お茶や生花）を体得理解していることが望ましい。

事例紹介 2 株式会社オンワード樺山 東京地区・関東管理部販売人財課 森村 国生氏

道徳性、社会性、主体性、計画性が不足している。相互理解力、基礎体力、基礎学力も不十分。短大では、日本語力と人間教育を行うべきである。加えて、主体性、チームワーク力、洞察力も伸ばして欲しい。

事例紹介 3 株式会社スタジオアリス 人事部採用担当部長 大西 康雄氏

子どもとその両親がターゲットであるので、一般常識を身につけて自分の適性を見極めておくことが必要。さらに、子ども写真館というサービスを提供するためのスキルとして、短時間でわかりやすく説明する能力、ホスピタリティ、プレゼンテーション能力、パフォーマンス力、チームワーク力が必須。

討議のまとめと提案

いずれの企業においても、広義の「コミュニケーション能力」が必要であることが強調された。換言すれば、人間関係力、相互理解力、チームワーク力、などであり、教養あるいは一般常識、日本語力を含めた基礎学力に裏打ちされるものでなくてはいけないことも指摘された。その一方で、業種・職種によって多少力点が異なることも明らかになった。海外展開するホテルで必要とされる英語力、ファッション業界で求められる若い感性（五感と雑感）や聴く力、子どもサービスで求められるホスピタリティやパフォーマンス力、などである。

一方、短大では企業の要望に応えるべく教育を行っているが、職種・業種により必要な能力に違いがあるためミスマッチを生ずる場合があること、教員の経験知不足（企業組織の中で働いた経験が少ない）、などが問題点として挙げられた。これら問題を解決するために、私立大学情報教育協会（私情協）をプラットフォームとして短大と企業の連携を強化することが提案された。たとえば、私情協が企業からの情報提供を受ける場や、交流会・研究会の開催母体として機能することによって、短大卒業生と企業とのマッチングを高め、学生の動機づけに役立ち、教職員のFDを促進することになると期待される。

（三ツ木、小棹）



学会等名称：短期大学教育改革ICT戦略会議
 日 時：平成23年9月7日（水） 13:30～16:30
 場 所：アルカディア市ヶ谷（東京都千代田区）
 主 催：公益社団法人 私立大学情報教育協会
 報告者名：岩崎 敏之

【概要】

開催テーマは「社会で通用するコミュニケーション能力の育成を目指して」であった。人材育成の役割が求められていることを認識する状況において、企業の声を聴くという場が設けられた。

事例紹介 1 「就職できるコミュニケーション能力育成」

桜の聖母短期大学 進路部長 生活科学科教授 加藤 竜哉 氏

- ・入学者 400 人全員に対する入学前教育では、高校までのようにテストで 100 点を取ることを目指すわけではないことを伝えている。
- ・日本語検定 4 級を 1 年生全員に受けさせている。
- ・ライフキャリア形成演習という授業で、入学 3 ヶ月後に 900 字から 1200 字の文章を書かせている。
- ・全学的に取り組んでいくためには、教員の社会性が問われるとのこと
- ・学生の主体的な活動として、2 年生が 1 年生のための行事をプロデュースするという事例
予算の管理、伝票の作成方法などもその機会を通じて教えている。
- ・コミュニケーション能力の評価にあたっては、BCSA(Business Communication Skill Assessment)を活用している。
- ・教員間の連携の必要性を、特に問題点として強調されていた。

事例紹介 2 「日本語運用能力の向上とコミュニケーション能力育成をめざして」

大阪城南女子短期大学 人間福祉学科教授 小林 孔

- ・全 3 学科で共通の必修科目として、マナーや書道・茶道・華道を修得する「礼法セミナー」と日本語セミナー、情報処理演習が設けられている。
- ・1 年後期に話す・聞くを学ぶ中で、聞き取りテストというトレーニングを行っている。
- ・書くことについては、推敲する習慣を身につけさせる指導を行っている。
- ・大学ノートに 1 冊を創作ノートと呼んで、その 1 冊に書きためていく方法を採用している。
- ・創作ノートでは、消しゴムで消すことを禁止し、修正箇所は線を引くだけにして残させている。「見せ消し」という昔からの方法があると教えている。
- ・2 年生の後期では、俳句の実作をさせ、その添削なども行っている。(小林氏の研究の専門分野が俳諧であるとのこと)
- ・「大阪の人と文化」という授業で、ミニコミ誌の取材立案、企画、記事の執筆、構成などを学ばせている。
- ・ミニコミ誌の作成の作業段階として、取材計画について教員が採否を下し、その後、学生が直接取材先に取材依頼を掛け、そのフィードバックを元に、教員が指導をしていくという形を採用している。
- ・高校までの間でやってきたというような課題だと、学生の達成感や充実感を向上させることは難しいとのこと

全体討議 「コミュニケーション能力の育成を連携の中で探る」

事例紹介

(株) ホテルオークラ 事業管理部総務人事課 坂東 八栄 氏

- ・世界で一番知られている日本語であると説明し、「ありがとう」の言い方を指導している。
- ・いろいろな情報に耳を傾けておくことが必要である。会話をするために英語の運用能力は必要であるが、それにも増して、話すテーマの中身そのものを知っていなければならない。茶道の作法、すき焼きの作り方など、そのこと自体を知らないと会話が成り立たない。

(株) オンワード樫山 東京地区・関東管理部販売人財課 森村 国生 氏

- ・就職する 6 割強が短大生であるとのこと
- ・販売業として、顧客はスタッフに着いてきているため、人に見られていることを意識し、自分を律している人材を必要としている。
- ・学生の主体性を促す教育、言葉を学ばせ会話ができる人材を育成する教育を期待する。

(株) スタジオアリス 人事部採用担当部長 大西 康雄 氏

- ・短大生に不足していると感じている点として、採用時点での一般常識と学生生活の充実度の 2 点が挙げられていた。
- ・会社の特質を短時間で説明する能力、提案力やプレゼンテーション能力、店舗のスタッフをまとめていくようなチームワーク力を求めているとのこと

討議

短大生を採用することの利点

・短大生は入社2年後に実務2年を経て、新卒の4大生と比べた場合、その実務経験の年数分、活躍できる人材となっている。

特に求めているものを再確認

- ・言葉を適切に使う能力は必ず必要である。
- ・あいさつや笑顔の重要性

今後の事業展開

- ・ファッションの分野においては、海外へ向けてブランドを展開させていくことが今後求められていく。
- ・子どもを対象とした写真館として、ターゲットを広げる上では、ブライダル写真を視野に入れる。

会議の最後には、今後、企業関係者と大学関係者が意見交換や情報交換を行う場を設けていくという方向性が確認された。

雑感

教育内容の事例紹介については、学生のコミュニケーション能力を向上させる必要性を感じていること、それに応じた授業内容の展開方法に、本学の状況との共通性が多くあることを認識した。細部に渡る工夫について、参考にして取り入れることができるものもあると感じた。

企業の方々からの提言は、普段から企業関係者より得ている実感と共通するものであった。短大全体として考えた場合には、このような企業関係者の意見を聴く場は、さらに必要なのかもしれない。

会議内で、短大卒業生が企業で有用な人材として求めるに値するということが確認できていたが、高校生やその保護者、高校教員等にその現状を伝える必要があることを改めて感じた。

以上

学会等名称：産学協同就業力育成シンポジウム

日 時：平成23年11月10日（木）14:00～17:30

場 所：日経ホール

東京都千代田区九段北4-2-25

主 催：Future Skills Project 研究会

報告者名：小棹 理子

【概要】

第一部

基調講演「産学協同教育への期待」 参議院議員 鈴木寛氏（前文部科学副大臣）

研究報告「講座の成果と課題」Future Skills Project 研究会メンバー

第二部

パネルディスカッション「大学教育と企業のコラボレーションの可能性」

第一部の基調講演では、これからの日本に必要な人材像として「人類に新たな価値を創造するチームの人材」、「アジアとコラボできる人材」、「世代・立場を超えてコミュニケーションできる人材」があげられ、内、2番目、3番目には企業からの「ナナメ」関わりが重要だと強調された。つまり、英語教育のみならず異文化を理解し、苦勞してコラボをする力、また、キャリア教育の充実とコミュニケーション能力の育成には、企業の中から人材のロールモデルを示すことが要求される。

第一部の研究報告では、大学と企業の協同授業として前期に開講された事例が発表された。目的は、「主体性を引き出す」「実際の社会を知る」「必要なスキルを知る」である。とくに今回の産学協同講座との違いがある。①6企業5大学の共同実施、②半期15コマを2企業で分担することで負荷を軽減、③グループのメンバー変更可能、④振り返りの時間確保、⑤事前事後に意識調査で検証、⑥入学直後の1年生対象の初年次導入科目として実施。

効果としては、学生の感想からも変化があったことは明らかで、グループ内での主体性の発揮が見られた。一方、第一の課題としては、ネガティブ意見を相手に伝えられるようになってはおらず互いに議論になるところまでは到達していないことが挙げられた。これは、自信の無さから来ているのかもしれない。第二の課題としては、アカデミックモチベーションを高めることを目的としているにもかかわらず、2極化してしまっている。すなわち、座学の重要性に気がつく学生がいる反面、座学がつまらなく感じてしまう学生も出てきた。

第二部のシンポジウムでは、後期に講座を開講中の4企業・4大学を交えてのシンポとなった。前期はBtoC型の2社（資生堂、サントリーHD）×青学・明治、後期はBtoBの2社（日本オラクル、アステラス）×青学・明治+上智・立教である。

企業の新人研修では（協調性+主体性）を理解できるプログラムとなっているが、学生を受け入れることで、企業側にとっても参考になる点が多かった。

企業は継続的にこのようなボランティア的な教育に関わってもらえるのか、企業の中には本来のインターンシップになっていない場合がある。

新しい教育方法であるが、次のステップをどうするか。学生は教育の趣旨をきちんととらえられたか？学生の後期のまとめ振り返りテーマは「卒業後の自分を考えよう」、ということであったので、「気づき」はあった、と思われる。

企業のメリット・デメリットは？費用対効果という点ではメリットはないが、広い意味で人材育成の先頭に立っている、というイメージができれば、社会貢献の一環としてのメリットはある。

大学+企業にとどまらず、中高まで影響を与えられれば良いのではないか。

以上

学会等名称：大学教育学会 2011年度 課題研究集会

日時：平成23年11月26日（土）～27日（日）9:30～12:00

場所：山形市中央公民館

主催：大学教育学会

報告者名：小棹理子（シンポジウムⅠ）、岩崎敏之（シンポジウムⅡ、Ⅲ）

【概要】

統一テーマ：「大学教育の原点—授業・学生・教養—」

開催校企画シンポジウム テーマ：「学生主体型授業の可能性」

シンポジスト：

橋本勝（富山大学）「東日本大震災を学ぶ13の切り口」

杉原真晃（山形大学）「学生主体型授業をもとにした教員主体型FDの構築」

阿部和厚（北海道医療大学・北海道大学）「学生主体授業『メディカルカフェをつくる』」

コメンテーター：林義樹（日本教育大学院大学）

司会者：青野透（金沢大学）、小田隆治（山形大学）

杉原氏（山形大学）

「未来学へのアプローチ」というセミナー型の学生主体型授業のパイロット授業の実践報告がなされた。この科目は教養教育選択科目で全学部対象、1年生が主で30名以下の受講生の授業である。建築学と化学と教育学の異なる3分野の教員によるリレー式の共同授業として行われている。共同授業とした理由は、グループ学習⇒発表⇒全体討論⇒相互評価の構成が、次年度以降に幅広い教養科目に応用していくためである。学生の学習成果のアンケート調査によって、学習意欲、知識・能力、積極性、コミュニケーション力、課題発見・解決能力の向上を学生が実感していたことが確認されている。

これからの学生主体型授業の展開として、教員の主体的なFDの取り組みを通じて、新たに必要となった授業を専門性を基盤としながら展開できるように、活用可能なノウハウの蓄積と常時の支援体制の整備を行うことが必要であることを強調されていた。

阿部氏（北海道医療大学・北海道大学）

医療の知識を市民に啓蒙する場となるメディカルカフェというイベントを企画・実践することを授業で行っている実践例の報告がなされた。

授業の履修者は、いわばメディカルカフェというイベントをする会社の構成員として活動することになる。メディカルカフェは、札幌駅の書店内のイベントスペースにて特別講師を招いて行われている。講師との事前打ち合わせ、集客を図るため告知方法の検討、ポスター等の制作、当日の司会進行のための話し方の特訓など、すべてに学生が関わっていく。活動全体を通じて、社会人として必要なスキルが身に着くとともに、時間の流れのセンスが身に着くと話されていた。

授業のシナリオをしっかり作ることに労力をかけているとコメントされていた。

グループの活動をどう仕掛け、どう評価していくかという質問に対しては、グループの中で仕事をせざるを得ない状況をつくり、成績評価項目については、双方向コミュニケーションなど評価項目を具体的に並べておき、学生は報告文を作成して、そこには他人評価もすることとなっていると回答されていた。

このような授業を履修するにあたって、一定の基礎学力が必要となるのでは？との質問に対しては、解剖学という科目を導入教育として参画型で行っており、基本的な知識も参画型の授業で定着させていくようにしていると回答されていた。

シンポジウムの議論では、学生の主体性に併せて、教員の主体性が必要であることにも触れられていた。学生が社会に出ていく前の最後の段階の教育機関の教育方法として、知りたいという気持ちを引き受ける工夫がなされれば、学生主体型の授業が知識教育型へ応用可能であることも確認されていた。

シンポジウムⅠ：「実践的な教養教育を求めて」－4人からの報告

県立広島大学 木本尚美「共通教育学部長全国調査の概略」

(1) 属性

全国大学 248 大学/340 学部（回収率 16.3%）、私立 68.1%

学部 文系 47.6%、理工系 40.0%、その他 12.4%

(2) 想定する大学類型

高度専門職業人育成 33.2 幅広い職業人養成 33.8 総合的教養教育 11.5

世界的研究教育拠点 8.8 特定の専門分野の教育・研究 7.4 社会貢献機能 4.7

地域の生涯学習機会の拠点 0.6

(3) 共通教育の現状

89.7%が共通教育を全学的に実施

◎キャリア教育：56.0%が全学

49.8%が大学改善の発信源として「共通教育実施箇所」を掲げている

65.5%がなんらかの問題点あり

専門教育との連携不足、共通教育に対する全学理解の不足

53.8%が「コミュニケーション教育」、42.6%が「キャリア教育」を「今後強化すべき」。

(4) まとめ

1. 学士課程教育の目標が多様化している
2. 共通教育の実施組織の機能不全
3. 人間形成から学生支援型教育へ、変貌
4. 教育改革の2面性-活性化と疲弊
5. 学習成果の質保証 専門教育と共通教育

山口大学 吉田香奈「共通教育実施組織代表者全国調査の概略」

(1) 教養教育の現状

教養教育の増加：「初年次教育」、「日本語教育」、「情報教育」

内容の特徴：社会人基礎力重視の大学が多い→人格形成重視

大学生活への適応科目

キャリア教育 66%

目標達成高い：保健体育、情報教育、専門基礎

目標達成低い：第二外国語

(2) 運営上の問題点（増加トップ2）

教員の負担の偏り 49%、全学的な調整・連絡が難しい 61.4%

(3) 担当者数・担当コマ数の変化・将来予想

経費：変化なし、専任教員数：変化なし→増加 22.2%、コマ数：増加 36.7%

非常勤：増加した→減少 35%

開講科目数：変化なし、やや減少

(4) 自由記述

学生の自己管理能力の低下、

教養教育を卒業時までできないか、

リメディアル教育・スキル教育のできる担当者の不足

恵泉女学園大学「教養教育としての生活園芸」

食と農と環境を結ぶことのできない学生（身近な野菜がわからない）→「生活園芸Ⅰ」

ジャガイモの「植え付け」、キュウリ、サツマイモ、ムギワラギク、サトイモなど、1年間で約10品目を栽培「畑から食卓まで」：「私が育てた最初のいのち」を実感させる

農学部ではない、一般教養の中での実施：グループ、SAの採用、長靴・麦わら帽子・ベルトポシェットを貸し出す、など準備が重要

収量調査も実施。秋学期は除草から。ハクサイ、ダイコン（50cm、約3kg（新生児の大きさ））、ホウレンソウ

店頭には出ない野菜を使った食事を作った。

授業目標

- ① 過程の重視
- ② 五感を働かせる
- ③ 多様性・共生の実感
- ④ 循環の理解（地域資源の活用、腐葉土作り、お礼肥え）

「生活園芸」の成果

豊かな人間性の涵養

共生の理解

食育セミナー

中村学園大学短期大学部「キャリア教育への学科の組織的取組」

「自分の職業を選択し、自立した社会人として学ぶために目的を設定し、学ぶ姿勢を生涯持ち続けさせるためのプロセス」と定義。

Q&A

To 中村学園：全学的なカリキュラムとするための組織は？

A：キャリア開発学科の中では、確立しているが、専門性が全く違うので、全学的な組織運営はできていない。

To: 県立広島：共通科目だけで Diploma Policy を作るべきかどうか

A：理念は「豊かな人間形成」と抽象的な言い方ではできているが、Diploma Policy が無いと、どのような成果を求めるのが明確化できない。ただ、大学により個性が異なるので、一元化できない。

To: 各大学の資源を有効利用して、教養教育に多様性を持たせても良いのではないか

A：ある学科にとっては専門教育でも、他学科にとっては教養科目になりうる。

シンポジウムⅡ：「学生支援で学生はどのように変容しうるのであるかーボランティア活動支援からー」

シンポジスト：

平尾清（山形大学エンロールメント・マネージメント部教授）及び学生

兵藤智佳（早稲田大学平山郁夫ボランティアセンター）及び学生

司会者：沖清豪（早稲田大学）

シンポジウム後半「課題研究「現代における学生支援の課題と展望」の基本的な考え方と今後の進め方について」

司会者：川島啓二（国立教育政策研究所）

平尾氏（山形大学）

山形スマイルエンジンという名称のボランティア活動についての報告がなされた。日帰りバスで東北大震災の被災地へのボランティアへ出向くという取り組みで、延べ1000名以上が参加している。

これまでの授業では、why、how、whatの中で、whyの問いかけがあまりなかったのではないかと問題がなされていた。そして、社会の結びつきを感じる事がなかったとも思われ、山形スマイルエンジンのような取り組みが、不足していた学びを補うものとなる事が主張されていた。

兵藤氏（早稲田大学）

WAVOCという設立から10年が経つボランティア支援組織の活動の報告がなされた。活動した学生が制作した映像が紹介された。内容は、フィリピンの貧困と向き合うボランティア活動の経過をまとめたものであった。そのようなボランティア活動で得た経験を経て、福島3.5km圏内の高校の生徒の勉強合宿に関わった事例も報告されていた。

WAVOCの機能は、①他者、当事者と関わる場を形成するために、契約書を作成すること、ワークショップを実施すること、②学生同士または当事者も交えて、体験したことを言葉にするための場所を作ることである。非日常のボランティア体験を日常に戻す体験が重要で、そのことに挑戦していると兵藤氏は熱く語られていた。大きな規模ではできない活動であるとのことであった。強烈な体験をした後で、立ち上がれない場合があり、そのカウンセリングにエネルギーを注がれている様子が伝わった。

質疑

地域とのつながり深くなった時の大学の責任は？との質問に、大学間の連携の事例が報告された。

山形大学は、立命館大学と提携して山形スマイルエンジンを行ったこともある。両大学の役割分担などをマニュアル化して伝える方法が重要であるとのこと。研修方法のあり方 進化させていく必要があるとコメントされていた。

筑波技術大学は、20 大学と連携して、聴覚障害者支援の組織をネットワーク化して、教室内で、授業の際に携帯電話に文字を出すボランティア活動を震災以降に行っている。

非日常の体験をしなくても、日常の中に学ぶ材料はいろいろある？との質問に対しては、「日常の中では多くの学生は興味を持ってない。」とパネラーの学生が回答していた。

体験を科目にどう戻すか？との質問に対しては、必要だと感じる授業を選んで履修するようになり、知識が入りやすい状態になっていくとの学生の体験談が語られていた。

兵藤氏は、現在のボランティア支援の仕事に、セルフヘルプに 10 年関わっている経験が生きていると話されていて、体験を言葉にさせる能力を発揮されているようであった。ボランティア支援に関わるスタッフとして、マイノリティーサポートやセルフヘルプに関わる人材を大学内に受け入れることの可能性を示唆されていた。

次年度以降、アプローチの方法が明確となっていない「学生支援」をテーマとした議論を大学教育学会の課題研究集会を展開していくことを確認して終了した。

以上

学会等名称：大学 ICT 推進協議会 2011 年度年次大会
日 時：平成 23 年 12 月 8 日（木）10:00 ～ 17:20
場 所：福岡県福岡市博多区石城町 2-1 福岡国際会議場
主 催：大学 ICT 推進協議会
報告者名：小棹 理子

【概要】

「短大入学前に開始するキャリア教育としての情報教育」と題して発表した。

湘北短期大学では、「社会に本当に役立つ人材」を 2 年間で育成するために、早期から勉学の動機付けを行う入学事前授業を行ってきた。入学前の段階から、日本語の読み・書き・話す力、ならびに基本的なパソコンスキルなど社会で求められる力を理解させるため、体験重視の入学前単位科目を開講してきた。2011 年度 4 月入学生に対しては、社会人にとって必要とされる基礎学力を向上させることをめざして e-learning を課した。入学前教育の効果について言及するとともに、インターンシップ先企業の協力を得て、教育内容の振り返りも行っている。2012 年度には入学事前授業専用のテキストを完成させ、入学予定者ほぼ全数を対象として本科目を確立することをめざしている。

2010 年より受講生に対し社会人基礎力のアセスメントを実施しており、本報告ではその結果や、企業との連携から得られた評価を踏まえて 2012 年度入学生に対し実施する「コミュニケーションリテラシー」の内容を紹介した。

以上

学会等名称：日本教育工学会 研究会 「地域連携と教育・学習環境／一般」

日 時：平成 23 年 12 月 17 日（土）10:00 ～ 17:20

場 所：香川県高松市林町 2217-20 香川大学 林町キャンパス

主 催：日本教育工学会

報告者名：小棹 理子

【概要】

「入学前教育から開始するキャリア教育の評価の試み」と題して発表を行った。概要は以下の通りであった。

学生の就労意識や勉学意欲の低下などの問題を解決する一助として短大型の入学前教育を構築中である。入学前教育科目である「コミュニケーションリテラシー」の授業は、短期大学卒業時に、職業をもった社会人に必要な能力として早期から育成すべき内容を盛り込んで 15 講を構成している。より具体的には、「コミュニケーション力」を「読・書・話・パソコン」により他人と力を合わせて仕事をする力、と定義し、この力を育成するために、日本語力やパソコンスキルの基本を確認したのちに、グループごとに問題設定して解決にあたり、その結果をプレゼンテーションするグループワークを主体としている。その効果を確認するために社会人キャリア力育成検定による自己評価と客観評価を導入してきたが、今回はあらたに、インターンシップ受け入れ企業からの評価の導入を試みた。その結果を発表した。

フロアからは、あらたな視点での評価が興味深い、学業成績のみでの評価では確かに不足である、との肯定的な意見が得られた。

以上

学会等名称：第 17 回 FD フォーラム

日 時：平成 24 年 3 月 4 日（土）13:00～17:00、3 月 5 日（日）10:00～15:30

場 所：京都産業大学 神山ホール（3/4）、11308 教室(3/5)

主 催：大学コンソーシアム京都

報告者名：内海太祐

【概要】

3/4: シンポジウム「企業が求める人材って、大学で育成しないとだめ？」

基調講演

1. 大学におけるキャリア支援・教育の現状と課題

児美川孝一郎（法政大学 キャリアデザイン学部 教授）

大学の大量化と雇用環境の悪化からキャリア教育は自発的に発生し、2008 年に義務付けられてきた。最初はハウツー的な内容から始まり、いろいろな試みにより進化してきた。しかし、振り返って考えるとキャリア教育は早期化、過熱化する就職活動の鎮静化には役立たず、むしろ煽っている。そして、労働市場へ適応することのみを支援し、企業に抵抗することを教えていない。また、キャリア教育は大学教育で行うべきことを圧迫しているのではないか。むしろ、今後は**専門教育の中にキャリア教育を埋め戻す**必要がある。今後労働市場が急激にグローバル化し、すべての人に椅子が無い状況でしたたかに多様な生き方を漕ぎ渡る能力が求められていくのではないか。

ただし、その「多様な生き方」の具体的なモデルは今のところあまりない。今の組織の中での生き方から考えると特異的な生き方をしている人の事例などを積み重ね、必要に応じて多様な生き方を支援する具体的なカリキュラムが出てくるかもしれない。

2. 魅力ある人で組織を埋め尽くすこと

深澤晶久（資生堂人事部人材開発室長・キャリアデザインセンター長・グローバル人材グループリーダー）

この報告は、企業の立場からの人材育成の一例である。資生堂は企業内大学「エコール資生堂」を作って人材育成をしている（2007）。「コンピテンシー・グロースモデル」に立脚している点が特徴的で、中・高時代を（創られる時期）、大学を（育てる時期）、企業を（活かす時期）として考えている点である。

分かりやすくはあるが、教育は創る・育てる・活かすは直線的なものではないだろう。深澤氏の話で印象に残ったのは、学生の強みは「コミュニケーション能力」だということだ。通常言われていることと逆である。学生は異世代との交流経験に欠けているだけで、むしろ今の若者はいろいろなコミュニケーションチャンネルを持っており、一定の経験を積ませれば急速に能力を開花させるものもいる、ということがその趣旨であった。

3. 大学におけるキャリア教育の実践

松高政（京都産業大学経営学部准教授キャリア教育研究開発センター運営委員）

これは大学の立場から、キャリア教育の先進的な例としてGPに選定されたコーオペ教育

（Co-operative Education）についての報告である。コーオペ教育とは1906年にアメリカで始まった企業と大学の連携教育である。インターンシップとの違いは大学との学習に関連する分野への就業体験を繰り返す試みである。専門知識をアカデミック領域で学ぶ期間、企業で学習する機関を繰り返す。

学生は大学での学びの重要性に気づき学習のモチベーションを上げ、企業でどのように知識や考え方が役に立つかチェックすることができる。これを卒業まで数回繰り返す、というものである。

但し、日本では海外で行われているような形式をそのまま踏襲するのは難しい。変形した形で実施している。

4. 指定討論

松本隆（ベネッセコーポレーション 大学事業部事業開発課課長）

受験産業の大手であるベネッセの話である。彼らが**高校や保護者が大学を入試難易度や就職率でしか見ていないこと**に対していらだっているという。受験産業を外部から見ていると、旧来の価値観を煽っていると感じていたが、受験産業内部の方々の考え方は違うのか、それともこのメッセージが松本氏個人の意見なのかはわからない。

大学のキャリア教育の内容（単に就職力という意味ではなく、PBLなど）の正規科目化などを評価しようと考えている点で新鮮だった。将来「〇〇大学にはPBL科目はあるか?」、「〇〇大学にはインターンシップはあるか?」という視点で高校生が大学を評価する時代が来るというメッセージを出していた。

現在それを阻んでいるのは、**高校教員や保護者が自分たちの時代のキャリアモデルで大学を評価している**からであるが、そのモデルが当てはまらないということはこれから明らかになっていく。だから、リベラルアーツやキャリア教育で大学が評価される時代が来るという論法であった。

3/5: 第1分科会「高大連携のあり方を問い直す」

1. 「草の根高大連携」のすすめ

内村浩 京都工芸繊維大学 アドミッションセンター教授

内村先生は高校の先生から大学に入り、PISAの国内専門委員やTIMSS査察委員等の任に就かれている。大学コンソーシアム京都の高大連携教育フォーラムの中心メンバーの一人でもある。大学に入って高校の学び（Teaching）と大学の学び（Learning）が接続されておらず、入学直後からドロップアウト傾向がみられる学生がいることに気づき、それを実証的に示してきた。

社会で求められる能力はいわゆる社会人基礎力（キー・コンピテンシーと呼んでいた）であるが、高校では大学を入試難易度と就職率でしか見ていない。高大でキー・コンピテンシーを培うのだという共通の

学習観を醸成する必要がある。高大連携の目的は出前授業・模擬授業などではなく、高校と大学の教員同士の交流である。それを「草の根の高大連携」とよび、(1) 教員中心の交流 (2) 双方向性 (3) 対等 (4) 自主的活動という4つの原則で**高大の教員が個人的に密接につながる必要がある**と訴えていた。

どうしたら高大の教員が密接につながれるかという質問があったが、「結局はあらゆる機会を捉えて地道に継続して人脈を作るということに限る」ということを強調されていた。具体的には、簡単なことだが高大連携のある会合から「先生」を「さん」に変え、「先生」と呼んだら罰金、というようなことをやったらその後連携が一気にスムーズになったという話をしていたのが印象的だった。

2. 「高大の教員が連携して教皇の科目を付け持つ高大連携」

京都学園大学 バイオ環境学部 坂本文夫

坂本先生は企業から大学に移られた先生である。これは内村先生の基調講演を受けての事例報告である。高校1年生の科目を高校の先生と大学の先生で協働して作り、実施した結果を示していた。目的は理科離れ防止である。この結果、例年30%~45%であった**理系進学者が60%に達した**という報告である。

この授業がうまく行った背景には(1) 同法人内の高校と連携していること (2) 特進クラスに対して実施していることがあるようである。ただし、同法人内の大学にほとんど進学していないため、担当者である教員のモチベーション維持が課題であるようだ。

3. 入学前教育を含む継続的な高大連携

酒井正三郎 中央大学商学部 教授

商学部長を経験している先生で、その立場からFDフォーラムに参加されている。これも1つの事例報告という位置づけである。中央大学での高校生対象のアカウンタントプログラムについて説明された。ただし、受講者は日商PC検定1級合格者(全国の高校生の取得者40名)を対象ということで、一種の英才教育的扱いである。それ以外の試みとして挙げられていたのが**プレスチューデント・プログラム(PS)**である。これは推薦、特別入試による合格者を対象とし、レポート作成、英文課題などを課し、それを添削するというものである。この結果、推薦、特別入試による学生の**GPAは一般入試学生よりも高くなる**傾向が見られたようである。(最初の1、2年次)

課題としては(1) 添削は外部業者(予備校)に外注するが、大学教員がチェックするため教員の負荷はかなり高い。(2) 一人当たり1万円以上の金額がかかるものであり、アカウンタビリティを求められる。(3) 任意受講であり、受講率は6-7割である。受講率の向上を図る必要がある。

4. eラーニングを介した双方向型高大連携

千歳科学技術大学 総合光科学部 今井順一教授

今井先生については2年前に千歳科学技術大学に伺い直接話をしたので、新しい内容はほとんどない。高大連携校はどんどん増えて現在39校になり、40校になるのも時間はかからないそうである。このプロジェクトがうまく行っているのは今井先生が高校出身であること、北海道という土地が特殊性であることにも起因している。小中高校と自治体がそれぞれ自分たちの存立基盤を守るべくニーズを共有して必死に結びついており、目的の共有化もできている。その点で、本来的な高大連携ができている。素晴らしい取り組みだが、これをいろいろなところで適用可能にするにはもっといろいろな工夫が必要である。

【GPとの関連性】

全体を通じてわかることは、「若者を育てるのは社会全体である」という当然の主張である。したがって、各教育機関が産業界と連携するのは当然であり、現在キャリア教育の重点はこの部分に置かれている。一方で教育機関間の連携も重要となる。高大連携はこの一つに位置する。

社会人基礎力を身に付けた若者を育てるには大学だけでは不十分で、今後高校でも社会人基礎力を育てるという方針を共有しなければならない。この点では本学の GP の方向性は正しい。もちろん、一部の教員の取り組みではなく、大学全体でこの方向性で教育を行うということを明確に打ち出す必要はある。

高大連携を実質化するには、大学教員と高校教員とのより深い交流は必須となる。そのための場を作り出すなどの方策は今後大変重要になるが、決まった手続きは今のところない。地道で継続的に交流していく必要がある。

【その他知見等】

現在の学生が置かれている立場は、教育する立場にいる側が教育される側にいた時の立場とはまったく違うことを認識する必要があるが、どうしても教員も過去の経験で学生を評価する。教員の経験は一例として確かに有効な部分もあるが、教員の経験自体もチェックをされてはいない。したがって、社会全体で学生を育てる仕組みを包括的に作っていく必要がある。産学連携や高大連携はこの枠組みの1つだが、この枠組みに沿って考えると他にもやれることはありそうだ。震災ボランティアを単位化するなどという話もこの枠組みの1つかもしれない。

また、現在の大学入試制度は社会人基礎力を要請するには大きな障害であることが再確認された。社会人基礎力を大学だけで学ぶには無理がある。高校以下でも育成すべき能力であるにもかかわらず、より良い将来のためにはより入試偏差値の高い大学に入る必要があると信じられている状況では社会人基礎力を要請する教育など邪魔でしかない。総合学習の失敗はそこに起因する。

以上

学会等名称：平成 23 年度 FD のための情報技術講習会

日 時：平成 24 年 3 月 1 日（木）10:00～17:00 — 3 月 2 日（金）9:30～17:00

場 所：大阪経済大学 大隅キャンパス
〒564-8680 大阪府東淀川区

主 催：（公社）私立大学情報教育協会 FD 情報技術講習会運営委員会

報告者名：小棹 理子

【概要】

講習会では、教員の教育力向上の推進を目的として、授業における情報通信技術活用力向上をめざした 3 コースが設けられていた。報告者は知識の理解と定着を効果的に促進するために、新たな視点に立ったビジュアルプレゼンテーション技法を習得するために「プレゼンテーションアドバンスドコース」を受講した。

[1 日目-3 月 1 日]

内容としては下記のとおりであった。

共通講義：「情報通信技術を活用した授業のあり方」

- 1 情報通信技術を活用した授業を考える（上智大学 田宮 徹氏）
- 2 授業事例 1「メディア・情報を活用した動機づけ・複眼的思考を養う授業（京産大 佐々木 利廣氏）
- 3 授業事例 2「なぜ立正大学経済学部はクリッカーを選んだのか」（立正大 副学長今井賢氏）
- 4 授業事例 3「個々の学びと向き合うための Web Reflection Paper(WRP)の活用（常盤大 北根精美氏）
- 5 授業事例 4「医系総合大学における電子ポートフォリオシステムの活用と教育改善」（昭和大歯学部 片岡 竜太氏）

コース講義：各種プレゼンテーションメソッドの紹介

- 1.1 ソフトウェアの紹介（白板ソフト、Camtasia Studio、ZoomIt、MouseShade2、など）
- 1.2 プレゼンテーションに関する知見（3点・10分ルール、黙読速度のほうが耳からの情報処理速度より早いので、スライドの文字を読むと混乱を生じる）
- 1.3 その他：ガニエのプランニングシートの活用の推薦
- 1.4 メソッドの紹介
 - 1.4.1 高橋メソッド（教材あり）
 - 1.4.2 もんたメソッド（教材あり）
 - 1.4.3 非線形メソッド（教材あり—概念の関連が明確になる）

コース実習：自分の資料を各種プレゼンテーションメソッドでアレンジ
もんたメソッドを中心に、実習を行った

[2日目-3月2日]

コース講義と実習

到達目標：動的な教材作成技術の習得

コース実習：ビジュアル中心（Zenメソッド）に沿ったプレゼンテーション資料を作成した

コース実習：Preziを用いたプレゼンテーション

Preziの概要と操作方法の講義のあと、スライド7枚からなるプレゼンテーション資料を作成した。（コミュニケーションリテラシーのガイダンス資料）

[3日目-3月3日]

コース講義と実習 日本教育工学会研究会発表のため、欠席

到達目標：プレゼンテーション資料を活用する

実習：プレゼンテーションの録画と公開・共有

実習：プレゼンテーションの電子書籍化

【GPとの関連性】

「コミュニケーションリテラシー」の授業方法・教材作成に役立てることができた。

「ガニエのレッスンプランニングシート」にしたがって、「学習者の注意を喚起する」、「新しい事項を提示する」方法（もんたメソッドとZenメソッドを導入）を実践することによって、本方法の理解を深めることができた。

【その他知見等】

他の大学の授業の様子が見えて参考になった。とくに、共通講義：「なぜ立正大学経済学部は、クリッカーを選んだのか」は、単なる知識確認のためだけではなく、受講登録のツールとして使える、という点が勉強になった。

Sites（画像やコンテンツの入手サイトなど）や著作権の範囲の講義もあり、たいへん有意義であった。

以上

学会等名称：日本教育工学会研究会

日 時：平成 24 年 3 月 3 日（土）9:55 ～ 16:45

場 所：山口大学・吉田キャンパス（教育学部講義棟）

主 催：日本教育工学会

報告者名：野口 周一

【概要】

数多い報告のうち、私は「Voicing Board を活用した『ごんぎつね』の心情と情景の読みに関する研究」を取り上げる。

本研究の目的は、『ごんぎつね』の第6場面をVBで視覚化し、その情景にいたる登場人物の視点を児童が獲得することによる児童の情景および心理理解と、VBによる視覚化の効果との関連を明らかにするものであった。

その結果、以下の4点を明らかにした。

- ① 語り手の視点にないアクターの有無が心情理解に大きな影響を与える。
- ② 情景が明確でないと心情が理解しにくい。
- ③ 栗などの静物の意味理解は交流が有効である。
- ④ マンガ2回目は、作成したマンガだけで心情を読み取ろうとすることがある。

本研究報告者は、これらの諸点をもとに授業を再考したのであった。

【GP との関連性】

「大学教育・学生支援推進事業〔テーマA〕大学教育推進プログラム」として選定された「現代型社会人育成を俯瞰する入学前教育構築」を念頭において本研究会に参加した。

私は本学保育学科教授として、1年生前期科目「教育方法論」における「授業論」のあり方として、『ごんぎつね』を用いた授業例を取り上げている。その関連で本報告に関心を有した次第である。

私が取り上げている授業例は、先生の「ごんの気持ちがわかる場所を探していきましょう。ごんになりきってね」という発問にはじまり、子どもたちは一斉に教科書に向い、線を引き始める。そしてストーリーが展開していく過程において、ごんの気持ちの変化を読み取ることが目標となる。子どもたちは、ごんの気持ちがわかる部分を見つけ、教科書に書き込む。例えば、「これはしまった」というごんの台詞に線を引き、横に「やっと思いごとだとわかった」という具合である。先生は席を回って、一人ひとりの書き込みに赤ペンで二重丸や花まるをつけていく。それは「よく読みとれた子だけでなく、自分なりに力を発揮できた子、成長したと感じる子に花まるをつける」という考えによる。次は、「音読をする人？」と先生が尋ね、ごんと兵十、ナレーター役の3人が役になりきり、即席の朗読劇が始まる。兵十の家に向かう時と帰る時の足取りの違いが浮き彫りになる。そこで先生は「行く時と帰る時、大分表情が違ったよね。何でだろう？」と発問するのであるが、その時先生は子ども全員を黒板前のスペースに集め座らせるのである。固まって座ると、近くの子と相談しやすく、また集中できるのである。その学びを通して、子どもたちに「友だちの意見を聞くことで、自分の考えが呼び起こされ、話し合いの面白さがわかる」ことを体得させるのである。

保育学科の学生は、入学すると夏休みに保育ボランティアがあり、やがて後期末の保育所実習へと向かっていく。そこで絵本の読み聞かせ等があるわけであるが、絵本をただ読めばいいわけではない。小学校の授業のあり方さえ、いろいろな工夫がなされているわけであり、それを知ることにより学生たちの心構えもでき、読み聞かせ等の工夫にも取り組んでいけるのである。

【その他知見等】

研究会での報告はVBを活用したマンガの作成を行なうものであり、私が紹介している授業例は情景を自ら描くことにより、ごんの気持ちにより近づくことを目指したものである。VBは簡単な操作によっ

てマンガを描写できる（このシステムはFlashによるネットワークアプリケーション）のであるが、報告者が「マンガがテキストと分離しマンガから心情を読み取ることをしないようにする」という注意点をあげている。そこにその限界が示されているとも考えられ、子どもたちが情景を自ら描くことも捨て難い手法であることがわかる。

以上

学会等名称：日本教育工学会研究会

日 時：平成24年3月3日（土）9:55 ～ 16:45

場 所：山口大学・吉田キャンパス（教育学部講義棟）

主 催：日本教育工学会

報告者名：小棹 理子

【概要】

「短大入学事前授業のキャリア教育としての効果」と題して発表を行った。

短大の入学前に開講する単位科目である「コミュニケーションリテラシー」の授業は、職業をもった社会人に必要な能力として早期から育成すべき内容を盛り込んで15講を構成している。「コミュニケーション力」を「読・書・話・パソコン」により他人と力を合わせて仕事をする力、と定義し、この力を育成するために、グループワークにより問題の解決に取組み、その結果をプレゼンテーションする。授業の効果を確認するために社会人キャリア力育成アセスメントを授業受講前の2月と、受講後の4月に実施し、その差分により成長の度合いを測った。3年間にわたり実施した結果を報告した。

日 時： 平成 23 年 12 月 1 日(木) 16:30~18:10

会 場： 湘北短期大学 6 号館 611 教室

講 師： 渡辺 克己氏 (俳優、ナレーター)

主な仕事：

News Zero などのナレーション

Docomo、花王ビオレ、日立掃除機、日産 CM ナレーション

モンスターズインクなど映画の吹き替え

テ ー マ： 「アートとしてのコミュニケーション」

身体を使って表現する

言葉で表現する

言葉で表現したものの奥にあるものが伝わるコミュニケーション

参 加 者： 学内 学生含め 100 名

<内容>

「アートとしてのコミュニケーション」と題して開催された俳優・ナレーターとしてテレビ CM やドキュメンタリー番組で活躍中の渡辺克己さんの特別講義は、ビデオや実演がふんだんに盛り込まれ、とても印象深く、90 分がとても短く感じられた。

事実を客観的に伝えるアナウンサーとは異なり、情報を受け取る側にさらなるリアクションを起こさせるためには、「情報の伝え手」が、音声のみで雰囲気や表情を演出しなければならないとのこと。明暗や喜怒哀楽など、実演をとおして違いが明確に示され、たいへん勉強になった。

学生の感想にも「説得力があった」、「自分の思いを託した話し方をしたい」、「自分の生き方も含め考えさせられた」、「言葉の力を実感した」、など、有意義な講義に対する賞賛が多く寄せられた。

<感想> (抜粋)

・相手に伝える、コミュニケーションを取るということは話し方だけでなく聞き方も重要だと気付きました。最後の“自分の発した声は自分も聞いている”というお話はとても参考になりました。本日は本当にありがとうございました。

・人に伝えたりするのは一方的ではなく、相手の事を思って伝える。とても素晴らしい時間でした。ありがとうございました。

・言葉は自分の気持ちを伝える時に、良く使うものですが、表現一つで良くも悪くもなると今日改めて自感しました。これからも人と話す機会は多くあるので、言葉の表現方法に気を使って、明るく前向きな生き方が出来る自分でいたいです。本日はありがとうございました。

・声の大きさ、言葉の出し方、手 (ジェスチャー) の方向で、相手の捉え方が違うので、日ごろから気を付けたいと思いました。今日はお忙しい中ありがとうございました。

・ポジティブな言葉を人に向けて発信するように心がけたいです。出来る、出来ないでなく、まず何でもやってみたいと思います！

・これからはポジティブな発言をなるべくしたいと思いました。とても参考になる、お話を聞けて楽しかったです。ありがとうございました。

・相手に伝わるように話す事って大切なんだなと思いました。渡辺さんはとっても落ち着いた声をしていて、聞いていてもちがよかったです。話す時はワンクッションおいて話そうと思いました。

・色々と勉強になったことはあったけど、最後に何気なくおっしゃっていた「素直な観点で見る」ということを目標としたいと思いました。

・今回お話ししていただいた中で、日常会話で思い当たることがあったので、自分を見つめ直してみようと思いました。

・コミュニケーションは日常から大切にしようと思いました。たった一言で、相手を傷つけたり、喜ばせたり...という言葉の大切さを再確認することが出来て良かったです。コミュニケーションとは、自分が相手をどう思っているか、などが反映されるものなので、自分自身の行動を見直すべきだと思いました。

・自信がなかったので、とても前向きな気持ちになりました。とてもためになりました。

・相手に話すことは自分自身の気持ちを伝える手段として、話し方で相手の受け取り方も変わることがボールを使ったり、手を使ったり身体を使うことで感じることができました。学生さんたちの様子が知れてよかったです。

【風景】（写真は平成 22 年度のもの）



4.5 コミュニケーションリテラシー実施報告

4.5.1 コミュニケーションリテラシー実施状況と授業内容

今年度は、受講対象者を推薦選抜〔公募制・指定校制〕、AO（湘北 SE）選抜Ⅰ期・Ⅱ期合格者に拡大したため、受講希望者が増加した。これに伴い、4日程に分けて実施することにした。

下記2月に実施するA、B日程を高大連携校出身者約200名、3月に実施するC、D日程を高大連携校以外からの入学予定者とした。A、B日程に関しては、事前に高大連携校にアンケートをとって実施日を決定した。

A 日程:	2月9日、10日、13日、14日	105名
B 日程:	2月10日、13日、15日、16日	108名
C 日程:	3月21日、22日、23日、24日	92名
D 日程:	3月22日、23日、26日、27日	94名
合計		399名

各日程の参加校と受講者数を表4.5-1示す。高大連携校主体で日程を組んだ。連携校は〔連〕と記してある。

表 4.5-1 H23年度コミュニケーションリテラシー A、B日程参加校と受講生数

A 日程	高校名	対象者 数	受講者 数	*	B 日程	高校名	対象者 数	受講者 数	*
1	茅ヶ崎	3	3	連	1	瀬谷	1	1	連
2	厚木東	10	10	連	2	舞岡	3	3	連
3	厚木商業	15	15	連	3	高浜	9	9	連
4	伊志田	7	7	連	4	相原	4	4	連
5	伊勢原	6	6	連	5	座間	3	3	連
6	中央農業	2	2	連	6	山北	3	3	連
7	綾瀬	8	8	連	7	足柄	10	10	連
8	厚木北	15	15	連	8	二宮	4	4	連
9	海老名	4	3	連	9	有馬	11	10	連
10	愛川	7	5	連	10	厚木清南	9	9	連
11	厚木西	14	14	連	11	小田原総合ビジネス	6	6	連
12	西湘	6	6		12	秦野総合	16	15	連
13	寒川	7	6		13	平塚湘風	6	6	連
14	大和東	7	5		14	藤沢清流	6	6	連
					15	秦野曾屋	15	14	
					16	旭丘	6	4	
					17	上溝	1	1	
	合計	111	105			合計	113	108	

*連: 高大連携校

受講生の入学後の学科内訳は次のとおりである。C、D日程は予定数（2月6日現在で、増える可能性あり）である。A、B日程の全体人数は昨年並みであるが、昨年と比較すると、情報メディアの割合が6%増え、総合ビジネスの割合がその分減少した。その結果として、各学科の受講割合が1/4に近づくことになった。

学科	日程別					全入学 予定者数	受講率
	A	B	C	D	合計		
情報メディア	16	22	16	18	72	95	75.8%
総合ビジネス	34	36	23	23	116	130	89.2%
生活プロデュース	23	20	22	35	100	117	85.5%
保 育	32	31	29	15	107	132	81.1%

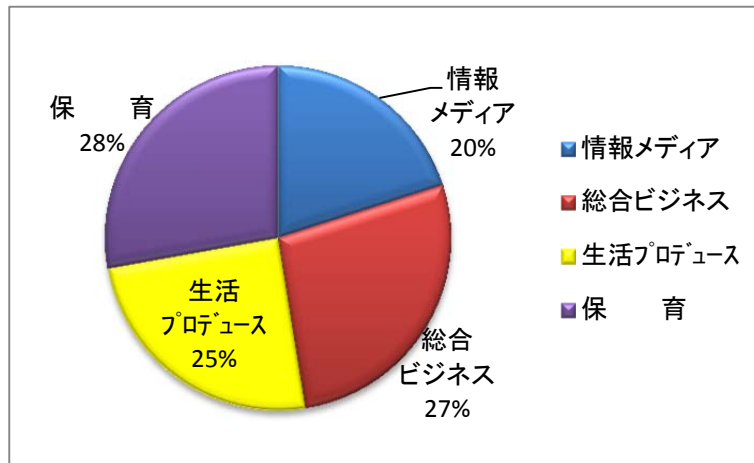


図 4.5-1 学科別受講生内訳

A、B 日程共に同じ内容を表 4.5-2 のスケジュールで実施した。昨年度同様、初日の第 2-3 講に「ナンバーバルコミュニケーション」を導入している。C、D 日程は一昨年どおり「メモの取り方・アイデアの出し方」で構成した。シラバスは、次節の表 4.5-3 のとおりである。本科目受講生は所定の要件を満たせば、入学後に 2 単位が認定され、リベラルアーツ科目群の単位となる。また、昨年同様、初日と 4 月入学後に「社会人キャリアカアセスメント」を実施する。

なお、担当教職員、TA/SA は下記のとおりである。

特別講師： 樋口 健夫・渡辺 克己、

専任講師： 伊藤 善隆・小棹 理子・高橋 可奈子

非常勤講師：三笠 俊哉、黒川 桃子・津島 知明・田邊 菜穂子

TA：西 祥、岡崎 啓佑、芦 雄大、滝口 敏行、松崎 岳、石井 卓也、加賀谷 拓

SA：岡野亜里沙、小山かおり、間原詩織、神保飛鳥、伊礼ありさ、芦川美都、川村愛美、川本優希、清水伊沙、清水もも子、工藤千明、内藤憲人、中島美乃里、松井裕香（以上 湘北短期大学 2 年生）

さらに、今年度は新たに Moodle 上に独自の e-ラーニングシステムを構築したので、2 月、3 月の授業終了後、4 月の新学期開始（A、B 日程は 4 月 14 日(土)、C、D 日程は 4 月 21 日(土)）までの間に Web での課題を課している。内容の詳細は、4.2 に掲載している。

昨年と異なり、今年度は USB を配布せずに、USB メモリを使用せずに、Moodle 上のファイル保存領域である[マイプライベートファイル]を利用するようになっている。

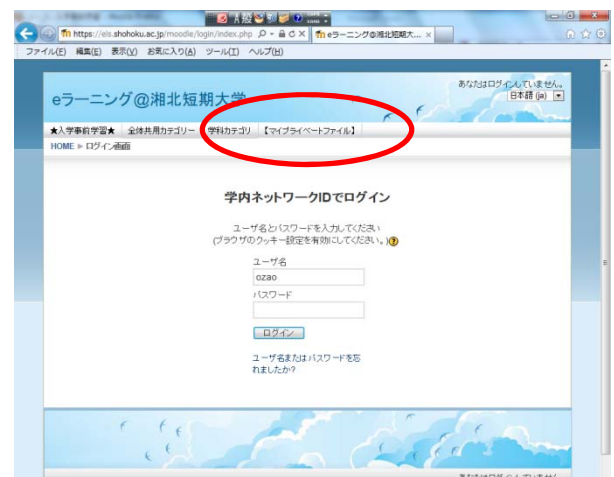


図 4.5-2 Moodle 上のファイル保存領域

表 4.5-2 授業スケジュール

A	B	内容	C	D	内容
2月9日 (木)	2月10日 (金)	【ガイダンス】 【検定】 【昼食】 【ノンバーバルコミュニケーション】 【コミュニケーションとことばの力】	3月21日 (水)	3月22日 (木)	【ガイダンス】 【検定】 【昼食】 【メモの取り方】 【メモの取り方・アイデアの出し方】
2月10日 (金)	2月13日 (月)	【コミュニケーションの基本—話す技術】 【昼食】 【コミュニケーションの基本—書く技術】 【図書館の活用と検索】	3月22日 (木)	3月22日 (木)	【コミュニケーションの基本—話す技術】 【昼食】 【コミュニケーションの基本—書く技術】 【図書館の活用と検索】
2月13日 (月)	2月14日 (火)	【問題の発見】 【昼食】 【問題の発見—MS-Office群の活用】 【情報の分析と問題解決① グループワーク】	3月23日 (金)	3月26日 (月)	【問題の発見】 【昼食】 【問題の発見—MS-Office群の活用】 【情報の分析と問題解決① グループワーク】
2月14日 (火)	2月15日 (水)	【情報の分析と問題解決② グループワーク】 【昼食】 【プレゼンテーション グループワーク】 【まとめと発表】	3月24日 (土)	3月27日 (火)	【情報の分析と問題解決② グループワーク】 【昼食】 【プレゼンテーション グループワーク】 【まとめと発表】
e-ラーニング 課題			e-ラーニング 課題		
4月14日 (土)		【まとめ】 【検定】	4月21日 (土)		【まとめ】 【検定】

今年度は、テキストを完成させ、丸善出版より「大学生のための基礎力養成ブック」として刊行した。大学・短大で学ぶ際に必要となるコミュニケーション力、情報検索力、パソコン力、プレゼンテーション力など、身に付けるべき知識・技能を具体的・実践的に解説した入学前・初年次教育用のテキストである。

全116ページB5版で、次の8章からなっている。

1. 大学で学ぶとは--なぜコミュニケーション力が必要か
2. 話す技術
3. 書く技術
4. 調べる技術
5. 問題の発見と解決
6. 問題の分析と整理のための MICROSOFT EXCEL
7. グラフの利用
8. プレゼンテーション



図 4.5-3 テキスト表紙

4.5.2 TA・SA会

開催日時：平成24年1月29日（木）
開催場所：湘北短期大学 128教室
司会進行：小棹理子、岩崎敏之、北野俊之（敬称略）
参加者：三笠俊哉（非常勤講師）、滝口 敏行、松崎 岳、西 祥、岡崎 啓佑、芦 雄大、
加賀谷 拡（以上TA）、岡野亜里沙、小山かおり、間原詩織、神保飛鳥、伊礼ありさ、
芦川美都、川村愛美、川本優希、清水伊沙、清水もも子、工藤千明、内藤憲人、中島美乃里、
松井裕香（以上SA）
書 記：赤羽さやか
配布資料：TA・SA 業務内容(規約)
TA・SA 勤務予定表
コミュニケーションリテラシー時間割
事務書類（謝金関係）

<内容>

・岩崎センター長、小棹よりコミュニケーションリテラシーの実施概要(実施意義)の説明があった。とくにSAは准教育者としての役割について説明を受けた。

- ① 出席票や、課題の回収・整理を行う
- ② 資料の配布・回収・整理を行う
- ③ 学生のパソコン操作や実施手順の質問に答える
- ④ 演習時間に席を巡回し、課題の進捗が遅れている学生を支援する
- ⑤ 授業課題以外の内職をしている学生を注意する
- ⑥ 教室移動やレストランへの誘導を行う
- ⑦ 授業以外の湘北ライフについての質問に答える

- ・時間割内容の流れ、変更部分の確認
- ・コミュニケーションリテラシーの流れの説明
- ・TAの仕事内容の確認
- ・メンバー（TA/SA）自己紹介
- ・質疑応答
- ・振込依頼書、交通費明細の記入・回収
- ・SAによるTAの校内案内

TA/SA 日誌のまとめはコミュニケーションリテラシーの報告にて記述する。

以上

4.5.3 TA・SA 報告

業務日誌として定型の用紙を準備し、①授業担当者、②準備など、③授業の内容、④質問とその対応、⑤気がついたことや申し送り事項、を毎日記載して提出してもらった。今年は、USBメモリを使用せずに、Moodle上のファイル保存領域である[マイプライベートファイル]を利用するようにしたため、保存方法の質問が増えたが、USBメモリの不具合等の問題は回避できた。

PC教室でのYドライブも、通常とは別に設け、昨年からの懸案となっていたYドライブ上でのフォルダ操作をわかりやすくした。さらに、TAは、ブレインライティングやプレゼンテーション構成を行う上でのファシリテーターとしての役割が重要で、質問内容や対処からは十分にその任を果たしていることがわかる。

昨年度までに明らかになっていた運営上の課題である受付の仕方や昼食時の混雑は、資料配布の方法や適切な SA の配置、教室での食券の頒布など、さまざまな工夫により解決された。

【質問】

3、4日目から質問が増えるのは昨年どおりである。各日の目立った事項を下記に示す。

1日目：キャリア力育成アセスメントに関する質問、2日目：湘北での生活について

3-4日目：パソコン・ソフトの操作。Moodle 上への保存の仕方。

項目ごとに以下にまとめるが、次年度は SA のサポートをさらに厚くしたい。

(1) PC 基本操作：

SA に対する質問： ログインができない（複数）、PC の起動方法、画面メッセージへの対応、ファイル操作ができない、大文字の打ち方がわからない、Moodle 上でのファイルの保存の仕方（複数）、キーボード(キーの位置)、 ユーザーアカウント制御のメッセージ表示、コンピュータの再起動（複数）、Y ドライブにフォルダがない、コピー、貼り付けの仕方、“～”の文字の入力の仕方

(2) MS-Excel 関連：

SA に対する質問： グラフの作成・編集の仕方について(複数件)、表の作り方、関数の使い方、表計算の方法、オート SUM ができない、グラフのラベルを系列の名前にするにはどうしたらいいの、数値が勝手に日付になってしまう（複数）、セルのコピーの仕方が分からない、グラフタイトルの入れ方（複数）、複合グラフが皆と同じようにできない、100%積み上げ棒グラフの作り方、3D グラフが回転している、データラベルが追加できない。

TA に対する質問： Excel の基本操作(2件)、オートフィル機能の使い方、移動操作のハンドル、Excel の関数入力(2件)、Excel の演習(2件)、複合グラフの軸ラベル作成方法、不連続のセル範囲の選択方法とグラフ作成、Excel 表の編集を張り付け後に行うには

(3) MS-PowerPoint 関連：

SA に対する質問： PPT 操作等、スライドの追加、文字の種類（大きさ・色など）、テキストボックスの使い方、画像の貼り方（複数）、Excel で作ったグラフや表を PPT に貼る方法（複数）、複数の PPT を一つにまとめる方法（複数）、スライドの背景を自分が持っているものにしたい、クリップアートの出し方、ネット上の画像検索、背景をグラデーションにするには、レベルの上げ下げ

TA に対する質問： 複数の PPT の合成法(複数)、Excel で作成したグラフの貼り付け、パワーポイントの操作(2件)、スライドへのエクセル表の貼り付け、スライドの枚数は5枚？

(4) 問題解決：

SA に対する質問： 湘北のキャンパスレストランや学生生活に関して、問題が分からない、テーマが決まらない（複数）、グラフの作り方がわからない、ブレインライティング(BW)での案の出し方

TA に対する質問： ブレインライティングのテーマとキーワード、BW に適したキーワードの決め方、問題(テーマ)が決まらない、テーマを出す手助け、ブレインライティングのやり方

(5) 授業方法： PPT の分担作業はできるのか、課題の提出方法は、入学後に関して、

【気がついた点や申し送り事項】

過去2年間での問題点を解決しての3年目であったため、大きなトラブルはほぼ解消されていた。昨年来、インフルエンザのため欠席する生徒があることが目立つ。以下は今年度寄せられた点である。

- お弁当を持参している人も食堂で食べなければいけないのだと思っている人がいたので6号館2階のスペースなどを案内した。（今年度は、キャンパスレストランが改修工事のため、とくにレストラン関係の質問が増えた）
- 保険申請の経路の書き方を聞かれることが多かった（徒歩や自転車通学などの場合）

なお、4日目終了後の受講生のアンケート集計結果は4.5.5に掲載してある。

4.5.4 コミュニケーションリテラシー授業の実施

表 4.5-3 に「コミュニケーションリテラシー」のシラバスを示す。入学後に2単位が認定される。次ページは授業風景である。4.5.5 には受講直後のアンケート結果を示した。

表 4.5-3 H24 年度コミュニケーションリテラシーシラバス

科目名 (英語名)	コミュニケーションリテラシー Communication Literacy		科目コード	(ふりがな) 担当者	(おざお りこ) 小 棹 理子 (いとう よしたか) 伊藤 善隆	専任・非常勤
			22LA50			専任
2 単位	開講期	前期	授業方法	講義/演習		
[履修条件、準備など] 1-12 回は、2~3 月の入学前に開講します。13-15 回は、e-ラーニングによる実施です。 10-12 回はグループ作業ですので、欠席しないこと。						
[授業の具体的到達目標] 第一の目標は、大学と高校の違いを理解し、入学後2年間での学習目標を明確にすることです。 第二の目標は、社会で必要とされるコミュニケーション力を理解し、発展させることです。						
[授業の概要] 大学や社会で必要とされる「コミュニケーション能力」をここでは、高校で学んだ知識をベースとした「 読・書・話・パソコン 」により、 他人とともに仕事をこなす力 、と定義します。 「読み・書き・話す」という日本語コミュニケーションや、「パソコン」という情報通信社会におけるコミュニケーションツールの基本を確認したのち、グループで問題を設定し、解決し、プレゼンテーションを行います。 また、大学生活を送る上で大切なこと（自学自習をする上でのアドバイス、マルチメディアの利用、オフィスアワー、等）についても、複数（2名以上）の担当者が丁寧に説明します。 なお、教室・履修者の状況によって内容の順序を変更することがあります。						
[授業計画]						
1 回	ガイダンス（社会人キャリア力とはーアセスメント）					
2 回	ノンバーバルコミュニケーションの重要性（特別講義）					
3 回	メモの取り方、アイデアの出し方（特別講義）					
4 回	コミュニケーションの基本ー話す技術					
5 回	コミュニケーションの基本ー書く技術					
6 回	インフォマティックス-図書館の利用とインターネット検索					
7 回	問題と問題解決の技法					
8 回	情報の分析と MS-Excel の活用-基本操作と表計算					
9 回	情報の分析とビジネスにおける MS-Excel の活用-グラフ化					
10 回	問題解決：発散技法（プレゼンテーション準備）					
11 回	問題解決：収束技法（プレゼンテーション準備）					
12 回	グループプレゼンテーション（最終発表）					
13 回	社会人に必要とされる日本語力と時事問題の知識（社会人キャリア力）					
14 回	社会人に必要とされる非言語能力（社会人キャリア力）					
15 回	まとめ（アセスメントの結果のフィードバック）					
試験等	試験は行いません					
[成績評価]	提出課題の点 20%+グループ評価点 20%+出席点 60%					
	書	名	著	者	出 版 社	
テキスト	大学生のための基礎力養成ブック		小棹理子・伊藤善隆・野村亜住・高橋可奈子		丸善出版株式会社	
参考文献	プレゼンテーション zen		Garr Reynolds、熊谷 小百合		ピアソン桐原	
[備考]	特別講師：樋口健夫、渡辺克己 上記以外の担当者：高橋可奈子、三笠俊哉、野村亜住 質問等はオフィスアワーを活用してください（小棹 研究室は1号館4F、伊藤研究室は、1号館3Fです）					

コミュニケーションリテラシー実施風景

平成24年2月9日から2月16日にかけて実施されたA、B日程の授業風景を次に示す。

平成23年度コミュニケーションリテラシー

1日目



ガイダンス



昼食



ノンバーバルコミュニケーション



コミュニケーションと言葉の力

2日目



「キャンパスレストランにあったらいいな」
を考える



発表



図書館の利用と検索

2日目 (続き)

コミュニケーションの基本



書く技術

作文の手順
連想・マップ法

話す技術

言葉の与える
印象は？



3・4日目

問題の発見 情報の分析と問題解決



グループワークで
問題解決！

Excel, BrainWriting,
PowerPoint



発表とまとめ

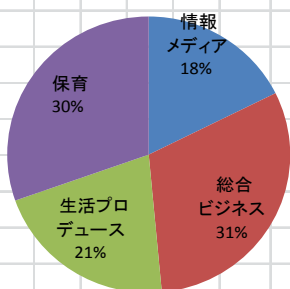
プレゼンテーション

4.5.5 コミュニケーションリテラシー受講生へのアンケート結果

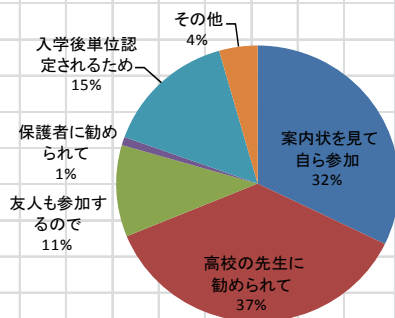
実施日時: A日程 平成24年2月 9日10日13日14日
 B日程 平成24年2月 10日13日15日16日
 C日程 平成24年3月21日22日23日24日
 D日程 平成24年3月22日23日26日27日

	A	B	C	D	合計
受講者数	105	108			213
回答者数	101	103			204

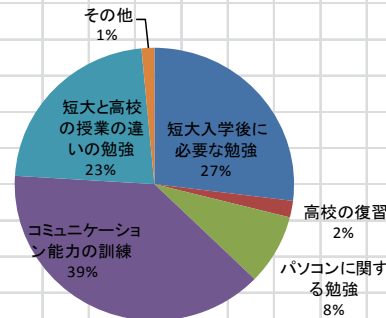
Q1.入学後の所属学科は?



Q2.今回この授業に参加したきっかけは?



Q3.参加前はどんな授業だと思っていた?

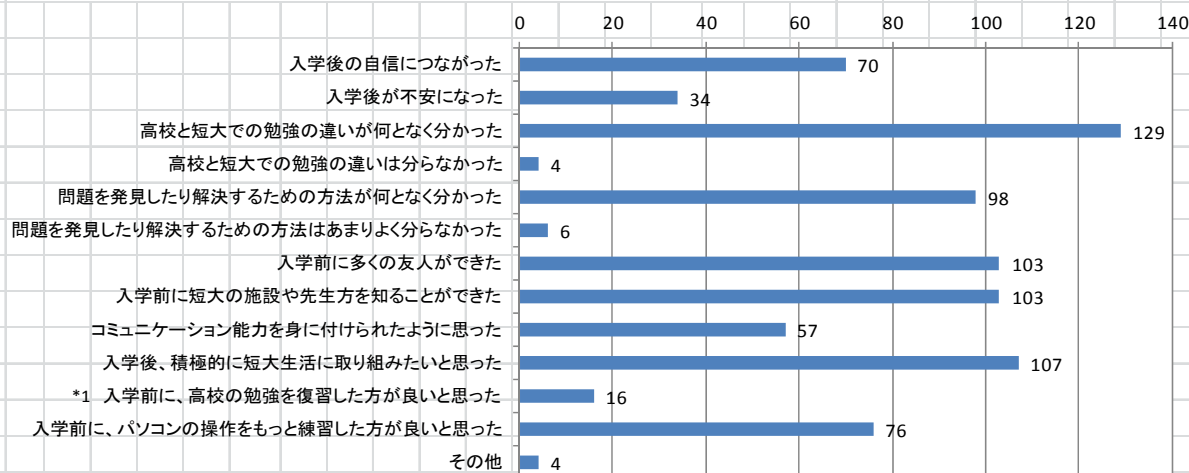


	単位:名
情報メディア学科	36
総合ビジネス学科	63
生活プロデュース学科	43
保育学科	62

	単位:名
案内状を見て自ら参加	66
高校の先生に勧められて	75
友人も参加するので	22
保護者に勧められて	2
入学後単位認定されるため	31
その他	9

	単位:名
短大入学後に必要な勉強	55
高校の復習	4
パソコンに関する勉強	17
コミュニケーション能力の訓練	79
短大と高校の授業の違いの勉強	46
その他	3

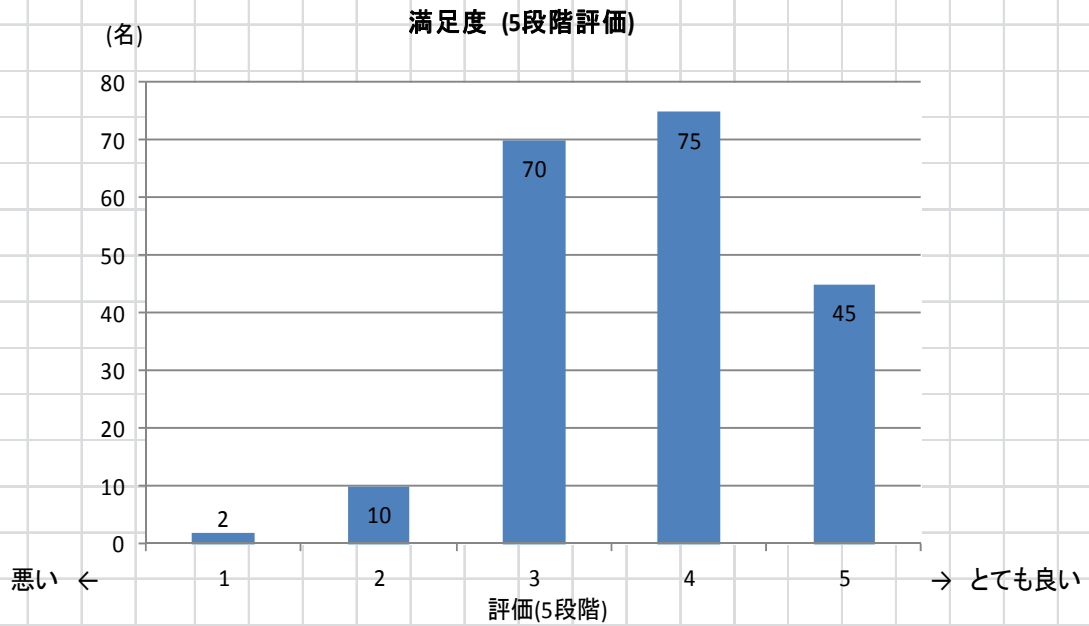
Q4.コミュニケーションリテラシーを修了した、今現在の気持ちを教えてください(複数回答可)



*1 科目は: A日程→ 数学 B日程→ 国語
 漢字 英語
 数学 国語、数学
 算数 歴史
 国・数・英 国語
 色々

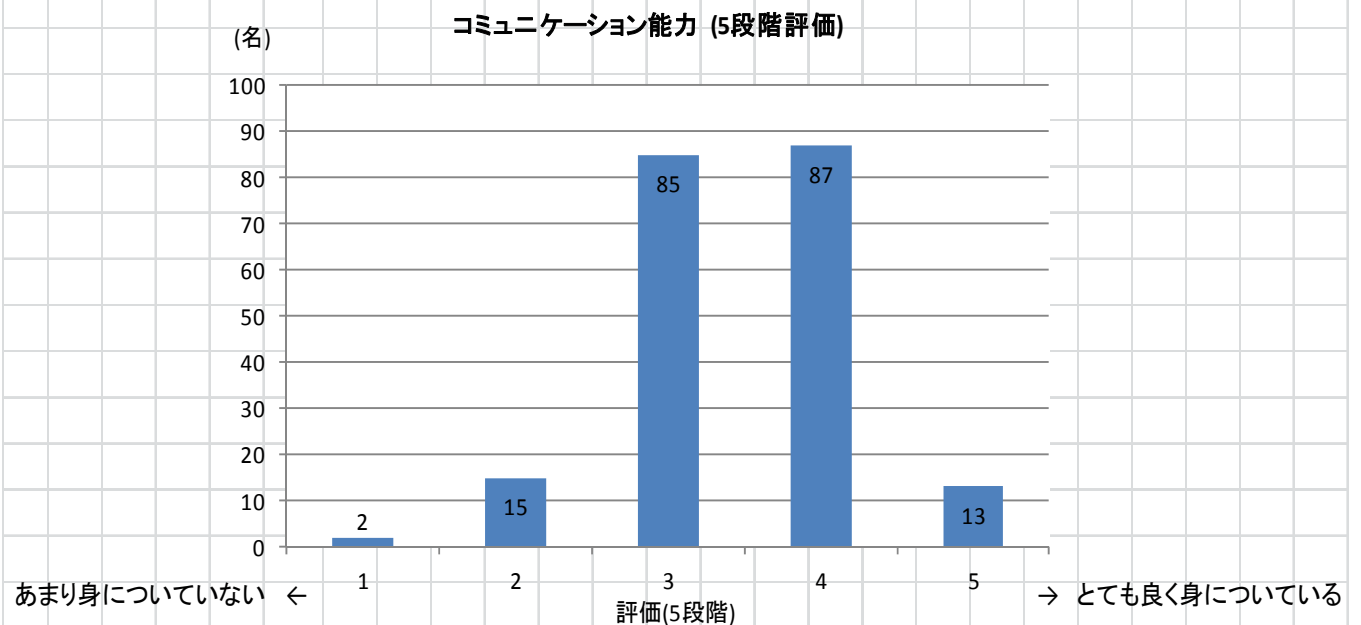
Q7. 1日目の2, 3限に対する満足度を教えてください。

5段階で示すとしたらいくつでしょうか?



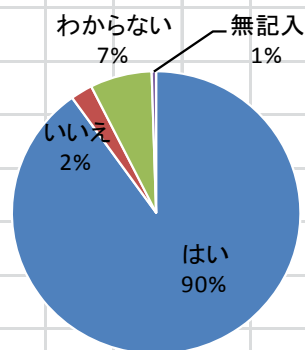
Q8. コミュニケーションリテラシーを修了して、あなたはコミュニケーション能力がどの程度身についていると思われましたか?

5段階で示すとしたらいくつでしょうか?



Q10.他の友達や、来年卒業する後輩にコミュニケーションリテラシーの受講を勧めますか？

	単位:名
はい	182
いいえ	5
わからない	14
無記入	1



Q5. コミュニケーションリテラシーは、高校と高等教育との「すきま」を埋めて、短大入学後の学習につまづかないために開催されました。このプログラムは、あなたにとって入学後の学習に役立つ何かを見つけられたのでしょうか？

見つけたものを具体的に書いてください。()内の数字は、同じ回答の数

A日程

ワード使い方を忘れていたので思い出せてよかった。
 もっと積極的になる
 まったくわからないところから少しこんな感じなんだろうなってわかった。
 まず、ほかの学科の人とも仲よくなれた。知らない人とも協力して1つのことをやったので入学してからも活かしていきたいです。
 前に出てみんなの前で発表する大切さを教わった。学科別ではなく全学科の子と接する事ができた。パソコンに触れることができた。
 文章を書く能力
 文章の書き方が身に付いたと思う。
 プレゼンのためのパワポの作成の仕方
 プレゼンの仕方、アイデアの出し方(ブレインライティングなど)が、高校とは違って、本当に大学生がやるような活動だったのでとても役に立ちました。
 プレゼンテーション力(2)、パソコンの使い方
 プレゼンテーションの難しさ。友達ができてうれしかった。
 プレゼンテーションのすすめかた。
 プレゼンテーションについて、表現の仕方
 パワーポイントやエクセルなどはやったことはあったけど、しばらく触れていなくて忘れていた部分があったので、復習できたのはよかったと思います。
 話すこと、聞くこと
 話す技術や、各技術・・・
 発表をして前に進む勇気が出ました。
 発表での問題点を注意して今後やっていきたい
 パソコンを使うときにエクセルが役に立つかなと思いました。
 コミュニケーションの取り方など、教えてもらって良かったです。楽しく4日間を過ごせました！
コミュニケーションは入学後も行ってもらいたいです。
 パソコンの練習をしたほうが良いと気付きました
 パソコンの使い方を学べた。

パソコンの使い方が少し分かるようになった。

パソコンの使い方。今後プレゼンテーションを使ってなにかするかというとわからないけど、使えても便利で良いと思いました。

パソコンの操作、プレゼンテーションのやり方

パソコンの基本な操作方法

パソコンの基礎

パソコンの使い方を復習出来た。

パソコンってホント慣れだと思いました。

パソコンが良かった、たくさん交流があつて良かった

パソコンが全く分からなかったので少し基本が分かり役立ちました。

パソコン学習をしたことで、入学後もがんばろうと思った。

パソコン

入ってからやる事が少し分かった。

入学前にたくさんの子とふれあうことができた。パソコンの復習に少しなった。

入学後や社会に出る上でコミュニケーション能力を上達させたいと思った。

入学後にもプレゼンをしたりすることがあると聞いたので入学前にプレゼンして発表ができてよかったです。

入学後にどんな勉強がしたいか、なんとなく見つかった。

友達関係や学校の雰囲気にとっても不安を持っていたので、とてもこのプログラムを通して「自信」というものをつけることができました。

友達ができた。

短大の授業は1時間が長い。

短大で学ぶことは就職活動や就職後に直接かかわること

大学の授業スタイル（90分授業、充実した施設等）について体験でき、実感を得れたと思う。時間割などの不安が少し晴れた。

積極的に参加する姿勢

自学自習の意識

チームワークの重要性

積極的に、発言が言えるようになる。自分が変われそうな気がした。

少しでも大学の雰囲気を感じることで高校との違いが分かった。

少し考える力がついた気がしました。

初対面の人ともコミュニケーションをとる力

授業風景や授業の流れなど。又、キャンパスレストランなど、キャンパス内を少しは知ることができました。

自分のパソコンに対する知識が少ないなあという事をとても感じた。

自分の意見をより相手に伝えたりできるようになった。人前で話をするのに少し慣れる事ができた。

自分の意見を相手にうまく伝えられるようになった。

自主学习をもっとしようと思いました。

コンピューターの使い方を確認することができた

コンピューターの使い方

コミュニケーション力について

問題の解決法

プレゼンの仕方

グループワークの仕方

コミュニケーションをとる大切さ

グループで協力する力

コミュニケーションの取り方が少し分かった。

コミュニケーションの取り方。文書の書き方。

コミュニケーションの大切さやプレゼンのやり方も、高校と違いわかりやすく先輩方の意見もわかりやすく、本格的に理解しているんだと思いました

コミュニケーションの大切さがわかりました。パワーポイントの作業では、他の人の意見を聞きつつ、成長できたかなと思いました。

コミュニケーションの大切さ

コミュニケーション能力とマナーなど。

コミュニケーション能力 (5)

このような授業があることによって、学校でどのような活動するのかということや、また、いろんな人と関わる事ができたので良かったです。

グループワークを大切さ (2)

グループワークの仕方

パワーポイントの使い方・プレゼンテーションの仕方"

グループに参加する大切さを改めて感じました。

グループで話し合いをすることで最初は緊張したけど、協力し合って一つのものを作る大切さを学びました。

グループでのパソコンを使ったプレゼンテーションは、高校ではやることがなかったので、グループで活動する時の役割分担することの大事さ、連携することのむずかしさが分かりました。

基本的なパソコン操作

グループで一から考えてプレゼンするという力

聞いたことを自分なりにメモを取る事の大切さを見つけられました

考える力やコミュニケーション力

学校の施設

アイディアの出し方や知り合っすぐの人たちとの協力の仕方。

PCの使い方がわかった。

Excelなどの基本操作

90分の授業の長さを実感した (4)。

90分授業に多少慣れる事ができた。パソコンにも慣れた。

B 日程

忘れていたパワーポイント・Excelなどを一からまた教えていただいたので、短大の発表などの時に活かしていきたいです。

友人を作る事ができた

問題解決のために人と話し合う事の大切さ

みんなが終わるまで待ったりはしないで時間で切っていくからきっちりと話しを聞く！

まずはコミュニケーションがたくさん取れたと言う事です。あとは短大とは高校とは違うと分かりました。

文書の書き方、話し方

プレゼンテーションの仕方を学習できたのが良かった

プレゼンテーションのグループ活動→友達作り

プレゼンテーションでの発表の仕方、話し合いの方法 (2)

ブレインライティングのやり方。

一人でやることもあるが、協力して何かを完成させることも大事だと思った。

一人で何でもやるのではなく、他の人と協力して1つのものを作り上げることが大切だと思った。

人とのコミュニケーションの大切さ

人とのコミュニケーションと分からないことは人に聞くことです。

パワーポイントやエクセルの基礎を身につけることができた。

パワーポイントの使い方、班での話し合い（班のチームワーク）、問題に対して意見を出す話し合いのときの役割は重要。

パソコンはどこの学科でも使うと聞いたので、パソコンは役立つと思います。

パソコンの使い方がわかった。

人と人との話し方や、どんなことも積極的に行動することが大切！ということが分かった。

パソコンの使い方が全くわからなかったのですが、今回の授業を通じてわかってきた。また、プレゼンの順序もわかりやすかった。

パソコンの使いかたが少しわかりよかったなと思いました。

パソコンの使い方、友達作り

パソコンの使い方（パワーポイントなど）（6）

パソコンの授業は必ず役立つと思いました

パソコンについて詳しく学べて、これから役立つと思う。

パソコン操作をもっと勉強しておいた方がいいと思った。グループのみんなで協力してやれば、短時間で終わる。

入学してから友達ができるか不安でしたがコミュニケーションの取り方を学習して自信になりました。また、最後の発表で先輩方に適切なアドバイスをしていただいたので、入学後の参考にしていきたい。

友達との交流方法がより深いものになった。

テーマを決めてから発表までの方法、工夫を学ぶ事ができた。

チームワーク（役割分担）

短大に入ってから不安が少なくなった。

誰かから教えてもらうのではなく自分から進んで学ぶことが大事

他人とのコミュニケーションの仕方や、パソコンの使い方。そして前に出て発表するプレゼンテーションを行えていい経験になった。

たくさん考える。知らない人とでも気軽に話せる

他学科の人と、たくさん話すことが出来て、コミュニケーションの取り方のコツを学べたと思う。パソコンの操作は今後必ず役に立つと思った。入学後がとても不安だったけど、この授業を受けて、力をもらった。

積極的になった気がしました。

すごく丁寧に1つ1つ説明して下さったのでパソコン作業もスムーズにできました。新しく出会った子たちと協力してがんばれたので、苦手意識を減らすことができました。

隙間を埋めたかはわからないが、入学前に大きな不安を無くせたと思う。

授業の進み方がつかめ、高校とは違うという事を実感できた。

自分から積極的に参加すること、自分の意見を持つこと

事前に一緒に入学する人や、先輩、先生とコミュニケーションをとることで入学に対する不安が軽くなった。

自己紹介の仕方

参加することにより一步先に進めた気がする。

コンピューターはあまり良く分らなかったのですが少しですができるようになって良かったです。

これから、自分自身の夢に向かって勉強していくのに困難に出会ったとしても、歩き続けることや周りに頼ること。

コミュニケーションを学ぶことが役に立ちました。

コミュニケーションをとり、グループワークをする、というのが今まで得意ではなかったもので、勉強になりました。

コミュニケーションの能力、パソコンを使ったプレゼンテーションなど
コミュニケーションの大切さやグループで一つの事に取り組んで問題を解決することの重要性を理解しました。

コミュニケーション能力はプレゼンの際にとっても必要だと思いました。

コミュニケーション能力は少し向上した気がします (5)。

高校より、自分たちで行い、完成させ発表する授業が多くなるので、積極性を持ちたいと思った。

高校によって授業が違う事がある。同じ歳の人とでも差がある事を実感した

高校と短大の違いが分かった。

高校と短大の違いが分かった

グループワークは初めての経験でした。みんなで1つの事に協力して取り組む楽しさを知りました。

グループで1つの問題に取り組む時の協調性を見つけた。

協力する大切さ

協力して完成させる力。

エクセルやパワーポイントの使い方、渡辺さんの公演

意見の出し方がわかりました。入学後は意見を出し合う機会が増えると思うので、少し自信が持てました。

人見知りな自分にとってグループワークというものを深められたと同時に友人がたくさんできたことで入学後楽になると思いました。

新しい人との会話力、チームワーク、発言力

相手に分かりやすい話し方

アイデアを出し、想像力など。

PCの使い方や、プレゼン、グループワークなどの進め方

PCの使い方、授業の進め方

PCの授業で、自分がPCについての知識を知らなすぎたことがわかったので、もう少し触れるようにしようと思った。

Excel やパワーポイントはどの学科でも使うと思うので高校でもやりましたが復習や新しい技術も学べて良かったです。

Excel やパワーポイントなどを利用し、プレゼンテーションを行うやり方が少しは身に付いたと思います。

Excel やパワーポイントなど、分かっていることが多かったが、とても細かく教えて頂いたので、良い復習になった。

Excel やパワーポイントの使い方 (3)

Excel やパワーポイントは何年も前に少し学校の授業で習っただけで忘れていたのですが、今回で基本操作ができるようになってよかったです。

90分授業の長さに慣れた (3)

Q6: .コミュニケーションリテラシーで、もう少し深く学習したかった項目や他に学習したかった内容があれば書いてください。

A日程

私はパソコンがあまり経験がなかったので、もう少しやっても良かったな、と思いました。でも、興味もつことができてよかったです♪

ワードとか

もっと色々な人と話して友達になりたかった。

もう少し交流してみたかった。サークルを見学したかった。

もう少し、ゆっくり丁寧にパソコンの基礎が習いたかったです。

もう少し、人とのコミュニケーションを多くとりたかった。

もう少し、Excel やパワーポイントの使い方を詳しくやりたかったです。

まだわかりません

他の学科の人と関わったのはよかったけど、肝心の他の学科の人と関わりがほとんどなかったので、多少、学科ごとに集まるくらいはあった方がよかったと思います。

文の書き方についてなど

表の作り方をもう少しやりたかったです。

話す授業 (2)

パソコンをもっと細かくやってほしかった。

パソコンの使い方 (取り扱ったもの以外)

パソコンの操作のやり方や入学してからどんな授業があるのかがもう少し詳しく知りたかったです。

パソコンの基礎を少し学びたかったです。

パソコンの Excel (4)

パソコンでの作業がとっても早く感じ、付いていくのが大変でした。

パソコンだけでなく実際に授業で行う勉強もしてみたかった。

パソコンが難しかった (2)

とても楽しかったので大丈夫です！

特になし (11)

コミュニケーション (ノンバーバルコミュニケーション) (2)

問題解決技術

学校の施設

学科毎に入学後の授業を少し触れておきたかった。

書く練習

学部ごとに仲を深めたかったです！

書く技術をもっと磨いてみたいと思った。

同じ学科の人たちともっと話せたら良かったなと思いました。

エクセルを学ぶ時間がもう少し欲しかった。

エクセルがわかんなかった。進むのが早い。

色々な施設、教室を作ってみたかった。

PC が苦手なのでもう少し細かくやりたかったです。

Excel のもっとレベルの高い内容をやってみたかった。(SUM 以外の関数など)

Excel、パワーポイント

Excel (関数)

B 日程

ワードなど、、、

読み、書き能力

もっとパソコンの授業をしたかったです。

もうちょっと発表する時間の前に作る時間がほしかった。

他の人との交流があまりなかったので、親睦会などをしてみたかった。

パワーポイントを使うにあたって、アニメーションの説明をしなかったのはちょっとなあと考えた。

パワーポイント

話す項目が楽しかったので、もう少し学習したかったです。

話し方

パソコンの操作 (Excel 等々) (2)

パソコンの扱いをもう少し深く学びたかったと思いました。

パソコンについて (3)

友達を作る時間を増やして欲しい

特になし (6)

短大での授業の受け方をもう少ししっかり知りたいなと思いました。

全項目が満足できましたので特にありません。

作文の書き方

今回プレゼンテーションまでグループで協力してとてもいいものができたと思ったので十分満足できました。

コミュニケーションりてらしーだから、コミュニケーションについてももう少しやりたかったです。

コミュニケーションの取り方

コミュニケーションの授業をもう少し受けたかったです (4)

声出しの授業をもっとしたかった。

学習面ではないけれど、もう少し、色んな人と交流の機会を増やしたらもっと友達が増えて良かったなと思った。

学習ではないですが入学後のスケジュールなど学校生活についても知りたかった。

会話のキャッチボールについて。

多くの人とのコミュニケーションの取り方を学びたかった。

PC 関係、プログラミング等

Excel やパワーポイントが結構深かった (3)

Excel などパソコンに関すること

以上

4.5.6 e-ラーニング

4.5.1 で述べたように、今年度は2、3月の授業後、4月14日または4月21日までの間に、e-ラーニングでの課題を課した。図4.5-4は、個人でMoodleにログインした後に「入学事前学習」を選択した際に表示されるページである。内容は、「ことば」、「生活」、「数字」、の3分野（各30問）となっており、各分野ともにログインするたびに出题順序がランダムに変わる。じっくり解説を読みながら取り組むと、各分野それぞれ少なくとも90分は必要である。図4.5-5に、「数字」の分野の問題例を示す。どの問題も、4択となっている。

Internet 接続環境にあるPCからならばどこからでも受講可能である。受講生各人にIDとパスワードを付与しており、湘北短期大学ホームページからリンクをたどることができる。アクセスの仕方、質問やトラブルに関する問い合わせの方法は、第9講で説明を行っている。なお、操作マニュアルは、4.2.5 e-ラーニング検討ワーキンググループ資料の中の、「(4) 湘北短期大学 e-ラーニング実施のためのマニュアル」に掲載したとおりである。



図 4.5-4 e-ラーニングサイト「コミュニケーションリテラシー：入学事前学習」課題ページ（個人ログイン後）

第 27 問 <グラフの領域> 「数字」

問題

63

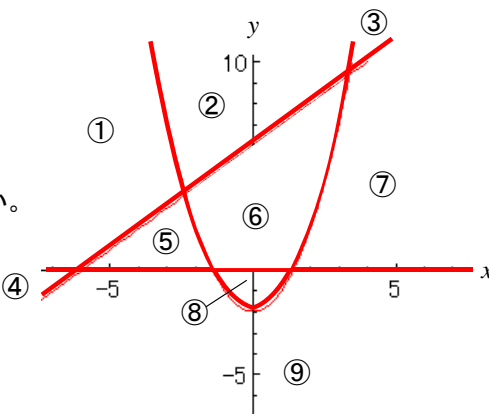
以下の3つの式によって示される直線と放物線は、図のように平面を9つの領域に分ける。

- ア $y = x^2 - 2$
- イ $y = x + 6$
- ウ $y = 0$

これらの領域は、ア、イ、ウの各式の等号を適宜不等号に置き換えて得られる、1組の連立方程式によって示されたものである。ただし、領域には図中の太い境界線は含まない。

以下のカ、キ、クの3式からなる連立方程式によって示される領域は、①～⑨のうちどれか。

- カ $y > x^2 - 2$
- キ $y > x + 6$
- ク $y > 0$



- 1. ②の領域
- 2. ⑤と⑦の領域
- 3. ⑨の領域
- 4. 1～3のいずれでもない

図 4.5-5 e-ラーニング実施時の画面例：「数字」

4.6 高大連携連絡協議会（予定）

高大連携協定締結校との連絡協議会は、下記内容にて開催予定である。

日時： 平成 24 年 3 月 19 日（月）15 時から 16 時 30 分

場所： 湘北短期大学 7 号館 731 教室

内容： 平成 2 3 年度の事業報告

コミュニケーションリテラシーの実施報告

A、B 日程参加生徒のプレゼン資料を配布

平成 2 4 年度の事業計画

協定書の更新について

コミュニケーションリテラシーで導入した e-learning の利用について

内容の紹介

各高校あて ID とパスワードを配布。体験可能。

学内見学（16:00-16:30）

【参加予定校（25 校/27 校）3 月 5 日現在】

愛川高等学校、相原高等学校、足柄高等学校、厚木北高等学校、厚木商業高等学校、厚木清南高等学校、厚木西高等学校、厚木東高等学校、綾瀬高等学校、有馬高等学校、伊志田高等学校、伊勢原高等学校、海老名高等学校、小田原総合ビジネス高等学校、座間高等学校、瀬谷高等学校、高浜高等学校、茅ヶ崎高等学校、二宮高等学校、秦野総合高等学校、平塚湘風高等学校、藤沢清流高等学校、舞岡高等学校、山北高等学校、町田工業高等学校、



図 4.6-1 写真は平成 22 年度 開催の高大連絡協議会の風景（平成 23 年 3 月 10 日開催）

4.7 シラバス調査

リベラルアーツ教育研究活動として、日本国内における短期大学等のリベラルアーツ相当科目の調査研究を行った。より具体的には、現存する 330 短大のシラバスを入手し、本学のリベラルアーツ教育再構築に向けた事例の調査研究を計画した。シラバスは、各大学の Web サイトに掲載されているため、Web サイトより入手した。時間的な制約から、全短期大学を調査することはできなかったが、下記短期大学のシラバスを Web から、あるいは直接連絡をとり送付を依頼してシラバスを入手し、一覧を作成した。その後「科目名」、「目標」、「内容」につきテキストマイニングにより傾向を分析した。分析結果は、本報告書に掲載できなかったもので、別途報告する。

表 4.7-1 調査対象となった短期大学のシラバス掲載 Web サイトと学科

県	短期大学名	Webサイト	学科
神奈川県	小田原女子短期大学	http://www.odawara.ac.jp	食物栄養学科 保育学科
神奈川県	カリタス女子短期大学	http://www.caritas.ac.jp	言語文化学科
神奈川県	相模女子大学短期大学部	http://www.sagami-wu.ac.jp	生活デザイン学科 食物栄養学科
神奈川県	湘南短期大学	http://www.shonan.ac.jp	歯科衛生学科 看護学科
神奈川県	上智短期大学	http://www.jrc.sophia.ac.jp	英語科
神奈川県	鶴見大学短期大学部	http://www.tsurumi-u.ac.jp	保育科 歯科衛生科
神奈川県	東海大学医療技術短期大学	http://www.nmt.u-tokai.ac.jp	看護学科
東京都	青山学院女子短期大学	http://www.luce.aoyama.ac.jp	国文学科 英文学科 家政学科 教養学科 芸術学科 子ども学科
東京都	亜細亜大学短期大学部	http://www.asia-u.ac.jp	経営科
東京都	有明教育芸術短期大学	http://www.ariake.ac.jp/	子ども教育学科 芸術教養学科
東京都	大妻女子大学短期学部	http://www.otsuma.ac.jp	家政科 国文科 英文科
東京都	嘉悦大学短期大学部	http://www.kaetsu.ac.jp/	ビジネスコミュニケーション学科
東京都	共立女子短期大学	http://www.kyoritsu-wu.ac.jp	生活科学科 文科 看護学科
東京都	国際短期大学	http://www.kokutan.net	国際コミュニケーション学科
東京都	淑徳短期大学	http://www.jc.shukutoku.ac.jp	こども学科 社会福祉学科

			食物栄養学科
東京	昭和女子大学短期大学部	http://www.swu.ac.jp	文化創造学科
東京	実践女子短期大学	http://www.jissen.ac.jp	日本語コミュニケーション学科 英語コミュニケーション学科 生活福祉学科 食物栄養学科
東京	女子栄養大学短期大学部	http://www.eiyo.ac.jp	食物栄養学科
東京	女子美術大学短期大学部	http://www.joshi.ac.jp	造形学科
東京	杉野服飾大学短期大学部	http://www.sugino-fc.ac.jp/junior/index.html	服飾学科
東京	創価女子短期大学	http://www.soka.ac.jp/swc/	現代ビジネス学科 英語コミュニケーション学科
東京	帝京大学短期大学部	http://www.teikyo-u.ac.jp	人間文化学科 現代ビジネス学科
東京	帝京短期大学	http://www.teikyo-jc.ac.jp	生活科学科 こども教育学科 ライフケア学科
東京	東京家政大学短期大学部	http://www.tokyo-kasei.ac.jp	保育科 栄養科 服飾美術科
東京	東京交通短期大学	http://www.hosho.ac.jp/toukou/	運輸科
東京	東京女子体育短期大学	http://www.twcpe.ac.jp	保健体育学科 児童教育学科
東京	東京成徳短期大学	http://www.tsc.ac.jp	幼児教育科
東京	東京農業大学短期大学部	http://www.nodai.ac.jp	生物生産学科 食品科学科 産業経営学科
東京	東京富士大学短期大学部	http://www.fuji.ac.jp	ビジネス学科
東京	日本体育大学女子短期大学部	http://www.nittai.ac.jp	体育科
東京	日本大学短期大学部	http://www.nihon-u.ac.jp	建築・生活デザイン学科 ものづくり・サイエンス総合学科 生命・物質化学科
東京	文化学園大学短期大学部	http://www.bunka.ac.jp	服装学科 生活造形学科
東京	文京学院短期大学	http://www.u-bunkyo.ac.jp	英語科
東京	目白大学短期大学部	http://www.mejiro.ac.jp	生活科学科 製菓学科 ビジネス社会学科
茨城	茨城女子短期大学	http://www.taisei.ac.jp	保育学科 ことばの芸術学科
茨城	つくば国際短期大学	http://www.ktt.ac.jp/tijc/	保育科
茨城	常磐短期大学	http://www.tokiwa.ac.jp	キャリア教養学科

			幼児教育保育学科
栃木	足利短期大学	http://www.ashitan.jp/	こども学科 看護学科
栃木	宇都宮短期大学	http://www.ujc.ac.jp/	音楽科 人間福祉学科
栃木	宇都宮文星短期大学	http://www.bunsei.ac.jp/UBJC/	地域総合文化学科
栃木	作新学院大学女子短期大学部	http://www.sakushin-u.ac.jp	幼児教育科
群馬	桐生大学短期大学部	http://www.kiryu-jc.ac.jp/	生活学科 アート・デザイン学科
群馬	新島学園短期大学	http://ns.niitan.jp/	キャリアデザイン学科 コミュニティ子ども学科
埼玉	浦和大学短期大学部	http://www.urawa.ac.jp	介護福祉科
埼玉	国際学院埼玉短期大学	http://www.kgef.ac.jp/ksjc/	幼児保育学科 健康栄養学科
千葉	昭和学院短期大学	http://www.showagakuin.ac.jp/	人間生活学科 ヘルスケア栄養学科
千葉	千葉経済大学短期大学	http://www.chiba-kc.ac.jp	ビジネスライフ学科 こども学科
静岡	常葉学園短期大学	http://www.tokoha-jc.ac.jp//	日本語日本文学科 保育科 音楽科 英語英文科
静岡	浜松学院大学短期大学部	http://www.s.hgu.ac.jp/	幼児教育科
愛知	愛知医療学院短期大学	http://www.yuai.ac.jp	リハビリテーション学科
愛知	愛知みずほ大学短期大学部	http://www.aichi-mizuho.ac.jp/amjc/	生活学科
愛知	修文大学短期大学部	http://www.shubun.ac.jp	生活文化学科 幼児教育学科
愛知	名古屋学芸大学短期大学部	http://guide.nuas.ac.jp/jc/	現代総合学科
愛知	名古屋柳城短期大学	http://www.ryujo.ac.jp	保育科
三重	鈴鹿短期大学	http://www.suzuka-jc.ac.jp/	生活学科
青森	青森明の星短期大学	http://www.aomori-akenohoshi.ac.jp	子ども学科 現代介護福祉学科
岩手	岩手看護短期大学	http://www.iwate-nurse.ac.jp	看護学科
宮城	仙台青葉学院短期大学	http://www.seiyogakuin.ac.jp/	看護学科 キャリアデザイン学科
宮城	東北生活文化大学短期大学部	http://www.mishima.ac.jp	生活文化学科
福島	桜の聖母短期大学	http://www.sakuranoseibo.jp	生活科学科 英語学科

福島	福島学院大学短期大学部	http://www.fukushima-college.com	保育科(Ⅰ部・Ⅱ部) 食物栄養科 情報ビジネス科
----	-------------	---	--------------------------------

なお、下記短期大学は、Web上でシラバスを検索することができなかった。

表 4.7-2 調査範囲で Web 上にシラバスの掲載が確認できなかった短大

県	短期大学名	Web サイト	学科
神奈川	昭和音楽大学短期大学部	http://www.tosei-showa-music.ac.jp	音楽科
神奈川	横浜創英短期大学	http://www.soel.ac.jp	情報学科 看護学科(3年生)
東京	愛国学園短期大学	http://www.aikoku-jc.ac.jp/	家政科
東京	上野学園大学短期大学部	http://www.uenogakuen.ac.jp	音楽科
東京	自由が丘産能短期大学	http://www.sanno.ac.jp/tandai/index	能率科第1部、第2部
東京	星美学園短期大学	http://www.seibi.ac.jp	幼児保育学科 人間文化学科
東京	戸板女子短期大学	http://www.toita.ac.jp	服飾芸術科 食物栄養科 国際コミュニケーション学科

以上

5. 効果の検証と今後の課題

5.1 コミュニケーションリテラシーの効果検証

5.1.1 前年度受講者アンケート

本学では、入学事前学習として、入学事前授業で四学科の入学予定者全員が対象となる「コミュニケーションリテラシー」と、学科独自に行っている「入学前課題」がある。ここでは、「コミュニケーションリテラシー」受講後1年経過した段階で、受講生にどのように意識されているのか、その有効性と有用性を探る一助として1年生全員に対しアンケートを実施した。

実施日時：2012年2月4日～2月17日

実施対象：2011年度入学の1年生（学科ごとに実施）

実施方法：(A) コミュニケーションリテラシー非受講者と (B) 受講者に分け、(A) には1種類のアンケート（【一般用】検証用アンケート原案.doc）、(B) には2種類のアンケート（【一般用】検証用アンケート原案.doc+【コミ参加者】検証用アンケート原案.doc）に回答を要請した。

表 5.1-1 アンケート回答率

	情報メディア E	総合ビジネス C	生活プロデュース L	保 育 P
アンケート対象者数	109	181	132	136
↑回答者数	89	124	65	124
回答率	82%	69%	49%	91%
内コミリテ受講者	28	64	50	55
↑回答者数	24	44	26	51
回答率	86%	88%	41%	93%

下記の問いに対する回答結果を次ページに掲載する。

(Q1) 各学科それぞれの入学前課題に関して、1年経っての感想

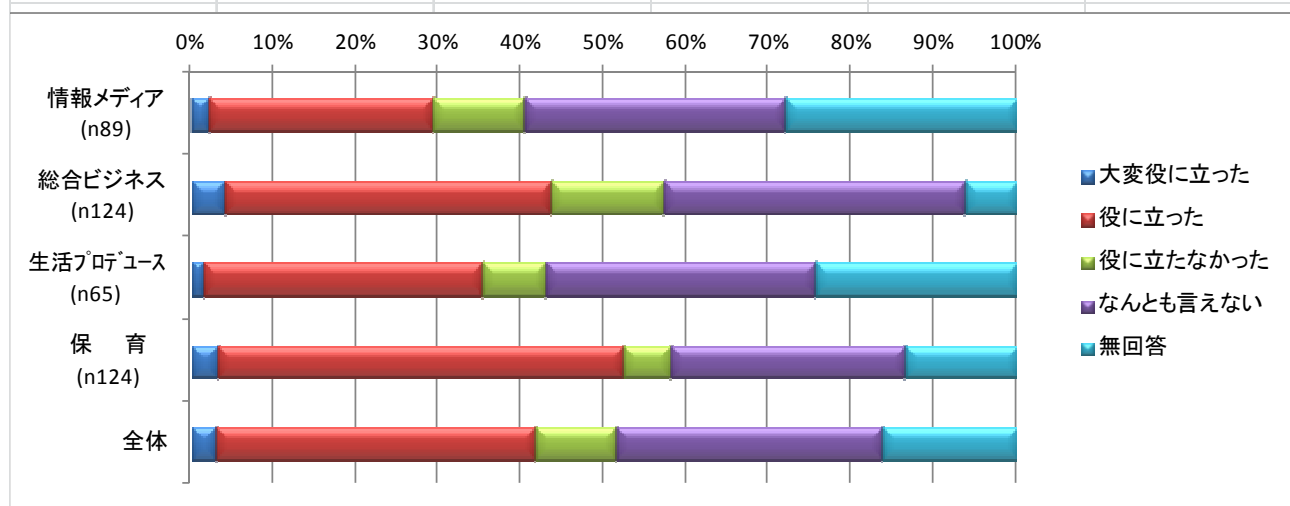
Q 各学科の入学前課題が入学後に役に立った、と思いますか

(Q2) コミュニケーションリテラシー受講生に対するアンケート

Q 昨年受講した「コミュニケーションリテラシー」は入学後に役に立ったと思いますか

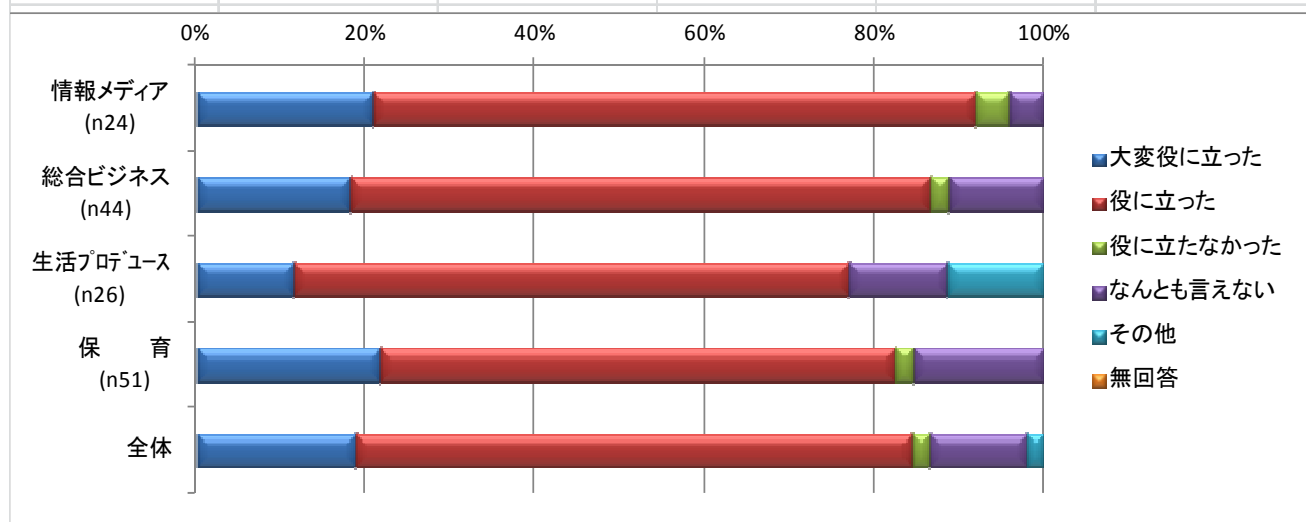
Q1 各学科の入学前課題が入学後に役に立った、と思いますか

回答率	81.7%	68.5%	49.2%	91.2%	72.0%
	情報メディア (n89)	総合ビジネス (n124)	生活プロデュース (n65)	保育 (n124)	全体
大変役に立った	2	5	1	4	12
役に立った	24	49	22	61	156
役に立たなかった	10	17	5	7	39
なんとも言えない	28	45	21	35	129
無回答	25	8	16	17	66
合計	89	124	65	124	402



Q2 昨年受講した「コミュニケーションリテラシー」は入学後に役に立ったと思いますか

	情報メディア (n24)	総合ビジネス (n44)	生活プロデュース (n26)	保育 (n51)	全体
大変役に立った	5	8	3	11	27
役に立った	17	30	17	31	95
役に立たなかった	1	1	0	1	3
なんとも言えない	1	5	3	8	17
その他	0	0	3	0	3
無回答	0	0	0	0	0
合計	24	44	26	51	145



以上1年経過後の振り返りアンケート結果から、コミュニケーションリテラシー受講生の85%が「大変役に立った」「役に立った」と答えており、受講生に一定の評価が得られていることがわかる。保育学科(P)でも「大変役に立った」「役に立った」と答えた率が82%以上となっており、情報メディア学科(E)の92%には及ばないものの、総合ビジネス学科(C)並みの満足度となっている。21年度の70%から安定して向上している。

また、コミュニケーションリテラシー受講後1年経ってのアンケート結果では、「湘北を他人(後輩など)に勧めるかどうか」に対し、回答者の88%が「はい」と答える一方で、2%が「いいえ」と答え、「わからない・無回答」も10%に達する。その理由として、「人による」、とした答え以外では、下記のような声があった。これらにも十分に耳を傾け、一層の授業の改善に努めるべきであろう。

- 思っていた学校のイメージとの違いが多い
- 自分でやるべきことばかりだから。
- まだよくわからない
- 入ってからもっと学びたい事ができて、それを学ぶ時間が足りないから
- ゲームコースがなくなったから(情報メディア)
- 大学のほうが楽しそう

5.1.2 社会人キャリア力育成アセスメント

コミュニケーションリテラシーは、短大の2年間で獲得すべき社会人力を早期より生徒(学生)に理解させ、その後の学業意欲を高めることをめざしている。その目的が達成されたかどうかを測定するために、受講前の2~3月に自己評価と客観評価(検定)を行い、2か月後に自己評価と客観評価を再度行ってその推移を確認する。これら自己評価と客観評価を行うために、社会人キャリア力育成アセスメント委員会主催の「社会人キャリア力育成アセスメント」(日本インターンシップ推進協会(JIPC)主管)を実施した。内容は表5.1.2に示したとおり、社会人力(社会人基礎力)問題60問、社会常識力問題40問、さらに自己評価16問を加えた計116問からなっており、結果はチャート化されて個人と大学に報告される。

表 5.1-2 社会人キャリア力育成アセスメント 検定項目

社会人 キャリア力	社会人 基礎力	前に踏み出す 力	主体性	物事に進んで取り組む力
			働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力
			実行力	目的を設定し確実に行動する力
		考え抜く力	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力
			計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにする力
			創造力	新しい価値を生み出す力
	チームで働く 力	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力	
		傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力	
		柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力	
		状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係を理解する力	
		規律性	社会のルールや人との約束を守る力	
	社会人常識力	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力	
		日本語力	漢字・敬語・慣用句などの知識	
		社会マナー	社会のルール・マナーなどの知識	
時事問題		社会情勢などの知識		
計算力		常識的な計算力、数学的論理力		

23年度(24年4月入学生)のA日程、B日程は受講初日の2月9日と10日にそれぞれ第一回目のアセスメントを実施している。C日程、D日程もそれぞれ受講初日の3月21日、22日に実施する予定である。また、第2回目のアセスメントは、A、B日程が4月14日、C、D日程が4月21日に実施予定である。

ここでは、2010年入学生の推移と2011年入学生の推移を比較し、また、2010年入学生については、入学前(2月)、入学直後(4月)、1年次(1年後の2月)にアセスメントを行った結果を示す。表5.1-3に、受講生の平均値としての2月の開講前の自己評価と検定結果、4月講座終了時の自己評価と検定結果の比較、そして受講前と受講後の推移を示す。なお、等分散性については、F検定を行い、すべての項目において有意水準5%で採択可であることを確認している。平均が等しいかどうかについては、t検定を用いて有意水準5%で判定している。

表 5.1-3 受講前(2月)と受講後(4月)の社会人キャリア力の自己評価と検定結果(2010年度)

		入学前2月(N=180)			入学後4月(N=169)			推移	
		2010年2月8日、9日			2010年4月17日、24日			2月→4月(増分)	
		自己評価	検定結果	差	自己評価	検定結果	差	自己評価	検定結果
社会人基礎力	主体性	64.44	77.73	13.29	72.54	78.82	6.27	8.10	1.08
	働きかけ力	65.44	80.62	15.18	69.94	83.91	13.96	4.50	3.28
	実行力	68.22	82.93	14.71	71.36	83.36	12.00	3.14	0.43
	課題発見力	64.56	86.02	21.47	68.99	88.36	19.36	4.44	2.33
	計画力	60.44	89.42	28.98	65.44	92.59	27.15	5.00	3.17
	創造力	61.56	84.04	22.49	66.27	84.47	18.20	4.72	0.43
	発信力	61.11	86.20	25.09	66.15	88.66	22.51	5.04	2.46
	傾聴力	79.22	79.13	-0.09	84.97	81.51	-3.46	5.75	2.38
	柔軟性	76.44	86.78	10.33	80.83	87.64	6.82	4.38	0.87
	状況把握力	75.67	89.07	13.40	78.11	91.12	13.02	2.44	2.06
	規律性	86.22	89.98	3.76	87.46	91.43	3.98	1.23	1.45
	ストレスコントロール力	68.22	80.22	12.00	73.96	80.73	6.77	5.74	0.51
常社会人	日本語力	62.00	54.83	-7.17	64.97	56.04	-8.93	2.97	1.20
	社会マナー	73.33	52.00	-21.33	77.16	68.93	-8.22	3.83	16.93
	時事問題	58.33	28.17	-30.17	62.84	30.41	-32.43	4.51	2.25
	計算力	65.78	49.28	-16.50	68.88	40.00	-28.88	3.10	-9.28

太字は有意水準 $p < .05$ で向上が認められた項目

表 5.1-4 受講前(2月)と受講後(4月)の社会人キャリア力の自己評価と検定結果(2011年度)

		入学前2月(N=196)			入学後(N=186)			推移	
		2011年2月8日、9日			2011年4月16日、23日			2月→4月(増分)	
		自己評価	検定結果	差	自己評価	検定結果	差	自己評価	検定結果
社会人基礎力	主体性	67.55	77.08	9.53	72.37	84.43	12.06	4.81	7.35
	働きかけ力	66.33	81.71	15.39	69.57	83.48	13.91	3.24	1.77
	実行力	68.06	82.00	13.94	72.04	84.82	12.77	3.98	2.82
	課題発見力	64.59	86.90	22.31	68.39	88.02	19.63	3.80	1.12
	計画力	62.04	89.86	27.82	66.67	91.05	24.39	4.63	1.20
	創造力	60.10	84.39	24.29	65.70	86.04	20.34	5.60	1.66
	発信力	63.57	86.55	22.98	66.56	89.03	22.47	2.99	2.48
	傾聴力	80.51	80.76	0.24	81.18	85.10	3.91	0.67	4.34
	柔軟性	78.78	88.16	9.39	80.75	88.15	7.40	1.98	-0.01
	状況把握力	77.65	88.45	10.80	77.63	90.24	12.60	-0.02	1.79
	規律性	84.80	89.10	4.31	84.30	85.85	1.55	-0.49	-3.25
	ストレスコントロール力	69.29	80.71	11.43	69.68	80.06	10.39	0.39	-0.65
常社会人	日本語力	63.16	51.28	-11.89	63.87	56.88	-6.99	0.71	5.61
	社会マナー	74.49	65.10	-9.39	73.23	55.22	-18.01	-1.26	-9.89
	時事問題	59.90	36.48	-23.42	61.18	48.06	-13.12	1.28	11.58
	計算力	66.84	47.04	-19.80	63.55	40.27	-23.28	-3.29	-6.77

太字は有意水準 $p < .05$ で向上が認められた項目

上記表 5.1-3、5.1-4 の結果から、受講生は、社会人基礎力に関しては控えめに自己評価する傾向があることが伺え、本授業を受講した後の自己評価点は、全般的に高くなっていることがわかる。これは、入学事前授業を受講することで、自覚と自信が芽生えたものであることが推察できる。ただし、主体性が身についた、と感じているが、検定結果では有意な伸びとは言えないものとなっている。逆に規律性は伸びが実感されず、検定でも有意な向上はないが、受講前の段階ですでに他の基礎力と比較して点が高いことが挙げられよう（2010年で86.22点、11年で89.10点に対し、主体性は2010年64.44点、77.08点）。つまり、受講生はこの授業を受ける前にすでに高い規律性を持っており、そのように自己評価しているのであろう。この結果は、すでに報告した前年結果と一致している^[1]。

受講生本人の実感とは相違するが、検定結果から伸長の認められる社会人基礎力は、2年連続して「働きかけ力」と、「チームで働く力」の「発信力」、「傾聴力」、「状況把握力」である。これは、本講座では課題の発見と解決をテーマとして様々な局面でグループ作業を取り入れていること、とくにプレゼンテーショングループでは役割分担とグループメンバーの貢献度評価が設けられていることの効果であると考えられる。

一方、「主体性」、「実行力」、「創造力」、「柔軟性」、「ストレスコントロール力」などは、2-3か月間では身につけることが難しい力であろうことは想像できる。入学後の2年間をかけて徐々に向上すべき力と思われる。

また、社会人常識力でも興味深い結果が得られている。日本語力が一朝一夕に身につく力ではないことが理解できる。入学前に行った授業の成果は、入学後の授業への取り組み姿勢に現れるであろう。また、2か月間でとくに低下していたのは計算力であるが、継続的な反復学習が必要とされるのかも知れない。他方、マナーに関しては、その重要性を喚起すると、短い時間に効果があがる可能性がある。

5.1.3 GPA 変化

平成21年入学生564人のうち、コミュニケーションリテラシーを受講したのは110名であった（学科内訳は表5.1-5のとおり）。1年次と卒業時の学業成績の変化の調査を行った。この結果は、平成22年度の報告書にも掲載済みであるが、再掲する。

1年次と卒業時（累計）成績をGPAで表し、受講生グループと非受講生グループの平均値を求めた。得られた平均値に有意な差があるかどうかは、F検定を行い、等分散かどうかを確認した後、片側または両側のt検定により決定した。

表 5.1-5 入学者の人数内訳（コミュニケーションリテラシー受講者と非受講者数）

学科	受講生	非受講生	合計
情報メディア	26	79	105
総合ビジネス	40	138	178
生活プロデュース	22	135	157
保育	22	102	124
合計人数	110	454	564

¹ 小棹理子, 伊藤善隆, 岩崎敏之, 高橋可奈子, 藤澤みどり, 佐藤明宏, 原満, 関 祐太郎 (2010) 短大型入学前教育「コミュニケーションリテラシー」の構築. 日本教育工学会研究報告集, JSET10-2, pp. 77-80

(1) 情報メディア学科 (非受講者 1 年生には学籍上の 1 年生が含まれる)

	1 年次		卒業時	
	受講者	非受講者	受講者	非受講者
平均	2.55	2.46	2.56	2.36
分散	0.4189	0.5547	0.4249	0.5607
観測数	24	84	23	80
プールされた分散	0.5252		0.5311	
仮説平均との差異	0		0	
自由度	106		101	
t	0.5682		1.1187	
p(T<=t) 片側	0.2856		0.1330	
t 境界値 片側	1.6594		1.6601	
p(T<=t) 両側	0.5711		0.2659	
t 境界値 両側	1.9826		1.9837	
F検定による分散の有意差は認められない				
t-検定は等分散を仮定し、p 0.05				

受講者は 1 年次で GPA 平均が高く、卒業時にはさらに平均値が高くなっている。それに対し、非受講者は 1 年次より卒業時の GPA 平均が低くなっているが、検定で有意差があるとは認められない。

(2) 総合ビジネス学科 (非受講者 1 年生には学籍上の 1 年生が含まれる)

	1 年次		卒業時	
	受講者	非受講者	受講者	非受講者
平均	2.77	2.73	2.72	2.66
分散	0.2598	0.3134	0.2546	0.2721
観測数	38	140	36	140
プールされた分散	0.3022		0.2685	
仮説平均との差異	0		0	
自由度	176		174	
t	0.3891		0.6044	
P(T<=t) 片側	0.3488		0.2732	
t 境界値 片側	1.6536		1.6537	
P(T<=t) 両側	0.6977		0.5463	
t 境界値 両側	1.9735		1.9737	
F検定による分散の有意差は認められない				
t-検定は等分散を仮定し、p 0.05				

受講者グループは 1 年次で GPA 平均が高いが、卒業時にはやや平均値が低くなっている。一方、非受講者グループは 1 年次より卒業時の GPA 平均がさらに低くなっているが、受講者・非受講者の GPA 平均に検定では有意差は認められない。

(3) 生活プロデュース学科 (非受講者 1 年生には学籍上の 1 年生が含まれる)

	1 年次		卒業時	
	受講者	非受講者	受講者	非受講者
平均	2.61	2.60	2.56	2.56
分散	0.3070	0.3588	0.3448	0.3480
観測数	22	127	22	125
プールされた分散	0.3514		0.3475	
仮説平均との差異	0		0	
自由度	147		145	
t	0.0574		-0.0588	
p(T<=t) 片側	0.4772		0.4766	
t 境界値 片側	1.6553		1.6554	
p(T<=t) 両側	0.9543		0.9532	
t 境界値 両側	1.9762		1.9765	
F検定による分散の有意差は認められない				
t-検定は等分散を仮定し、p 0.05				

受講者と非受講者の差は認められないが、卒業までに非受講者が 2 名減となっていることがわかる。

(4) 保育学科（非受講者 1 年生には学籍上の 1 年生が含まれる）

	1年次		卒業時	
	受講者	非受講者	受講者	非受講者
平均	2.84	2.81	2.95	2.90
分散	0.1628	0.1287	0.1100	0.0892
観測数	22	101	22	101
プールされた分散	0.1346		0.0928	
仮説平均との差異	0		0	
自由度	121		121	
t	0.3193		0.7090	
p(T<=t) 片側	0.3750		0.2399	
t 境界値 片側	1.6575		1.6575	
p(T<=t) 両側	0.7500		0.4797	
t 境界値 両側	1.9798		1.9798	
F検定による分散の有意差は認められない				
t-検定は等分散を仮定し、p 0.05				

1 年次の受講者と非受講者の GPA 平均の差は 0.03 である。卒業時は全体的に GPA が向上しているが、受講者の GPA 平均と非受講者の差が開いている。検定では有意差は認められない。

5.2 報告・論文

本取り組みに関する発表・報告は下記のとおりである。本活動報告では詳細に触れなかった解析や文献なども記載してある。

- (1) 小棹理子・伊藤善隆・岩崎敏之・高橋可奈子・藤澤みどり・佐藤明宏・原満・関祐太郎、”短大型入学前教育「コミュニケーションリテラシー」の構築”、日本教育工学会研究報告集 JSET10-2、pp77-80 (2010)
- (2) 小棹理子・伊藤善隆・野口周一、大学教育学会第 32 回大会発表要旨集録、pp72-73 (2010)
- (3) 小棹理子、”社会的・職業的自立を目指した教育の実践例”、(社) 私立大学情報教育協会 短期大学部会 発表 (2010 年 9 月 2 日)
- (4) 小棹理子、”入学前から開始する社会人キャリア育成”、平成 22 年度インターンシップ成果発表会 (依頼講演) (2010 年 12 月 10 日)
- (5) 小棹理子・伊藤善隆・岩崎敏之・高橋可奈子・藤澤みどり・原田香菜、”キャリア教育の一環としての短大型入学前授業”、日本教育工学会研究報告集 JSET10-5、pp77-80 (2010)
- (6) 小棹理子、”現代型社会人育成を俯瞰する入学前教育構築”、平成 22 年度大学教育改革プログラム合同フォーラム「短期大学の教育改革に向けて」分科会 発表 (2011 年 1 月 24 日)
- (7) 小棹理子、”海外カレッジ視察研修報告”、湘北紀要 32、pp1-21 (2011)
- (8) 小棹理子・内海太祐・岡原武・岩崎敏之、”短大入学前に開始するキャリア教育としての情報教育”、大学 ICT 推進協議会 2011 年度年次大会 要旨集 C5-6 (2011 年 12 月 8 日)
- (9) 小棹理子・石井卓也・岩崎敏之・飯塚順一、”入学前に開始するキャリア教育の評価の試み”、日本教育工学会研究報告集 JSET11-5、pp79-82 (2011)
- (10) 小棹理子・岩崎敏之・飯塚順一・石井卓也、”短大入学事前授業のキャリア教育としての効果”、日本教育工学会研究報告集 JSET12-1、pp293-296 (2012)

(1) まとめ

本補助事業の目的は、湘北短大型の入学事前授業を確立させて、早期に進路が定まってしまう生徒の勉学意欲の維持と、短期大学での勉学への動機付けを行うことである。これにより、2年間という限られた時間を最大限活用し、本学の教育目的である「社会に出てほんとうに役立つ人材の育成」に資することを目指している。四学科それぞれの専門性をもった人材を社会に送り出すためには、大学では高校での学習内容とは異なり、職業をもつ一般社会人が備えるべき基礎能力を身につけることが重要であることを早期に理解させることが不可欠である。そのために、高校3年次の進路決定後に入学事前授業を行うのである。具体的には、高大連携高校からの入学予定者対象に開講していたリベラルアーツ単位科目である「コミュニケーションリテラシー」を拡大発展させる。そのために、規模拡大のみならず、高校－大学－産業界の連携により内容の強化・最適化が必要である。

平成23年度は、「コミュニケーションリテラシー」を24年4月入学予定者（474名）ほぼ全数を対象として規模拡大して開講することを目指した（注：22年入学予定者のうち受講者186名、23年入学予定者446名申し込みに対し、東日本大震災のため半数の196名に対し実施）。多様な入学予定者に対し開講するため、内容と遠隔地からの受講者への対応を昨年度より検討してきた。23年度は、部分的なe-ラーニングを導入し、教材と授業内容を確定することを目標とした。

具体的には、21-22年度事業実施の結果から得られた下記の知見を基に実施内容を計画した。

① 高大産連携フォーラムなどから得られた知見

- ・ 体験型の小規模PBLは、協調性や問題解決能力を高めるのに効果がある。

② 米国研修で得られた知見

- ・ e-ラーニングは活用方法により効果に差が生じる（Accelerated Learning）。

③ アンケート調査や客観的な評価となる検定などの検証結果から得られた知見

- ・ 入学前授業により一部の社会人基礎力に向上が見られたが、短大型入学前教育をより一層充実させるためには、自学自習による一般常識的な知識の拡大や、非言語能力の向上努力が必要である。

④ 国内研修や他大学との交流により得られた知見

- ・ 本学と類似した教育内容や教育環境を持つ九州の中村学園大学短期大学部は、22年にWebカルテシステム”N-cats”を開発しており、ドリル形式のWeb-ラーニング機能を備えている。

以上を踏まえ、23年度は以下の課題に取り組んだ。

(a) 500人規模受講生対応の実施体制の確立（多様な受講生への対応、効果の検証）

(b) 内容の確定（教材を確定する）

上記課題を解決するために、下記を実施した。

① 内容を整備して一部e-ラーニングコンテンツを取り入れた科目を構築した。これにより、反復学習を可能にすると同時に、遠隔地からの受講生への対応性を向上した。

② 内容を確定するために、下記を行った。

- ・ テキストを作成した（「大学生のための基礎力養成ブック」丸善出版株式会社より発刊）
- ・ 他の短期大学のシラバスなどの調査を行った。
- ・ 研究会等でさまざまな教育方法を模索した。
- ・ 表現教育で先んじる米国シカゴ・シェイクスピアシアターの教育部門の視察研修にて学んだ。

③引き続き客観的な評価を導入し、事業効果の検証を行った。また、入学事前授業科目が確立することにより、後継科目や、基礎科目の内容を再検討し、「就業力育成科目群」を設けた。「キャリアベシックス(言語・非言語)」、「キャリアブラッシュアップ」など新規科目が導入された。

(2) 今後の課題

① 短期効果・長期効果の検討

「社会で本当に役立つ人材」を2年間で育成する必要があるため、上記で述べたように、キャリア教育の入門科目とも言うべき入学事前授業の充実に取り組んできたが、依然として入学者の基礎学力（ここでいう基礎学力は、高等学校までに修得しておくべき基礎知識やスキルを意味する）の低下の問題、さらには、社会状況の変化に伴う対人関係力（コミュニケーション力）などを包含するジェネリックスキル（社会人基礎力）の不足が指摘されている。とくに社会人基礎力は、個人の態度や行動として顕れる力であるので、一朝一夕に獲得することは難しい。

社会人基礎力の向上にこの授業が効果的かどうかを評価するために、筆者らは社会人キャリア力アセスメントなどを導入し、受講者自身に自己評価を行わせ、振り返りによる自己成長を促す効果を狙うと同時に、他者との比較による客観的な評価の時間推移を測定してきた。この結果、短期で「前に踏み出す力」（他人に対する働きかけ力）や、「チームで働く力」（発信力、傾聴力、状況把握力）などにおいては有意な伸びが認められることがわかった。その一方で、「考え抜く力」などの育成には、2ヶ月という期間では不足であることが示唆された。日本語力や計算力、時事問題においても2ヶ月以上の長期にわたる知識の積み重ねが必要であることが明らかになった。

② 学業成績との関連性の検討

平成21年入学生564人のうち、「コミュニケーションリテラシー」を受講したのは110名であった。入学生全員の1年次と卒業時の学業成績の変化の調査を行った。より具体的には、1年次と卒業時（累計）成績をGPAで表し、受講生グループと非受講生グループの平均値を求めた。得られた平均値に有意な差があるかどうかは、F検定を行い、等分散かどうかを確認した後、片側または両側のt検定により決定した。その結果、3学科において1年次、卒業時において「コミュニケーションリテラシー」受講者のほうが非受講者よりも概して高いGPA値を得ているが、いずれも有意差とは言えないことがわかった。しかし、これはあくまでも平成21年度入学生のみに対する結果であり、信頼性において十分とはいいがたく、今後さらにその効果を検証する必要がある。

③ 外部評価の導入と授業内容の検討

授業内容をブラッシュアップして行くためには、社会（就職先）からの評価が必要であろうと考え、本学学生にもっとも必要とされている力は、「社会人としての幅広い一般常識」と「企業やビジネスの仕組みの理解」や、「新しい価値を生み出す力」と「他人に働きかけ巻きこむ力」であることがわかった。これらを踏まえ、知識・技術の伝達だけでない授業内容を再検討して行くことが重要であろう。

以上

謝辞

本事業遂行にあたり、リベラルアーツセンターメンバー、e-ラーニング検討ワーキング・グループメンバー、図書館、財務部、総務部、教務部、キャリアサポート部、入試広報部、ICTセンターに種々ご協力をいただきました。また、ICTセンター長 内海 太祐准教授、インターンシップセンター長 飯塚 順一准教授にたいへんお世話になりました、ここに御礼申し上げます。

選定年度:平成21年度

事業推進代表者 学 長 米澤 健一郎
事業推進責任者 リベラルアーツセンター 教授 小棹 理子(情報メディア学科)

事務主担当

入試広報部入試広報室・課長補佐・北野 俊之

TEL 046-247-3131

FAX 046-247-3667

E-mail kitano@shohoku.ac.jp

事務副担当

財務部・主任・山口 良治

平成 21 年度 GP 申請チーム

米澤 健一郎 山本 滋
佐藤 清彦 小棹 理子
岩崎 敏之

他 LA センターメンバー

野口 周一(保育学科) 伊藤 善隆(総合ビジネス学科)
小泉 綾(生活プロデュース学科)
山崎 元(教務課長) 高橋 可奈子(図書館)

LA スタッフ

赤羽 さや香

発行 平成 24 年 3 月 15 日